



多言語社会における少数民族の変容 ―現代中国のモンゴル族を中心に―

阿拉騰巴特尔

(Degree)

博士（学術）

(Date of Degree)

2010-03-25

(Date of Publication)

2010-03-31

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

甲4868

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1004868>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



博 士 論 文

多言語社会における少数民族の変容
ー現代中国のモンゴル族を中心にー

平成 21 年 12 月

神戸大学大学院人間発達環境学研究科
アルタン・バートル

目 次

序章 研究課題と方法	1
第 1 節 本研究の課題	1
第 2 節 先行研究の検討.....	7
第 3 節 対象地域の選定と本研究の意義	10
第 4 節 調査の概要と本論文の構成	13
第 1 章 各調査地の概況と諸個人の生活史	17
第 1 節 ホルチン区都市部	17
第 1 項 ホルチン区都市部の概況	17
第 2 項 ホルチン区都市部在住者の基本属性・生活史	18
第 2 節 農耕地域	20
第 1 項 Ma 村と Nb 村の概況	20
第 2 項 Ma 村と Nb 村在住者の基本属性・生活史	22
第 3 節 牧畜地域	26
第 1 項 B 鎮の 3 つの村の概況.....	26
第 2 項 B 鎮の 3 つの村の在住者の基本属性・生活史	27
第 4 節 小括	28
第 1 章の図表 30	
第 2 章 現在の生活過程	36
第 1 節 ホルチン区都市部在住者の現在の生活過程	36
第 2 節 農耕地域の Ma 村と Nb 村在住者の現在の生活過程.....	40

第3節 牧畜地域 B 鎮の3つの村の在住者の現在の生活過程	44
第4節 小括	47
第2章の図表	49
第3章 子どもの教育－学校選択と教育投資－	57
第1節 ホルチン区都市部	57
第2節 農耕地域の Ma 村と Nb 村.....	62
第3節 牧畜地域 B 鎮の3つの村.....	67
第4節 小括	69
第3章の図表	71
第4章 社会意識.....	75
第1節 経済格差に関する社会意識	75
第1項 大都市・沿海部と内陸部の格差.....	75
第2項 都市・農村の格差.....	76
第3項 漢族とモンゴル族の格差	78
第4項 同地域内部での階層格差	78
第2節 言語に関する社会意識	79
第1項 内モンゴル東部のモンゴル語方言の特徴	80
第2項 モンゴル族における漢語の使用に関する社会意識	81
第3項 モンゴル語の方言に関する社会意識	82
第4項 言語と民族の関係に関する社会意識	83
第3節 文化習慣と「民族性」に関する社会意識.....	84
第1項 文化習慣に関する社会意識.....	84
第2項 「民族性」に関する社会意識	85

第4節 宗教・歴史・地域に関する社会意識.....	87
第1項 宗教に関する社会意識.....	87
第2項 歴史に関する社会意識.....	87
第3項 地域に関する社会意識.....	89
第5節 小括	90
第4章の図表	93
第5章 考察.....	95
第1節 言語と職業・教育	95
第2節 日常生活と口語の世界	98
第3節 民族意識をめぐる問題	101
第4節 今後の課題.....	103
参考文献・資料.....	105
謝辞	110

序章 研究課題と方法

第1節 本研究の課題

本論文は、内モンゴル東部におけるモンゴル族の生活・言語・教育の実態を分析することを通して、現代中国の多言語社会における少数民族の変容の一端を解明するものである。

中国では、民族的マジョリティである漢族以外に、55の民族の存在が中央政府によって承認されている¹。この55の民族は通常、少数民族と呼ばれる。国民国家が国内におけるエスニック集団の存在を積極的に承認し、エスニック集団の数を政府主導で確定するのは稀なことといえる。しかし、中国においては近現代の国家・社会の形成の過程で、その「多民族性」が極めて重要な意義をもってきた。そこで中国は、そうした数少ない国家の一つとなったのである。

中国における近代的な「多民族性」の起源は、18世紀の清朝時代にまでさかのぼることができる。18世紀の清朝は、満洲を始め、中国本土、モンゴル、チベット、回疆（新疆）などの地域にまで勢力を拡大し、最大の版図に達した。またそのうち、モンゴル、チベット、回疆を「藩部」（tulergi）とよび、間接的に統治していた²。こうした清朝の統治領域のほとんどは、近代中国に領土として受け継がれた。そこで近代中国における少数民族の原型が、清朝時代まで溯って見るのできるのである。また、18世紀には、中国国内の広域交易が活発化し、農耕に適していなかった内陸乾燥地帯でもトウモロコシ、ジャガイモなどアメリカ大陸伝来の作物の栽培が可能になった。そこで、急増した漢族人口が藩部

¹ 「漢族」、「モンゴル族」などのような「〇〇族」という名称は、中国政府が1950年代以降の民族識別工作によってカテゴリー化した公定民族を表す。厳密に言えば、それ以前の時代に用いられていた「漢人」・「漢民族」・「モンゴル人」・「モンゴル民族」、現在ネーションとして使われている「モンゴル人」、エスニック集団として使われている「モンゴル民族」、および日常の文脈で使われている「漢人」・「モンゴル人」などの呼称とは異なる概念である。本論文では、基本的に「漢族」・「モンゴル族」といった表記を使うが、特にあいまいな理解をもたらしえないと考えられる場合、「漢人」・「モンゴル人」といった表記も使う。なお、調査対象者の語りを引用する場合は、「mongyul kümün」・「mongyulčud」を「モンゴル人」、「mongyul ündüsüten」を「モンゴル族」、「kitad kümün」・「kitadčud」・「kitad ud」を「漢人」、「kitad ündüsüten」を「漢族」、属格を表す「mongyul」を「モンゴル人の」、属格を表す「kitad」を「漢人の」と区別して表記する。

² 清朝は、満洲と中国本土を合わせて「dulimbai gurun」（満洲語、漢語では「中国」）とよび、直接統治を行った。それに対し、チベット、モンゴル、回部を「tulergi」（満洲語、漢語では「外藩」または「藩部」）とよび、理藩院を通して間接的に統治していた。宮脇（2002）220－221頁、岡田（2004）15頁、茂木（2001）55－56頁、加々美（2008）47頁。

に移入し始めた³。さらに 19 世紀後半になると、イギリスとロシアの内陸アジアへの進出を警戒した清朝は、藩部への直接的な政治関与を強め、藩部への積極的な移民政策に乗り出した⁴。従来、同じ帝国の治下において漢族の居住地域とは別に、独自の政治・社会システムを保持してきた藩部は、国民国家の一元的システムに再編することを余儀なくされた。そして、まさにこうした一元化のプロセスの中で、近代的な意味での多民族性が成立し、「人口の多い漢族 対 人口の少ない少数民族」という構図が実質的な意味を持ち始めた。実際、「少数民族」ということばは 20 世紀になって初めて歴史に登場した。このことばの生成も、こうした一元化のプロセスに起因するものと考えられる⁵。帝国の多民族性のゆえ、それをいかに統合し、一元的な統治を実現するかは、清朝末期の政治上の最大の難問となったのである。清朝を倒して樹立された中華民国もまた、「五族共和」⁶の理念を唱え、自らを国民国家としながら、その内部の多民族性を否定できなかった。

さらに社会主義体制を確立した中国共産党は、反帝国主義のスローガンを掲げ、民族解放闘争を展開してきた。共産党の主張する民族解放には、二つの意味が含まれている。すなわち一つは「中華民族」の半植民地状態からの独立であり、いま一つは「国内における諸民族間の平等」の実現である⁷。そこで、中華人民共和国成立直後、共産党は「民族識別工作」に乗り出し、多様なレベルでの民族自治地域を次々と設立した。国内の少数民族を識別し、積極的に承認する政策は、社会主義国家の反システムの性格からみると、当然のことではある。ただし、それは「国民国家」というシステムの要素によって縁取られたものであり、それゆえ民族問題においても、新中国が「一国社会主義」の理念的な矛盾を内包せざるをえなかったことは否定しがたい。中国の民族識別工作では、スターリンによる「民族」定義——言語、地域、経済生活、心理面の 4 つの要素による定義——が一応の基準とされた。ただし実際には、それらのすべての条件を満たさなかった一部のエスニック集団も民族として承認された⁸。

このようにして成立した中国の近代的多民族性は、1980 年代以降、改革開放および市場

³ 斯波（1992）139－140 頁、平野（2004）7 頁、上田（2005）407－414 頁、吉田（2007）10－14 頁。

⁴ 『内蒙古大辞典』編委会（1991）82 頁、平野（2004）225－264 頁、吉田（2007）13 頁。

⁵ 岡本（1997）によると「少数民族」ということばはパリ講和会議ころに日本で作られ、後に中国に取り入れられた。

⁶ 「五族共和」とは、漢（漢人）、満（満洲人）、蒙（モンゴル人）、回（トルコ系イスラーム教徒）、蔵（チベット人）の 5 つの種族を一つにして、一「国民＝国家」（nation）にするという発想である。これらの種族は、清帝国を構成した 5 つの地域、すなわち中国本土、満洲、モンゴル、回疆、チベットとも対応する。松本（1999）82－85 頁。

⁷ 松本（1999）243－254 頁、小川（2001）33－38 頁。

⁸ 王（2005）64－73 頁、加々美（2008）98－104 頁。

経済化により、「現代」という新たな転換期に突入することに伴い、さらに大きな変貌を遂げ始めた。転換期としての現代を特徴づける最も典型的な現象は、国民国家の枠を超えたグローバル市場、および多国籍企業を代表とする新たな世界的なヒエラルキーの出現である⁹。グローバル市場に次第に巻き込まれつつある中国では、「能力主義」が社会の隅々まで浸透し、資本主義に抵抗する反システムの要素がますます希薄になっていく。社会主義体制の下で行なわれてきた少数民族への政策的配慮・優遇も、一元的な市場経済化の波の前で効果を収めるのは難しくなった。一国内市場における漢語の優位性が顕著になり、国家の政策的な普及以上に市場が少数民族の漢語使用を促しているのである。それと同時に、近代的な生活様式も少数民族に浸透しつつある。少数民族言語の実用性が低下し、少数民族文化も市場への適応なしに存続することがますます困難になってきた。また、市場経済化の進展により、地域・階層間の経済格差が急速に拡大してきた。これに伴い、従来、比較的同質性が高かった少数民族の居住地域の内部でも社会空間が多様化しつつある。

こうした変容が最も顕著な地域の一つとして、内モンゴル自治区がある。内モンゴル自治区は中国の北部に位置し、面積は 118.3 万 km² である。地理的には、北東から南西にかけて、中国の 8 つの省・自治区と隣接し、北部はモンゴル国、ロシアと境を接している（図 0-1）。内モンゴル自治区は中国初の少数民族自治区であり、1947 年に内モンゴル自治政府として発足した。2000 年の第 5 次国勢調査によると、自治区総人口は約 2,332 万 6 千人、うち漢族が全体の約 79.2%（1,846 万 6 千人）と最も多く、モンゴル族が約 17.1%（399 万 5 千人）でこれに次ぐ¹⁰。残る 3.7%は満州族・朝鮮族など、47 の民族から成っている¹¹。

内モンゴルでは、歴史的にモンゴル系の民族が人口の多数を占めていた。16 世紀、モンゴル高原には、遊牧生活を基盤とした数多くの部族が存在し、それらの部族は主に、チンギス・ハーンおよびその兄弟たちの子孫にあたるボルジギン家の貴族によって支配されていた。各部族は、チャハル部¹²の領主を宗家とし、緩やかな連合体を保っていた¹³。1635

⁹ 浅野（1997）14-15 頁。

¹⁰ 『内蒙古自治区 2000 年人口普查資料』46-47 頁。

¹¹ 『内蒙古自治区 2000 年人口普查資料』46-109 頁。

¹² 15 世紀末にチンギス・ハーンの直系子孫ダヤン・ハーンがモンゴル高原の諸部族を統一して 6 個のトゥメン（万人隊）と呼ばれる大集団に分けた際、ハーン直轄のトゥメンに編入された部族集団を「チャハル」（*čaqar*）と総称した。清朝時代、チャハル八旗、チャハル四牧群などが設置された。清の滅亡後、1914 年にチャハル八旗は周辺のチャハル系遊牧領はチャハル特別区とされ、1928 年にチャハル省（察哈爾省）が置かれた。中華人民共和国成立後、チャハル省は廃止され、北部は内モンゴル自治区に併合され、南部は河北・山西両省に編入された。宮脇（2002）150 頁、247 頁、孫・蘇利婭主編（2004）34 頁。

年、チャハル部の満州人勢力・後金（後の清朝）への降伏をきっかけに、満州人はゴビ砂漠以南のモンゴル諸部を支配下に入れた¹⁴。19世紀半ば以降、漢族の知識人はゴビ砂漠の南のモンゴル諸部を「内モンゴル」と総称するようになった。これに対して、1691年に清朝の支配下に入ったゴビ砂漠の北のハルハ部族は「外モンゴル」と呼ばれた¹⁵。外モンゴルでは、清朝支配下の1911年および中華民国時代の1921年の2回の独立運動を経て、1924年にソ連の支援を受けて、社会主義政権としてのモンゴル人民共和国が樹立された。これは、今日のモンゴル国の前身にあたる。一方、当時の内モンゴル地域は中国領内にとどまり、その主要な部分は周辺地域と一体となり、今日の内モンゴル自治区を形成した¹⁶。

図0-1 内モンゴル自治区と周辺地域



出所：『中国地図冊』第3版（星球地图出版社2007年）6頁、54－55頁をもとに筆者作成。

清朝時代内モンゴルの範囲は、『大清帝國全圖』第3版（商務印書館1908年）第24図を参考。

¹³ Жамсран ほか(1996)5頁、宮脇（2002）136－159頁。

¹⁴ 宮脇（2002）175－177頁。

¹⁵ 宮脇（2002）222頁。

¹⁶ 清朝時代の内モンゴルは、ジョソト、ジョー・オダ、ジリム、シリム・ゴル、オラーンチャブ、イフ・ジョーの6盟から構成されていた。現在の内モンゴル自治区は、概ね清朝時代の内モンゴルと、フルンボイル、アラシャン旗、エズネー旗、チャハル12旗群、帰化城トゥメドなどの周辺地域を合わせた地理的範囲に相当する。ただし、後述のようにジョソト、ジョー・オダ、ジリム3盟の一部は、今の東北3省に管轄されている。

清朝時代まで、モンゴル族の多くは遊牧業を営み、移動生活をしていた。そこで、モンゴル族の社会では、定住を前提とする農耕地域や都市はほとんど発展してこなかった。清朝政府も長い間、中国内地の農民が万里の長城を越えて開墾することを禁止し、「封禁」政策を実施していた。しかし 18 世紀から、中国内地の過剰労働力が万里の長城を越えて開墾する現象がしだいに多くなった¹⁷。さらに 1901 年、「移民実辺」政策が実施され、清朝政府はこれまでの「封禁」政策を一変し、モンゴルへの移民と開墾を積極的に支持するようになった¹⁸。そのため、中国本土に近い内モンゴルでは、漢族の移入民が急増して農耕地が拡大し、遊牧地は急速に減少した。そこでモンゴル族の多くが遊牧生活を放棄し、定住牧畜、さらに農耕を営むようになった。また農産物・畜産物などを交換する定期市を中心に都市も形成されはじめた¹⁹。しかしそれでもモンゴル族の都市居住者の比率は長い間ほとんど増加せず、1979 年時点でも、わずか 4.3%（8.7 万人）にすぎなかった²⁰。

こうした状況に激的な変化をもたらしたのが、中国の改革開放である。特に 1990 年代以降、市場経済化の進展に伴い、都市と農村²¹の経済格差が拡大し、モンゴル族の都市への定住化が進展した。2000 年時点での都市居住率は 13.7%（54.9 万人）に達した²²。都市的職業に従事するモンゴル族の人口も増加してきた²³。また学歴が重要な文化資本とみなされるようになり、モンゴル族の進学率も向上した²⁴。

¹⁷ プレンサイン（2003）26 頁、吉田（2007）10 頁。

¹⁸ 『内蒙古大辞典』編委会（1991）82 頁、吉田（2007）13 頁。

¹⁹ オヨーンゲレル（2007）298－299 頁。

²⁰ 孫・蘇利婭主編（2004）233 頁。

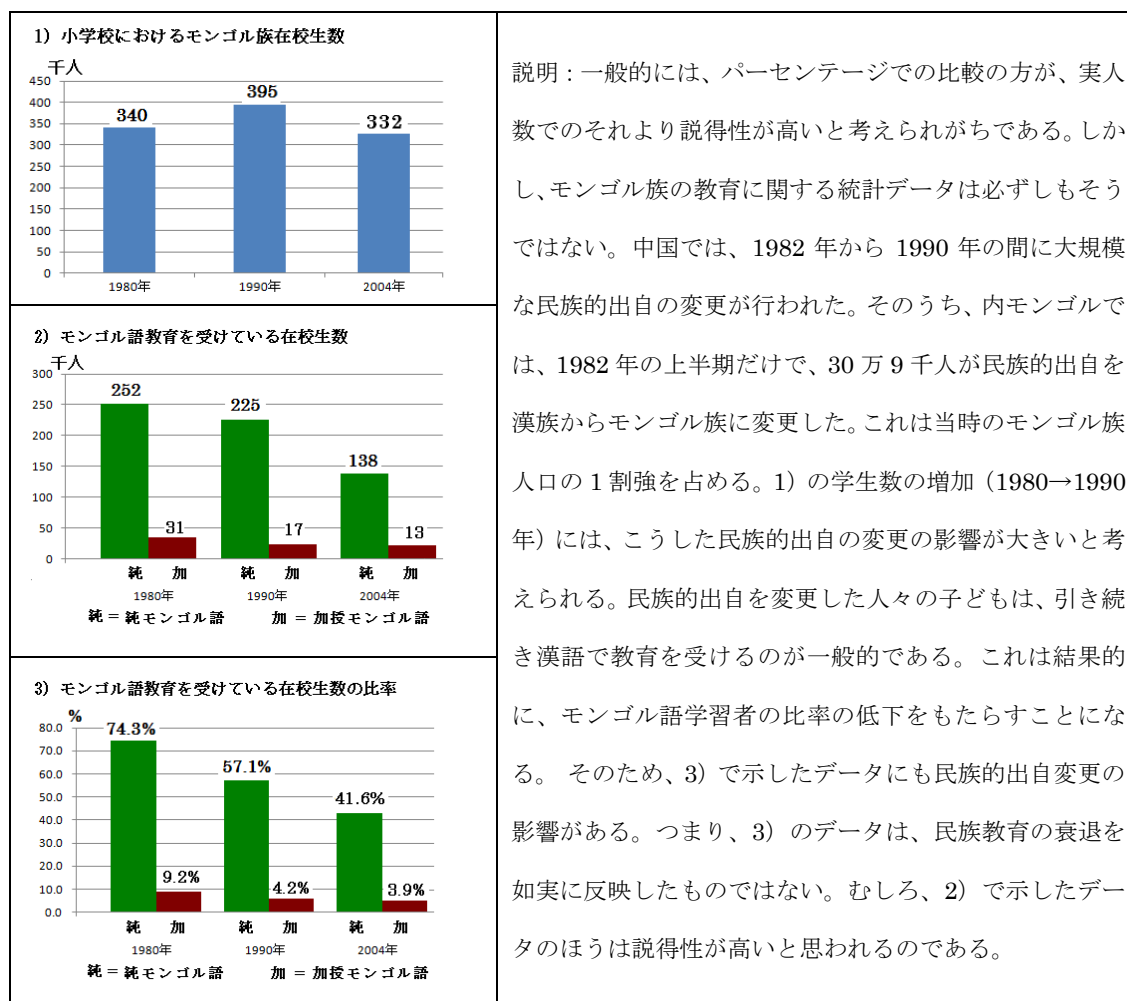
²¹ 本論文で使う農村という概念は、農耕地域と牧畜地域両方を含む。

²² 『内蒙古自治区 2000 年人口普查資料』127 頁。

²³ 内モンゴルでは、都市的職業に従事するモンゴル族の就業人口は 1982 年の約 3.1 万から 2000 年の 5.6 万へと増加した。ただし、ここで同時に留意しなければならないことは、1982 年代以降、農耕・牧畜従業者数も一貫して増加していることである。したがって、就業人口に占める都市的職業従事者の比率は、ほとんど変化していない（1982 年 25.8%、2000 年 27.4%）。宋迺工編（1987）359 頁、『内蒙古自治区 2000 年人口普查資料』1268－1279 頁。

²⁴ 2000 年現在、6 歳以上の内モンゴルのモンゴル族人口の平均教育年数は 7.98 年、1990 年より、1.3 年長くなった。全国のモンゴル族では、短大以上の教育を受けた人口の比率は、1990 年の 2.49%から 2000 年 5.23%へと増加した。孫・蘇利婭主編（2004）205 頁、中華人民共和国国家民族事務委員会「蒙古族人口」。

図 0-2 内モンゴル自治区の小学校におけるモンゴル族教育の変遷（1980 年、1990 年、2004 年の比較）



出所：1980 年、1990 年のデータは岡本（1999）228 頁。2004 年のデータは『内蒙古統計年鑑』（2005）464 頁、内蒙古民族教育網「内蒙古自治区民族教育工作情况汇报」。

こうしたなか、市場での漢語の有用性が高まり、モンゴル語の実用性が低下し、モンゴル族でも漢語の使用率が上昇してきた。モンゴル語で学校教育²⁵を受けるモンゴル族の生徒数は激減しつつある²⁶（図 0-2）。2004 年現在、13.8 万人のモンゴル族の子どもがモ

²⁵ 教授言語からみると、内モンゴル自治区の学校教育は「普通教育」と「民族教育」に区分できる。「普通教育」は、学習者を漢族と暗黙に想定しており、学校で少数民族の言語を教えない。一方の「民族教育」は、学習者を少数民族と暗黙に想定しており、少数民族の言語を教えているが、同時に国家語である漢語も教える。モンゴル族の場合、「民族教育」はさらに「純蒙文教育」と「加授蒙文教育」2つの類型に分かれる。「純蒙文教育」では、各科目の授業をモンゴル語で行い、それにプラス漢語の科目を教える。一方の「加授蒙文教育」では、モンゴル語以外の科目はすべて漢語の教材を使い、漢語で授業する。本論文では、「純蒙文教育」を「純モンゴル語教育」、「加授蒙文教育」を「加授モンゴル語教育」と表記する。

²⁶ 中国では、民族的出自と言語教育との関係に関する法律上の規定はない。少数民族は漢語で教育を受けることもできれば、逆に漢族は少数民族の言語で教育を受けることも可能である。

ンゴル語で教育を受けているが、1990年の22.5万人に比べ、4割以上減少した²⁷。また、小学生向けのモンゴル語教材の購入総数も、1990年の64,570冊から2003年の25,749冊へと激減している²⁸。この現象は、「モンゴル語消滅の危機」²⁹、「民族教育の最も深刻な問題」³⁰などと表現されており、モンゴル族の言語と教育は大きな転換期にさしかかっているのである。

第2節 先行研究の検討

本節では、先行研究の到達点と課題を検討しよう。

まず、モンゴル族の言語と教育に関する研究は、1990年代から少しずつ現れてきた。しかしその多くは、単なる問題提起の段階にとどまっている（烏蘭図克（1997）、フレルバートル（1997）、Bilik（1998）、金（2000）、思沁夫（2004）、丁・郭（2007）など）。

内容に立ち入った研究が現れるのは、2005年以降である。具体的には、①「中国の国民統合」と「少数民族に対する優遇措置」という2つの観点からモンゴル族の言語・教育の問題を分析した研究（ハス額爾敦（2005））、②教科書の内容に焦点を当てた分析（ハスゲレル（2005））、そして③多文化主義からの接近を試みた研究（ソロンガ（2006））がある。ただし、それらにおいても、モンゴル族が実際におかれている幅広い社会環境や生活の変化、とりわけモンゴル族の内部における経済格差の拡大などとの関係はあまり考慮されていない。

総じて、モンゴル族の言語・教育に関する研究はいまだに初歩的な段階にあり、十分に深まった論点を提起できる水準に達していないのが現状といえよう。

そこでここではさらに視野を広げ、モンゴル族以外の少数民族、中国の少数民族全体、および中国以外の諸国におけるエスニック・マイノリティの言語と教育に関する研究を見てみよう。

そうした研究は膨大に存在するが、ごく大まかに以下の2種類に分類できる。

一つは、少数民族の言語・教育政策に焦点をおいた「政策論的アプローチ」である。政

²⁷ 内蒙古民族教育網「内蒙古自治区民族教育工作情況匯報」、岡本（1999）228頁。

²⁸ ソロンガ（2006）225頁。

²⁹ Asimura（2001）。

³⁰ 烏蘭図克（1997）。

策論的アプローチは、政府の公式統計データの分析、学校教育および教育当局の実態を把握することを通して、政策実施のメカニズムを解明し、さらにその成果と問題点について考察を行っている。たとえば、カナダやオーストラリアの多文化教育の研究(中島(1998)、柳沢(2002)、古谷(2005)など)、旧ソ連圏におけるマイノリティ教育の研究(森岡(2005) Bakhronova(2008)など)、東南アジアの少数民族教育の研究(松井(2004)など)、および日本におけるニューカマーの研究(ハタノ(2006)など)などにおいて、典型的な政策論的なアプローチが見られる。中国の少数民族教育に関する政策論的アプローチでは、国民統合と民族教育の対立・融合という視点から展開されているものが特に多い(中島(1985)岡本(1999)、小川(2001)、篠原(2002)、李(2005)など)。

国家または地域の民族政策は、少数民族教育にたしかに大きな影響を与える。そのため、政策論的なアプローチは少数民族言語・教育の研究にとって重要な意義をもつ。しかしこれらの研究においては、政策が重視される一方、民族政策にたいする少数民族の側の主体的対応を捉える視点が希薄で、多くの議論は一方的な「政策決定論」に陥りがちである。

さて、いま一つは、再生産論の諸潮流によるアプローチである(宮島(1999)、志水・清水編著(2001)、前田(2002)など)。再生産論は、社会における階級・階層的格差の形成とその正当化のメカニズムを分析することを中心に展開されている。そこで、エスニック・グループ間の階層的生成と再生産に注目する。これは、行政による政策だけでなく、経済・社会的な階層構造を、しかも諸個人の文化や主体的選択まで視野に入れて捉える分析枠組といってよい。しかし、こうした再生産論は階層構造の絶対化・固定的把握に陥りがちで、階層構造を再生産する主体性は把握しえても、逆に生活の営みに根ざす階層構造の変革の主体性を提示しがたいという限界がある。

そして、こうした政策論的アプローチと再生産論の研究の双方と親和性があり、場合によっては両者の議論の直接の立脚点にもなっているのが、多文化主義の諸潮流である。多文化主義の理念の下では、異なる文化を持つ社会集団が「対等な立場」で扱われ、集団間の「文化の違い」が尊重されるべきとされる。こうした理念とそれに基づく実践はいうまでもなく、単一文化主義を前提とする国民国家のイデオロギーの克服にあたって、一定の有効性をもつ。しかし多文化主義においては、既存の文化の固定化が安易に行われ、文化を相対化し、変容させる人間生活の営みに関する考察が欠如しているといわざるをえない。そのため、「多文化共存」はしばしば、社会の現状からかけ離れた言語・教育の理想像として描かれがちである。再生産論的研究も異なるエスニック集団間の階層分化に着目しな

がら、同じエスニック集団の内部における格差や階層分化から目をそらしている場合が少なくない。

格差・階層分化が文化に対してもつ意味の看過は、単に言語・教育の研究に限らず、民族意識・文化研究においてもしばしばみられる。

現代中国におけるモンゴル族の民族意識・文化の変容を扱った研究もまた、例外ではない。現代中国におけるモンゴル族の民族意識・文化に関する研究も、全体としてみれば、まだ萌芽的な段階にある。しかし、厳密な現地調査を行った2つの注目すべき研究——シンジルト（2003）と温都日娜（2007）——がある。シンジルト（2003）は、中国青海省河南モンゴル族自治県のモンゴル族における民族意識の構造と変化を、現地の人々による「モンゴル族（ソグ）」についての語りを分析することを通して、明らかにした。この研究は、民族をめぐる自他認識が社会的・文化的文脈によって多様な形で発現し、それらが社会変動に伴い変化しつつあることをダイナミックに捉えている。また温都日娜（2007）は、内モンゴル東部の赤峰市におけるモンゴル族・漢族の「族際婚姻」に関する研究を通して、現代中国における「民族（ミンズウ）」には、血統的民族、法的民族、文化的民族、社会的民族といった4つの要素があり、4つの要素はお互いに影響しあって新たな「民族（ミンズウ）意識」を形成すると論じている。これらのアプローチは、現代中国におけるモンゴル族の変容を把握する上で重要な示唆を与えてくれる。しかしこうした研究においてもやはり、モンゴル族内部における格差拡大ないし階層分化という現実への言及は、ほとんどない。そこで、民族意識における階層的な要因をほとんど把握できていないのである。

このような限界は、こうした先行研究が、文化・社会的要素の変容を、階層的・地域的に構造化・多元化された現実の人々の生活過程やその変容との関連を明確にしないまま、把握しようとしていることに起因すると思われる。

以上をふまえ、本研究では、生活過程論的アプローチという方法論を提出したい³¹。生活過程論的アプローチは、人々の生活過程の実態から、言語・教育の問題に接近する。従来の政策論的アプローチでは、国家・民族などのマクロな次元のカテゴリーが主な考察の対象になるが、生活過程論的アプローチでは、個人・家族・地域といったミクロな次元のカテゴリーが考察の主な対象となる。こうした具体的な生活の文脈のなかで、言語・教育問題が位置づけられ、相対化されるのである。もちろん、生活過程論的アプローチは、決

³¹ 生活過程論については布施（1976）、浅野（1995）を参照。

して政策を無視し、生活世界における国家・民族などの影響を否定または排除するものではない。むしろそれらの影響が部分的であり、それらを対象化・相対化する人々の生活の主体性が現実存在することを証明し、そうした立場から教育や言語の問題を捉え返すのである。また従来の再生産論とは異なり、生活過程論的アプローチは、再生産にとどまらない生産的・変革的な文化変容を重視する。現実の生活過程の変容に伴い、新たな教育や言語の特徴がいかに関形成され、そのことがいかなる社会的意味をもつのかを考察する。そして生活過程論的アプローチは、近年の先端的なモンゴル族の民族文化研究と同様、新たな民族文化形成の営みを現実即して把握する。ただし、そうした民族文化研究とも異なり、新たな民族文化形成を、諸階層・諸地域の現実の生活過程に根ざした多元化・複合化のプロセスとして把握する³²。

第3節 対象地域と本研究の意義

さて次に、本研究の対象地域である内モンゴル東部について概観しよう。

「内モンゴル東部」とは、近年、モンゴル学やモンゴル民族に関連する地域研究の分野において、注目され始めた地域概念である。内モンゴル東部の地理的範囲については、下記の3つの捉え方がある（図0-3）。

(1) 現在の内モンゴル自治区東部の4つの市・盟³³を合わせた地域。すなわち赤峰市、通遼市、ヒンガン盟、フルンボイル市の3市1盟を指す。これらの地域は中国の東北3省に隣接しており、日本の大陸進出の時代、「満洲国」の版図に組み込まれたことがある。歴史的に東北地域とのかかわりが深い。そのため、広義の東北地域の一部として捉えることもある。

(2) 赤峰市、通遼市、ヒンガン盟の2市1盟。(1)の地理的範囲からフルンボイル市を

³² 社会学においては、階層を連続的に測定することはよくある。その場合、もっとも広く使われているのは量的分析である。量的分析は、確かに「客観性」という長所をもち、それゆえ、われわれの社会認識にとっては重要な役割を果たしている。しかし、量的分析は決して万能の女神ではない。その「客観性」はあくまで自然科学的な発想に基づいたものであるため、社会をしばしば、顔の見えない個人の集まりとして捉えがちである。そのため、いくら精緻化した量的分析にも個人の生活過程や文化の営みまで行き届くことができないという大きな限界がある。そこで、生活過程論に根ざした本研究では、階層概念を量的ではなくカテゴリーとして捉えることにする。そして階層の操作概念として設定したのは、都市的職業と農業・牧畜業を主軸とした職業階層である。

³³ 盟（aimay）は内モンゴル特有の地区級行政単位である。

除いた地域である。これらの地域は大興安嶺山脈の東斜面とそれに続く嫩江平原・西遼河平原の西部に存在する。大興安嶺山脈より西の本格的な意味でのモンゴル高原とは、自然風土と生活習慣が大きく異なる³⁴。18世紀以降、この地域のモンゴル族は漢式農耕を受容し、定住化が進んだうえ、言語的にも漢語の影響を大きく受けてきた。それは、遊牧の伝統が色濃く残され、言語的に漢語の影響あまり受けなかった内モンゴル中西部のモンゴル族とは対照的である。北のフルンボイル地域のモンゴル族は大興安嶺山脈の西に分布しており、生活・文化の面で内モンゴル中西部に近い特徴があるため、モンゴル族の側の一般的な認識では、フルンボイル市は内モンゴル東部には含まれない。

(3) 赤峰市、通遼市、ヒンガン盟の2市1盟に東北3省のモンゴル族集住地域を加えた地域。歴史的には、清朝時代内モンゴルの東3盟すなわちジリム盟、ジョー・オダ盟、ジョソト盟の地理的範囲に相当するが、その面積の半分近くが現在の東北3省の管轄下にある。ただし地域研究において、いまだに内モンゴル自治区東部地域のモンゴル族に近い文化が残されているという理由から、東北3省のモンゴル族集住地域は内モンゴル東部に加えられることがある。

本研究においては、半農半牧の生産・生活様式、定住化、言語の混合化現象などの特徴に注目し、「内モンゴル東部」を、基本的に(2)の定義による地理的範囲、すなわち赤峰市、通遼市、ヒンガン盟の2市1盟に限定する。脱遊牧化という点で、東北3省のモンゴル族は確かに現在の内モンゴル自治区東部地域のモンゴル族に類似するが、行政区分が異なるため、両地域の間では言語をはじめとする文化的な差異が広がりつつあることが十分考えられる。民族教育においても、両地域の間では相違点が存在する³⁵。また、東北3省のモンゴル族地域はほぼ農耕化したのに対し、内モンゴル自治区東部地域では半農半牧

³⁴ モンゴル高原のうち、内モンゴルの部分の標高は700～1400mであるが、西遼河平原・嫩江平原の標高は、大興安嶺の部分を除いた場合120～500mにとどまる。年間降雨量はモンゴル高原の200mm以下に対し、西遼河平原・嫩江平原では400mmに達する(ブレンサイン(2002)100-101頁、『内蒙古大辞典』編委会(1991)3頁、4頁)。また、近代以前の内モンゴル東部のモンゴル人には、「森林ステップ型の遊牧を営む」(牛が多く飼われる)、「狩猟は遊牧に並ぶくらいの重要な位置を占める」、「糜子や蕎麦を栽培する」(ナマグ＝タリヤ農耕)など、この地域ならではの特徴が見られる(吉田(2007)9頁)。

³⁵ 中国領内のモンゴル族居住地域の言語・教育問題を調整する組織としては、八省・自治区モンゴル語事業協力グループ(「八省区蒙古語文工作協作小組」、略称「八協」)が存在する。「八協」は、モンゴル族共通の教科書を編纂し、各省・自治区の間で学生の進学や教員の派遣などを調整している。モンゴル族の文化的結束をはかるという点では、「八協」は確かに積極的な意義をもつ。しかしそれぞれの地域の社会的・教育的事情が異なるため、「八協」の及ぼす影響は実際、限定的なものにとどまっている。たとえば東北三省では、1989年から、内モンゴルと異なる独自のモンゴル語教科書を編纂している(岡本(1999)241-242頁)。東北三省のモンゴル族教育については、岡本(1999)247-264頁、包(2008)を参照。

の度合いが地域によって大きく異なり、規模は小さいものの牧畜業を中心とする地域もいまだに存在する。したがって、現地調査を通して両地域の文化的共通点と相違点を解明しない限り、「内モンゴル東部」の範囲を東北3省のモンゴル族居住地にまで拡大するのは、幾分拙速な判断ではないかと考える³⁶。そこで本研究では、あえて(2)の定義による地理的範囲に限定した。

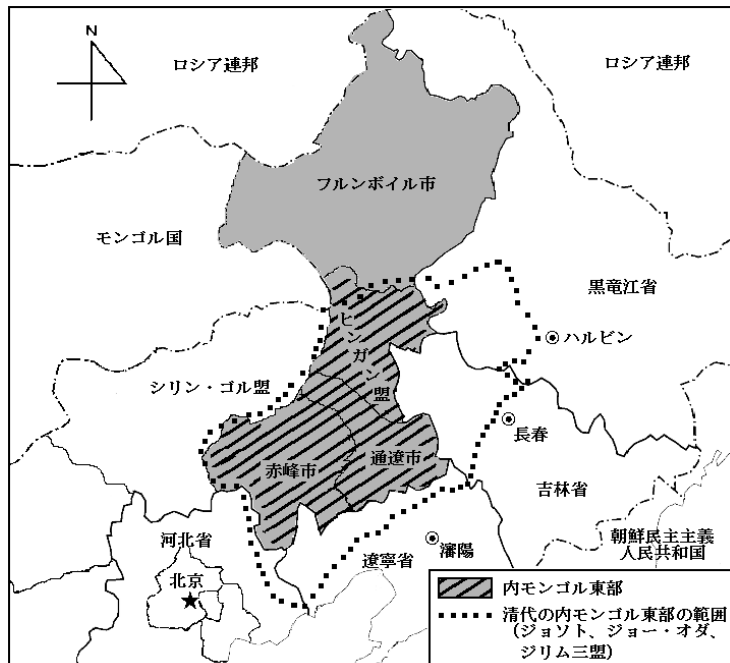
では、内モンゴル東部のモンゴル族の言語・教育の実態に注目することは、モンゴル族の言語・教育の問題ないし中国の少数民族教育と言語使用にとってどのような意義をもつのだろう。

まず、モンゴル族の言語・教育の全体にとっての内モンゴル東部の意義をみてみよう。

内モンゴル東部は、中国でモンゴル族がもっとも密集して暮らす地域である。東部のモンゴル族人口は286万人に達し、内モンゴルにおけるモンゴル族人口の7割を占める。そのため、モンゴル族社会の変容にとっては、内モンゴル東部のモンゴル族の影響は非常に大きいと考えられる。また地域総人口に対するモンゴル族の人口比も31.6%と、内モンゴル全体の17.1%を10%以上も上回る³⁷。特に通遼市はモンゴル族の人口比が45.4%と内モンゴルでもっとも高く、ヒンガン盟の41.1%がそれに次ぐ³⁸(図0-4)。内モンゴルでは、モンゴル族人口は3割以上を占める市・盟は、ほかに存在しない。しかも19世紀から20

図0-3 内モンゴル東部の地理的範囲

(灰色の部分は捉え方(1)、斜線の部分は捉え方(2)、点線で囲まれた部分は捉え方(3)それぞれの地理的範囲にあたる。)



出所：『中国地図冊』第3版(星球地图出版社2007年)6頁、55頁をもとに筆者作成。清朝時代内モンゴル東部の範囲は、『大清帝國全圖』第3版(商務印書館1908年)第24図を参考。

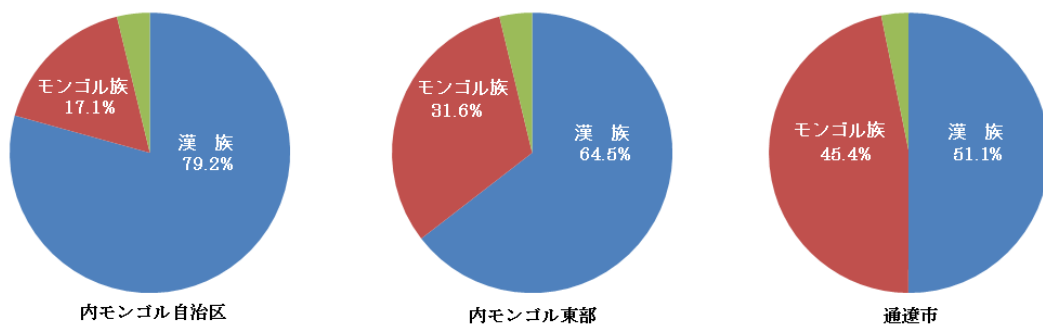
³⁶ 東北三省のモンゴル人社会の歴史については、ブレンサイン(2009)を参照。

³⁷ 『内蒙古自治区2000年人口普查資料』46-51頁。

³⁸ 『内蒙古自治区2000年人口普查資料』48-51頁。

世紀にかけて、内モンゴル東部のモンゴル族は、農耕化しつつも漢族移入民と住み分け、独自の農村共同体を形成してきた。そのため、言語・文化の面で漢族の影響を受けながらも、漢族への同化を避け、新たな地域文化を創り続けてきた。こうした点をふまえれば、現代中国におけるモンゴル族の今後のあり方を考える上で重要な示唆を与えてくれるといえよう。

図 0-4 モンゴル族と漢族の人口比（2000 年）



出所：『内蒙古自治区 2000 年人口普查資料』46－51 頁。

次に中国の少数民族言語・教育の視点から見てみよう。

中国における民族分布の特徴は一般的に「大雑居、小集居」と言われる。すなわち、ある民族はかならずしも同一の地域に集居しているのではなく、他民族と混じりあって居住することが多い。また、多民族の混住においては、マジョリティである漢族が人口の比較的多数を占める場合が多い。内モンゴル東部は、まさにこうした多民族混住地域の典型である。大きな地域的範囲において、漢族とモンゴル族を中心に多民族が混住している一方、小さな地域的範囲ではモンゴル族が集住する地域を見出すこともできる。内モンゴル東部におけるモンゴル族の変容のありようは、国民統合が進み、かつグローバリゼーションの波に飲み込まれつつある現代中国における少数民族の社会空間を考察する上で——もとより各民族がおかれた社会的位置の固有性・多様性への配慮は不可欠ではあるが——非常に有意義な事例を提供してくれるだろう。

第 4 節 調査の概要と本論文の構成

本研究が素材とする調査は、2006 年から 2009 年まで 4 回にわたり、内モンゴル自治区

東部の通遼市で行った。

通遼市 (tüngliyoo qota) は内モンゴル東部の中心部に位置し、人口は約 302 万 8 千人である³⁹。モンゴル族は 137.3 万人で、総人口の 45.4%を占める⁴⁰。モンゴル族の人口数、人口比率ともに内モンゴルでは最も高い地域である。

通遼市の管轄地域の多くは、清朝時代、ホルチン部⁴¹を筆頭としたジリム盟 (jirim ün čiyulyan⁴²) 十旗⁴³の遊牧地である。18 世紀後半から、中国内地から漢族がジリム盟に入植し始め、19 世紀末から 20 世紀初頭にそれはピークに達した。また、1891 年に発した金丹道事件以降、当時のジョソト盟、ジョー・オダ盟 (両盟の牧地は、現在の内モンゴル自治区東南部、遼寧省西部、河北省北部にまたがっている) のモンゴル人もジリム盟に大勢押し寄せ、モンゴル族の人口密度が高まった⁴⁴。内モンゴル自治区成立後、1949 年 4 月に、旧ジリム盟の一部を中心に、ジョー・オダ盟の一部を加え、新しいジリム盟 (jirim aimay⁴⁵) が設立された。そして 1999 年、ジリム盟は通遼市と改称され、今日に至る⁴⁶。通遼市は現在、1 区 (ホルチン区)、1 県 (開魯県)、5 旗 (ホルチン左翼中旗、ホルチン左翼後旗、ナイマン旗、フレー旗、ジャロド旗)、1 県級市 (ホーリン・ゴル市) を管轄している (図 0-5)。

³⁹ 『内蒙古自治区 2000 年人口普查資料』48 頁。

⁴⁰ 『内蒙古自治区 2000 年人口普查資料』48-49 頁。

⁴¹ ホルチン (qorčïn) は、15 世紀前期に形成されたモンゴルの一部族であり、その遠祖はチンギス・ハーンの弟ジョチ・ハサルである。16 世紀中頃に多くの部族に分かれる。そのうち、ノーン・ホルチンは初期清朝政権の最大の戦略的パートナーとなり、清朝の内モンゴル進出および対明戦争に大いに貢献する。ジリム盟のホルチン部はノーン・ホルチンである。(qurča ほか (2001)、ブレンサイン (2003))。

⁴² 本論文におけるモンゴル語のローマ字転写は、基本的に蒙古文字の正書法にしたがう。モンゴル語の方言を表記する箇条では、個別に注釈する。転写の際、頭文字はすべて小文字にした。

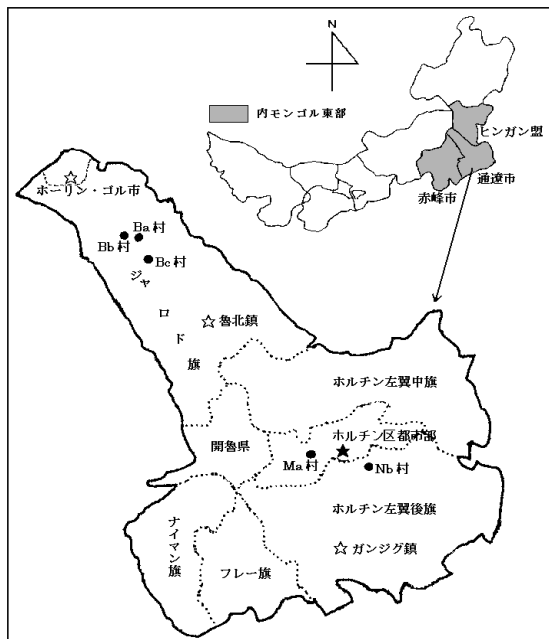
⁴³ 旗 (qušiyu) は清朝以降におけるモンゴル民族を組織する行政単位の一つである。現代中国では県級の行政単位である。清朝時代ジリム盟は、ホルチン部 6 旗 (右翼前・中・後 3 旗、左翼前・中・後 3 旗)、ゴルロス部 2 旗 (前旗、後旗)、ジャライド部 1 旗、ドゥルベド部 1 旗、計 10 旗からなる。その多くは今も地域名称として使われている。

⁴⁴ 金丹道事件とは、1891 年にジョソト盟で起きた、入植してきた漢人の秘密結社組織金丹道と地元のモンゴル人との間の大規模の暴力衝突事件である。記録によると、事件の死者は朝陽、建平両県だけで 10 万人にのぼる。金丹道事件以降、ジョソト盟から大勢のモンゴル人は北部のジリム盟などの地域に避難・移住した。これは、内モンゴル東部におけるモンゴル人農耕村落社会形成の重要なきっかけになったと考えられている (ブレンサイン (2003) 182-189 頁、吉田 (2007) 12-13 頁)。

⁴⁵ 清朝から中華民国時代の「盟」はモンゴル語で「čiyulyan」とよばれていたが、1947 年以降は「aimay」とよばれるようになった。

⁴⁶ 通遼政府網「通遼概況・人口」。

図 0-5 各調査地の地理的位置



出所：『内蒙古自治区地図冊』第2版（星球地図出版社 2008 年）52-53 頁をもとに筆者作成。

通遼は、モンゴル族の脱遊牧・農耕化が最も進んだ地域の一つでもあり、定住集落化が顕著な地域でもある。しかし、モンゴル族は農耕化しても漢族移入民との混住を避け、いわば漢族とモンゴル族が集落ごとに住み分ける現象が展開している。こうした農耕化・民族別住み分けといった特徴は、内モンゴル東部地域で典型的にみられるものである。通遼の南部から中部にかけて農耕地域が広がり、モンゴル族は農耕を中心とした半農半牧生活を営んでいる。この農耕地帯のほぼ中心部に通遼市の行政的中心地ホルチン区が位置し、そこには都市的職業に従事するモン

ゴル族が数多く居住する。北部のジャロド旗には大興安嶺西南端の山地草原が広がり、隣接する赤峰市、シリン・ゴル盟の草原地帯に連なる。この地域のモンゴル族は、定住牧畜を中心とした生活を営む。

以上のような通遼市の地域構成をふまえ、実態調査に際しては、①都市地域、②農耕地域、③牧畜地域のそれぞれから具体的な対象地域を選定した。同じ通遼市の中でも、この3種類の地域においては、それぞれ住民の基本的な職業階層や生活過程が大きく異なるからである。またこの3種類の地域区分は、通遼市のみならず、内モンゴル東部地域において、ある程度の普遍性をもちうると考えられるからでもある。具体的な調査地は、①ホルチン区 (qorčin toyuriy 科爾沁区) の都市地域（以下ホルチン区都市部と称す）、②農耕地域であるホルチン区郊外のモリーン＝スム・ソム⁴⁷ (murui yin süme sumu 莫力廟蘇木、以下Mソム) の Ma 村、ホルチン左翼後旗 (qorčin jægün yaron qoitu qušiyu 科爾沁左翼後旗) のノゴスタイ鎮 (nuyusutai balyasu 努古斯台鎮、以下N鎮) の Nb 村、および③牧畜地域であるジャロド旗 (jarud qušiyu 扎魯特旗) バヤルトホショー鎮 (bayartuqušiyu balyasu 巴雅爾吐胡碩鎮、以下B鎮) Ba 村・Bb 村・Bc 村とした（図

⁴⁷ ソム (sumu) とはモンゴル族が人口の多数を占める郷鎮レベルの行政単位である。

0-5、図 0-6)。

現地調査は、各種統計資料の収集、参与観察、聞き取りなど、いくつかの調査方法を併せて行ったが、その中心となるのは、調査地域に居住する在学中の生徒・学生をもつ家庭の保護者に対するインテンシブな面接聞き取りである。直接の面接聞き取り調査の対象者は計 80 人である。

調査に際し、まず各地のインフォーマントに（一部のガチャーでは村民委員会のメンバーにも）聞き取りを行い、地域の教育概況を把握し、その上で、インフォーマントの紹介による機縁法で調査対象者を確保した。

本研究は、モンゴル族の言語・教育の全体的趨勢を統計的に把握するものではなく、あくまで諸個人の生活史・生活過程に関する事例分析を通して、言語・教育と地域社会の変動を質的に解明するものである。そのため、労働・生活・意識のトータルかつ複雑な絡み合いの実態把握に適したイン

テンシブな質的調査法を採用

した。また現在、中国において少数民族問題は極めてセンシティブな政治問題であり、正確な実態を把握するには対象者との個人的な信頼関係が

不可欠である。調査地域、お

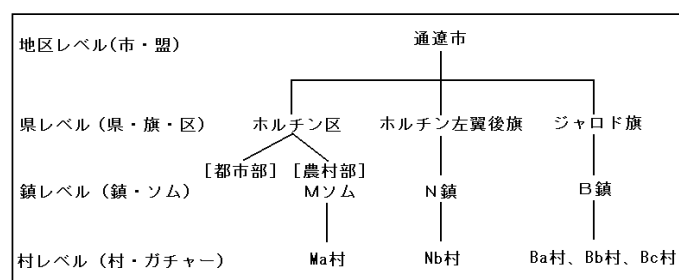
よび機縁法による調査対象者の選定には、こうした政治的事情も介在している。

本論文は序章を除き、5 つの章から構成される。そのうち、第 1 章～第 4 章は生活誌分析、第 5 章は考察である。

第 1 章では各調査地の概況や調査対象者の基本属性・生活史を明らかにし、第 2 章では調査対象者の現在の生活過程を分析する。それらを踏まえ、第 3 章では子どもの教育をめぐる諸問題、特に言語と教育との関係を検討する。そして、第 4 章では調査対象者の社会意識、具体的には経済格差、言語、文化習慣、歴史、宗教、地域についての見方・意見などを分析する。

第 5 章では、以上の各章における調査の内容の具体的な分析に基づき、内モンゴル東部の言語・教育の現状を総括し、そこに現れている諸問題・葛藤や諸個人の主体的な生活の営みを考察する。

図 0-6 各調査地の行政的所属



第 1 章 各調査地の概況と諸個人の生活史

本章では、各調査地の概況¹と調査対象者諸個人の基本属性・生活史を明らかにする。

第 1 節 ホルチン区都市部

ではまず、ホルチン区都市部について、みていこう。

第 1 項 ホルチン区都市部の概況

ホルチン区は、通遼市南部の農業地帯のほぼ中央に位置する行政的中心地である。面積は 3,212km²、総人口は約 81.3 万人である²。

ホルチン区都市部は、「街道弁事処」を行政単位とした都市地域であり、ホルチン区の中心部に位置する。主な産業は農産品加工、金属・建材工業、医薬品製造業などである³。都市部の中西部には行政機関、商業地、大学などが集中し、東部には工場が立ち並んでいる。南部には通遼駅を中心に鉄道従事者が多数、居住している。日常的には、モンゴル族と漢族を問わず、ホルチン区都市部を単に「通遼」と呼びならわしている。それは、「通遼」がこの地域の最初の名称だったことに由来する。本論において、調査対象者の語りの引用部分に出てくる「通遼」という地名は、特に注釈しない場合、すべてホルチン区都市部をさす。

ホルチン区都市部は、清朝時代、ホルチン左翼中旗の遊牧地であった。1912 年の「巴林愛新荒」⁴の開墾をきっかけに、山東・河北・遼寧などの地域から漢族が移入し、農耕と商業活動を始めたため、定住地へと化した⁵。1914 年には通遼鎮が設置された⁶。1918 年に通遼鎮と周辺農村を併せ、通遼県が設置された。さらに 1951 年、元通遼鎮地域に通遼市が設置され、通遼県とは別の行政地区とされた。その後、市と県は合併と分離を繰り返し、

¹ 各調査地の地理的位置と行政の所属については、図 0-5、0-6 を参照。

² 内蒙古自治区統計局編（2007）652 頁。

³ 通遼政府網「通遼概況・人口」。

⁴ 「巴林愛新荒」とは、バイリエン・タリヤ (bairi yin tariy-a, 漢語表記「巴林他拉」) からアユシーン・スム (ayuši yin süm-e, 漢語表記「愛新廟」) までの開墾地域をさす。概ね現在のホルチン区のうち、都市部より西の、西遼河南岸地域にあたる。

⁵ 中共通遼市科爾沁区委地方志編纂委員会編（2002）4-5 頁。

⁶ ホルチン区の制度的沿革は、中共通遼市科爾沁区委地方志編纂委員会編（2002）5 頁による。

最終的に 1986 年に通遼市として合併した。また 1999 年にジリム盟は廃止され、通遼市が地区クラスの市⁷⁾に昇格したため、旧来からの市の管轄地域はホルチン区と改称され現在に至る。

ホルチン区都市部在住者の中では、長い間漢族が人口の大多数を占めてきた。モンゴル族の人口は 1979 年の時点で、わずか 1.1 万人で、当時の都市部人口の 5.3%にとどまっていた⁸⁾。改革開放以降、周辺の農耕・牧畜地域からモンゴル族が多数移住してきたため、モンゴル族の人口が増加しつつある。2007 年現在、都市部人口 33.5 万人のうち、モンゴル族は 10.0 万人と全体の約 3 割を占めるようになっている⁹⁾。都市部に住むモンゴル族には、専門的・管理的職業従事者から工場労働者・小売業者など様々な職業の人が存在するが、その内訳についての統計データは公開されていない。

第 2 項 ホルチン区都市部在住者の基本属性・生活史

ホルチン区都市部の調査は、2007 年 12 月 5 日から 17 日にかけて実施した。調査したのは都市部在住の 25 人である。調査にあたっては、できるだけ多様な職業の従事者から聞き取りをするように心がけた（表 1-1）。もとより序章第 4 節で述べたように、本調査研究はあくまでインテンシブな質的研究であり、したがって調査対象者も量的な全体的趨勢を反映したものではない。

調査対象者の多くは、通遼市（旧ジリム盟）の農耕・牧畜地域の出身である。彼・彼女らはモンゴル語を母語とした環境の中で育ち、モンゴル語で学校教育を受けてきた¹⁰⁾。多くの人は、ホルチン区都市部に移住するまで漢語をあまり使ったことがない。そのため、都市部に移住した後、漢語で苦労した経験が多い。農耕・牧畜地域出身であるため、彼・彼女らの多くは畑仕事や放牧などの生活体験を持っている。また今もなお、兄弟姉妹が農耕・牧畜地域に在住しているケースが多く、農村の親戚とのつながりは頻繁である。

彼・彼女らの現在の職業は、公務員、教師、雑誌編集者、医者、薬剤師などの専門的・管理的職業、および、自営業、労働者などである。

⁷⁾ 中国の行政単位としての市は、省クラスの直轄市、地区クラスの市、県クラスの市に分けられる。1999 年前の通遼市は県クラスの市だった。

⁸⁾ 『哲里木四十年』18 頁。

⁹⁾ ホルチン区の人口統計資料による。

¹⁰⁾ 内モンゴル自治区におけるモンゴル族教育は、「純蒙文」と「加授蒙文」2 つの類型に分かれる。「純蒙文」では、各科目の授業をモンゴル語で行い、それにプラス漢語の科目を教える。一方の「加授蒙文」では、モンゴル語以外の科目はすべて漢語の教材を使い、漢語で授業する。

彼・彼女らの一部はホルチン区都市部または自治区内の他の都市で、中卒中等専門学校¹¹以上の学校を卒業後、国家の「統一的分配方式」¹²により、ホルチン区都市部の役所、学校、病院などの公的機関に配属された。その後、多くは専門的または管理的職業に従事してきた。また、国有企業に就職したが、その後、企業の民営化に伴い、自営業に転じたケースも見られる（表 1-2）。

一方、学歴が高校以下の調査対象者たちは、国家の「統一的分配方式」の対象ではなかった。彼・彼女らの多くは高校・中学校を卒業後、ホルチン区都市部の国有企業でまず臨時雇として働き、数年後、常雇になった。しかし 1990 年代半ばから国有企業の民営化が進み、労働者の生活水準が悪化したため、一部は自営業に転じて現在に至っている。また高校卒業後、直接自営業に就いたケースも見られる（表 1-2）。

こうした都市部在住者のうち、専門的・管理的職業従事者の場合、職場において、文語を含む高度な漢語能力が求められるため、これまで漢語の壁で多くの苦労をしてきた。しかし、モンゴル語で学校教育を受けたことについては、彼・彼女らは「民族のことで教育を受けてよかった」と、プラスに評価している。

＊「子どものころ、地元には漢人がほとんどいなかった。モンゴル語で話し、モンゴル語で教育を受けるのは、当たり前のことだった。大学の医学部時代、現代医学関係の授業は漢語で教えられたので、わかるようになるまでかなり時間がかかった。漢人の先生達と話をするときも、相手の言っていることがわからず、相手も私の言っていることがわからないことがよくあった。私は『接』という字をずっと『按』と読んでいて、先生に何回も指摘された。でもモンゴル語は民族のことで、モンゴル医学では広く使われているから、モンゴル語で教育を受けてよかったと思っている」（大学教師）

これに対し、労働者や自営業者は職場では、それほど高いレベルの漢語を必要としないため、特に深刻な言葉の壁に直面したことは少ない。しかし、彼・彼女らもまた漢語がう

¹¹ 中国の中等専門学校には、中学校卒業生を対象としたもの（中卒中等専門学校、漢語では「初中中専」と略称）と高校卒業生を対象としたもの（高卒中等専門学校、漢語では「高中中専」と略称）二種類ある。

¹² 国家の「統一的分配方式」とは、1990 年代までに行われていた、大学卒業生、中等専門学校、師範学校卒業生の就職はすべて国の人事・労働管理部門によって統一的に分配されていた制度である。

まく使用できず、職場の日常会話で苦労した経験は多い。モンゴル語で学校教育を受けたことについては、印刷工場でモンゴル語の植字の仕事をしているケースはプラスに評価しているが、それ以外は必ずしもそうではない。

＊「1984 年、北京で少数民族言語の印刷労働者を募集していたので、私は応募した。

私はモンゴル語の植字の仕事を担当していた。2 年後、通遼の印刷工場に移ってきた。最初は臨時雇いだったが、ここで 10 年働いて常雇になった。活字印刷の時代だったから、私の学んだモンゴル語は就職の時に役に立った。だからモンゴル語で教育を受けてよかったと思っている」（印刷工場労働者）

「私は 1991 年に紡織会社で臨時雇いとして働き、1996 年に常雇になった。1999 年に会社が民営化されてから、私は「買断工龄」¹³の形で仕事をやめて、友達と一緒に散髪屋を開いた。私はずっとモンゴル語で教育を受けてきたが、モンゴル語は使い道が狭くて、これまでの人生の中で役に立たなかった。工場でも漢人が多く、ほとんど漢語を使っていたし、今の仕事のパートナーも漢人だ。漢語でそれほど深刻な苦労はしたことがないが、しかし昔は自分の考えを適切に表現できないことがよくあった」（自営業）

第 2 節 農耕地域

では次に、農耕地域についてみていこう。

第 1 項 Ma 村と Nb 村の概況

Ma 村は、通遼市ホルチン区の郊外に位置する畑作農村集落である。ホルチン区の中心部から 32km 離れたところに位置する。都市部と国道でつながっており、交通のアクセスはよいが、都市近郊の農村とは異なり、当面都市化する可能性はない。

Ma 村の属する M ソムは、面積が 316km²、人口が約 1 万 8 千人である¹⁴。ホルチン区で

¹³ 「買断工龄」とは、企業が社員に定年までの残り年数の賃金を一括で支払い、双方の労資関係を解消することである。

¹⁴ M ソムの統計資料による。M ソムはもともとモンゴル族の村を主体とした人口 8 千人規模のソムだった。2006 年に隣接の 2 つの漢族の郷を合併し、新しい M ソムになったが、モンゴル族人口の割合は 72%

はモンゴル族が最も集住する農村地域であり、ホルチン区唯一の「民族地域」ともいわれている。ただし、Mソムの隣接地域には漢族の村が多く、Mソム内部でも漢族が 59%と多数を占める¹⁵。モンゴル族と漢族は、ほぼ完全に村別に住み分けているが、しかし、たとえばソムの定期バザールの時に漢族が物売りにくるなど、モンゴル族と漢族の接触のチャンスは少なくない。

Ma 村は、正式には Ma ガチャー（行政村）¹⁶と呼ばれており、自然村がそのまま行政村として位置づけられている。Ma 村はMソムの役所所在地でもあり、農民だけでなく、都市戸籍を所有する人々も多数生活している。村には 163 世帯・401 人が居住するが、その 86%がモンゴル族である¹⁷。役所、学校、病院、郵便局などは村の東部に集中しており、都市戸籍の世帯の多くはその周辺に居住している。これに対し、農民世帯の多くは村の西部に居住している。

Ma 村は清朝時代、ホルチン左翼中旗の管轄地域であった。1785 年から 1806 年にかけて、内モンゴル東部で最大規模のチベット仏教寺院がこの地に建てられ、寺院は 20 世紀初頭まで地域文化の中心地として栄えた¹⁸。しかしその後の戦乱により寺院の勢力が衰え、敷地の多くが荒廃した。1947 年に中国共産党は当時の通遼県を統治下においた後、寺院の敷地にジリム盟各地からモンゴル族を移住させ、Ma 村を設立した。残存した寺院の建物は文化大革命の時代、ほぼ完全に破壊された。

一方、Nb 村はホルチン左翼後旗の北部、ホルチン区との境付近に位置する畑作の農村であり、ホルチン区の中心部から約 30km 離れたところに位置する。ホルチン区の中心部までの距離は Ma 村とほぼ同じだが、しかしアスファルト舗装の道路もまだ通っていないため、交通のアクセスは比較的、不便なところである。

Nb 村は元来、ホルチン左翼後旗 H ソムの役所所在地であった。しかし、2007 年の郷鎮合併により、H ソムは隣接する N 鎮に合併され、役所をはじめとする公的機関はすべて N 鎮の中心村に移転した。現在の N 鎮は人口が約 1 万 8 千人と、上述の M ソムの人口とほぼ等しいが、面積は 1,067km² で M ソムの 3 倍以上である¹⁹。さらに人口の 95%がモンゴル

から 41%に低下する。

¹⁵ Mソムの統計資料による。

¹⁶ ガチャー（*yačay-a*）とは、モンゴル族が人口の多数を占める行政村の正式な呼称である。

¹⁷ Mソムの統計資料による。

¹⁸ Mソム出身の民俗学者 *badm-a* 氏の口述史による。kürelša nairayuluysan(1993)420－483 頁。

¹⁹ N 鎮の統計資料による。

族である²⁰。

合併に伴い、都市戸籍の世帯は Nb 村から移出し、村は純然たる農耕集落に変わった。2008 年現在、村には 210 世帯・826 人が居住しており、ほぼ全員がモンゴル族である²¹。Ma 村と同じく、自然村自体がガチャーとして機能している。

村人の話によると、Nb 村は 20 世紀初頭に形成され、住民には、ホルチン左翼後旗だけでなく、清朝時代のジョソト盟、ジョーオダ盟にルーツをもつ人々もいる。

Nb 村の人々は、N 鎮の他の村をはじめとするホルチン左翼後旗内のモンゴル族との交流が深い一方、隣接するホルチン区の漢族地域との交流は比較的、少ない。ただし村には数少ないとはいえ漢族も生活しており、また近隣の漢族農村地域についての情報が直接・間接に流入してくることもある。そこで Nb 村のモンゴル族住民も、漢族について一定の具体的なイメージは持っている²²。

第 2 項 Ma 村と Nb 村在住者の基本属性・生活史

Ma 村での調査は、2006 年 8 月 22 日～9 月 8 日にかけて実施した。

Ma 村で調査の対象としたのは 22 人である。調査対象者たちは、都市的職業従事者の 12 人、および、農民の 10 人に分けられる（表 1-3）。

都市的職業従事者には、地元 M ソムの出身者が 9 人と多い。彼・彼女らはホルチン区都市部などの学校を卒業後、M ソムに帰ってきた。消防隊から復員した人もいる。外地出身者の 3 人は、Ma 村と同様の農耕地域の出身で、結婚をきっかけに M ソムに移住してきた。都市的職業従事者たちの学歴は、多くは高卒以上であり、農村では高いほうに属する。職業は多くが教師、公務員などであり、もと生活共同組合員（漢語で「供銷社社員」と呼ぶ）で、現在失業している人も 1 人いる（表 1-5）。また公務員の場合、レストラン、苗木販売などの自営業を兼業している人もいる。彼・彼女らのうち、中等専門学校以上の学歴の場合、卒業後すぐ正式に就職した。しかし高卒の場合、まず役所や学校で臨時雇として働き、相応の試験に合格して、常雇になった。いずれにせよ彼・彼女らは、都市戸籍に区分されており、多くは農耕用の土地を持っていない²³。

²⁰ N 鎮の統計資料による。

²¹ Nb 村の統計資料による。

²² Nb 村の人は、近くの漢族村の定期バザールに行くことがある。また、漢族は Nb 村に農産物や家畜を買取にくることもある。

²³ 農村在住の都市的職業従事者は、都市戸籍に区分されており、原則的に農耕用の土地が割り当てられない。ただし、戸籍は基本的に戸主（大概是夫）で決まるので、都市的職業に従事しても、戸主である

都市的職業従事者たちの受けた教育は、外地出身者の場合はモンゴル語で受けたが、Mソム出身者の場合はかなり複雑である（表1-3）。それは、Mソムの学校教育が、言語面で大きな変貌を遂げてきたことに由来する。Mソムの学校教育は1968年以前にはモンゴル語で行われていた。しかし文化大革命最中の1969年からは都市戸籍の子どもに対し、さらに1970年からは農村戸籍を含むすべての子どもに対して漢語で教育がなされるようになり、これは1977年まで続いた。そして1978以降は、再びすべての子どもにモンゴル語での教育が復活した²⁴。文化大革命当時、漢語は「先進民族」の「先進階級」の言語とされ、これを普及させるために、学校教育用言語の漢語へのシフトが、一部のモンゴル族居住地域で実施された。Mソムは都市郊外に位置し、一定の漢族の人口を抱えて「蒙漢混住地域」と認識されていたため、教授言語転換の実験場となったわけである。そこで特に高校以上の学歴を持つMソム住民の中では、教授言語が何度も変化した経験を持つ人もおり、「勉強に相当のマイナスの影響を受けた」と語る人が多い。また公務員の場合、職場における漢語の使用も多く、一部の人は漢語の壁で苦労したと語っている。

＊「小学校に入ったころ、ちょうど文化大革命だったので、漢語で教育を受けた。でも当時、先生もきちんと教えられないし、生徒も荒れていたんで、とても勉強する雰囲気ではなかった。だから漢語もほとんど身につかなかった。高校を卒業後、3年間、仕事がなくて家にいたが、小学校教師として1年間臨時雇で働いてから、役所に移った。役所でも最初は臨時雇だったが、1988年に正規幹部（国家公務員）になるための試験を受けた。試験は漢語で出されるから、私は意味がわからなくてもとにかく一生懸命暗記して受験に臨んだ。でもやはりだめだった。その後、正規幹部になかなかねれず、とても苦労したが、92年に再受験してようやく合格した」（Ma村、公務員）

「私の出身地では、漢人がほとんどいなかった。だから漢語を使ったこともない。大学の専門もモンゴル語、就職もモンゴル語学校²⁵だから、漢語はあまり使わなくて

配偶者が農村戸籍の場合、本人の戸籍も農村戸籍に変わり、農耕用の土地が割り当てられる。Ma13はこうしたケースである。

²⁴ Mソムの役所と学校では、当時の教授言語の変遷についての資料は残っていない。これらの年数は、当時在学中だった人たちの提供してくれたものである。なお、漢語に変更した後、モンゴル語の科目は完全に廃止されたか否かは定かではない。

²⁵ 「モンゴル語学校」・「漢語学校」とは、「mongyul suryayuli」・「kitad suryayuli」の訳である。内モンゴル自治区では、モンゴル族学校と一般の学校は別々に設立されている。モンゴル族学校の名称には、「〇〇モンゴル族学校」、「〇〇モンゴル族中学」というふうに、「モンゴル族」という言葉が入っ

もよかった。漢語の壁で苦労したことはない。民族のことばだから、モンゴル語で教育を受けたことに後悔していない」(Ma 村、中学校教師)

一方、農民 10 人のうち、7 人は地元Mソムの出身である。彼・彼女らの学歴は高校以下であり、地元の学校を卒業後、直ちに農民として働き、現在に至っている。外地出身者は 3 人とも女性である。彼女らは通遼市の農村地域で生まれ育ち、Ma 村の農民との結婚をきっかけに移住してきた。学歴は中学校卒以下である。

農民たちの受けた教育は、外地出身者はモンゴル語だが、地元Mソム出身者の多くは漢語で行われた。これは彼・彼女らの小学校入学時、文化大革命時代だったためである。また農民たちは、都市的職業従事者ほど長年の学校教育を受けなかったため、途中で教授言語が変わることも少なかった。

農民たちは、地元のホルチン・モンゴル語で主に生活してきており、漢語を使用したことがあまりない。そのため、漢語で苦労したこともほとんどない。学校で何語で教授されたかに関わりなく、多くの農民たちは「漢語がよくわからない」と語る。彼・彼女らは「実際、あまり勉強しなかった」、「家事の手伝いで精いっぱいだったので、勉強する暇もなかった」と語っており、教授言語が何だったかということ自体に関する意識が希薄である。

＊「小学校に入るとき、漢語のクラスしかなかった。だから漢語で勉強するしかなかった。それでよかったかどうかはわからない。当時、家事が多くて、勉強する暇もなかった。そして中学 3 年で学校をやめた。どうしようもないことだ。もし今だったら絶対やめないと思う」(Ma 村、農民)

次に Nb 村の調査対象者たちの基本属性・生活史を見てみよう。

Nb 村での調査は、2009 年 5 月 19 日～22 日にかけて実施した。調査対象者は 11 人で、全員農民である(表 1-4)。前述のように、Nb 村には現在、都市戸籍の世帯はほとんど居住していない。彼・彼女らのほとんどはN鎮の出身である。学歴は高校以下で、多くは地元の学校を卒業し、そのまま農民になった。

ているケースが多い。その場合、生徒は必ずしも全員モンゴル族とは限らないが、学校での教授言語はほとんどモンゴル語である。また数少ないが、一般の学校の中にモンゴル語で授業を行う学級を設置しているところもある。本論文では便宜上、これら両方を「モンゴル語学校」と呼ぶ。対照的に、漢語で授業を行う一般の学校を「漢語学校」と呼ぶ。

彼・彼女らは全員、モンゴル語で学校教育を受けてきた。Nb 村は上述の Ma 村とは異なり、これまで漢語による学校教育がほとんど行われなかった。それは、Nb 村の属するホルチン左翼後旗はモンゴル族が多く居住しており、「純粋なモンゴル地域」と認識されてきたからであると思われる。農民たちは、モンゴル語で教育を受けたことをプラスに評価しており、「モンゴル人だからモンゴル語でよかった」、「モンゴル語の環境だから、ここでいきなり漢語の教育を受けるのは難しい」と語る。もちろん Ma 村の農民と同様、「学校に通っていたときはあまり勉強できなかった」とも語る。彼・彼女らの多くは、これまで漢語との接触が少なく、そのため漢語で苦労したこともあまりない。

＊「モンゴル人だから、モンゴル語で教育を受けてよかったと思う。学校に通っていたときは、勉強はいい加減で、ぎりぎりで中学校が卒業できたという感じだ。モンゴル語については、『ガンジグ²⁶からは出られない。通遼では通じない』²⁷という話も聴かれるが、やはりモンゴル人なので、モンゴル語のほうがいいと思う。モンゴル語でいろんなことを勉強してもいい。私たちはそんなに外の世界にも出たことがないから、ふだんは漢語を使うことがない。だから困ることもない」(Nb 村、農民)

ただし、Nb 村の農民の中には 1 人だけだが、大卒者がいる(ケース Nb11)。彼は自治区中心都市フフホトの大学を卒業した後、農業をするために、地元に戻ってきた。「フフホトで就職できたが、理想の仕事じゃなかったため、地元に戻ってきた」のである。また彼は「大学時代、漢語の発音が正確ではなかったもので、漢人の友達に笑われたことがある」と語っており、漢語で行われた授業が聞き取れないなど、多くの苦労をしてきた。

²⁶ ホルチン左翼後旗の中心地。

²⁷ 現地のモンゴル語では「*yanjiy-aasan yarč yolqui, tünglyoo kürbel tünglǝ yolqui*」という。モンゴル語では、頭韻法は最も頻繁に使われる修辞技法の一つである。この文では「*yanjiy*」と「*yarč*」は「*y*」の頭韻、「*tünglyoo*」と「*tünglǝ*」は「*t*」の頭韻である。このようにモンゴル語の使用範囲の狭さを表現する韻文は多数存在する。たとえばホルチン左翼中旗では「*hook'ang küebel holqulai, tünglyoo kürbel tünglqüle*」(保康(旗の中心地)ではいけなくなる。通遼では通じなくなる)、ジャロド旗では「*jarud-aan yarbal jarqulai, tünglyoo kürbel tünglqüle*」(ジャロドを出たら使わなくなる。通遼では通じなくなる)という。

第3節 牧畜地域

最後に、牧畜地域である。

第1項 B鎮と3つの村の概況

B鎮は、通遼市ジャロド旗管轄下の牧畜地域である。ジャロド旗魯北鎮（旗の中心地）から北に87km、ホルチン区都市部から250km離れたところに位置する²⁸。鎮の総面積は2,473km²、人口約1万2千人である²⁹。人口密度は約5人/km²と、農耕地域の人口密度（Mソム58人/km²、N鎮17人/km²）に比べるとはるかに少ない。さらに人口の99.5%がモンゴル族であり³⁰、地元の漢族も日常的にモンゴル語を使用することが多い。ビルや道路の建設工事に従事する漢族が一時的に滞在することはあるが、それ以外にこれまで外地からの漢族の流入もほとんどなかった。今回、調査を行ったのは、鎮の中心村Baガチャーと、牧畜村のBbガチャー、Bcガチャーである。

B鎮は清朝時代、ジャロド左翼旗とジャロド右翼旗の遊牧地であった³¹。地元の住民は長い間、季節的に移動しながら牧畜業を営んできた。しかし、1970年代にジャロド旗北部でホーリン・ゴル露天炭鉱が発見されたことをきっかけに、これまで牧畜民たちの夏営地として利用されていた草原が採鉱のために占用され、1980年代末には完全に定住牧畜化した³²。また従来、牧畜業も人民公社によって集団経営されていたが、1980年代に家畜が私有化され、1997年に放牧地も完全に私有化された³³。放牧地は現在、鉄条網で世帯ごとに区分されている。地元で飼育している家畜は主に牛、羊、ヤギなどであり、家畜の販売が牧畜民の主な収入源となっている。また、家畜用飼料の原料として、トウモロコシが広く栽培されている。

牧畜地域のB鎮では、従来の遊牧生活の影響もあり、集落はかなり分散しており、一定の規模を持つ自然村まで成長しているところもあれば、2、3軒しか集住していないところ

²⁸ B鎮政府の資料『扎魯特旗巴雅爾吐胡碩鎮簡介』による。

²⁹ B鎮の統計資料による。

³⁰ B鎮の統計資料による。

³¹ ジャロド(jarud)は北元時代(1368～1635年)の内ハルハ五部の一つである。1628年に後金(後の清)の支配下に入る。1648年にジャロド左翼旗とジャロド右翼旗に分割される。1935年、当時の「満洲国」政府は左翼・右翼両旗を合併し、ジャロド旗を設立する。扎魯特人民政府網『扎魯特旗歴史沿革』による。

³² Ba村村民委員会の関係者へのインタビューによる。

³³ Ba村村民委員会の関係者へのインタビューによる。

もある。そのため、1つの行政村に大小多数の集落が含まれているケースが多い。これは、行政村が基本的に1つか2つの自然村で形成される農耕地域とは異なる、牧畜地域に特有の特徴である。こうした中で筆者は、Ba ガチャーの都市戸籍世帯が集住する地域（以下 Ba 村）、および、比較的規模が大きい2つの自然村——Bb ガチャーの中心集落（以下 Bb 村）、Bc ガチャーの中心集落（以下 Bc 村）——を対象地域とし、集中的に聞き取りを行った。

Ba 村はB鎮の中心市街地であり、役所、学校、病院、郵便局などが集中している。そのため、B鎮の都市戸籍世帯のほとんど（約100世帯）が、ここに居住している。Bb 村と Bc 村は、Ba 村よりそれぞれ12km、31km離れたところに位置する。Bb 村は約40世帯、Bc 村は約70世帯であり、両村の住民は全員モンゴル族である。

第2項 B鎮在住者の基本属性・生活史

B鎮の3つの村での調査は、2009年5月24日～6月2日にかけて実施した。

Ba 村の調査対象者は、都市的職業に従事する11人である。そのうち7人はB鎮出身である。外地出身者の4人はモンゴル族が集中する農耕・牧畜地域で生まれ育ち、結婚をきっかけにB鎮に移住してきた。

都市的職業従事者の学歴は中卒以上であり、現在の職業は教師、公務員、自営業、労働者などである（表1-6、1-9）。彼・彼女らは、出身地を問わずモンゴル語で教育を受けており、多くはモンゴル語で教育を受けてよかったと思っている。漢語の壁で苦労した人は少ない。前述のMソムとは異なり、B鎮では役所などの公的機関の職員もほぼ全員モンゴル族である。そのため日常的にモンゴル語を使うことが多く、漢語の使用は非常に限定的である。ただし、ほとんどモンゴル語の環境の中で生まれ育った彼・彼女らは、いったん外に出たら漢語の壁で苦労することが避けられない。これは、前述の「蒙漢混住地域」Mソムの都市的職業従事者と若干異なるところである。

* 「民族の言語で教育を受けてよかったと思う。今の問題は、学歴が上へ行けば行くほど、漢語の比重が大きくなることだ。だからモンゴル語の能力が十分発揮できない。

私は高校までずっとモンゴル語だったが、大学の授業はほとんど漢語で教えるから、よく理解できなくて苦労した」（Ba 村、教師）

「高校を卒業後、軍隊に行った。そのとき、漢語がわからなくて苦労した。でもその

後、かなり上達してきた。地元では、漢語を使うことが少ない。みんなモンゴル語で話をする。モンゴル民族のことばだから、モンゴル語で教育を受けてよかったと思っている」（Ba 村、公務員）

Bb 村では 6 人、Bc 村では 5 人の牧畜民に調査をした。彼・彼女らの多くは地元 B 鎮の出身である。最高学歴は中学校卒で、学校教育をまったく受けなかった人もいる（表 1-7、1-8）。

彼・彼女ら牧畜民のうち、通学経験がある人はみなモンゴル語で教育を受けた。それについては、「モンゴル人だからモンゴル語で教育を受けてよかったと思う」と語っている。また、農耕民たちと同様、言語問題に対する認識が希薄で、ただ「学校に通っていたときはあまり勉強できなかった」と語る人もいる。漢語で苦労したこともほとんどない。

＊ 「モンゴル語で勉強してよかった。子どものころ、条件が整っていなかったのも、あまり勉強できなかった。今までの生活の中で、漢語を使ったことはほとんどない」（Bb 村、牧畜民）

「学校に通ったことがない。昔は今のように学校で勉強することを重視していなかった。夫も小学校 4 年で退学した。今まで漢語を使ったことはほとんどない」（Bc 村、牧畜民）

第 4 節 小括

本章では、各調査対象地域の概況と調査対象者諸個人の基本属性・生活史を見てきた。

まずホルチン区都市部は人口 30 万人である。これまで、漢族が圧倒的に多く、漢語が広く使用されてきたが、近年モンゴル族の人口が急速に増加しつつある。

都市部在住の調査対象者は全員農耕・牧畜地域の出身であり、モンゴル語で教育を受けてきた。彼・彼女らの職業は、公務員、教師、医者、自営業者、労働者など多様である。彼・彼女らは漢語ができず、都市環境の中で苦労した経験が多い。特に公務員、教師、医者など専門的・管理的職業従事者の場合、習得が難しい漢語の文語能力も求められてきた。

これに対し、農耕地域の Ma 村はホルチン区の管轄下にあり、漢族との「雑居地域」M

ソムの中心村である。村では、モンゴル族が多数を占めている。Nb 村はホルチン左翼後旗所属の畑作農村である。ほぼ全員モンゴル族である。

Ma 村の調査対象者は都市的職業従事者と農民に分けられ、Nb 村の調査対象者は全員農民である。都市的職業従事者の中では、漢語のレベルは個人によって違うが、特に公務員になった一部の人には、漢語で苦労した経験がある。農民はいずれの村でも、日常的に漢語を使うことが少ない。

そして牧畜地域であるB鎮の3つの村での調査対象者もまた、都市的職業従事者と牧畜民に分けられる。ただしここではモンゴル族が圧倒的に多い環境があり、都市的職業従事者たちの中でも漢語で苦労した経験は比較的、個人的な問題にとどまっている。牧畜民たちはこれまで漢語を使用したことが少なく、漢語で特に苦労した体験もあまりない。

第 1 章の図表

表 1-1 ホルチン区都市部の調査対象者の基本属性

No.	性別	年齢	職業	学歴	出身地	言語教育の類型
T1	男	33	公務員（副科級）	大学	通遼市農村地域	純モンゴル語
T2	男	37	公務員（副科級）	大学	通遼市農村地域	純モンゴル語
T3	男	38	公務員（副科級）	師範学校	通遼市農村地域	純モンゴル語
T4	男	40	公務員（正科級）	大学	通遼市農村地域	純モンゴル語
T5	女	41	自営業（下宿屋）	師範学校	通遼市農村地域	純モンゴル語
T6	男	40	大学教師（管理職）	大学	通遼市農村地域	純モンゴル語
T7	男	39	雑誌編集者（大学所属）	師範学校	通遼市農村地域	純モンゴル語
T8	男	44	大学教師（副教授）	大学	通遼市農村地域	純モンゴル語
T9	男	43	大学教師（管理職）	大学	通遼市農村地域	純モンゴル語
T10	女	43	大学教師（副教授）	大学	通遼市農村地域	純モンゴル語
T11	男	50	大学教師（副教授）	大学	通遼市農村地域	純モンゴル語
T12	女	40	薬剤師	高卒専門学校	通遼市農村地域	純モンゴル語
T13	女	43	医者	大学	通遼市農村地域	純モンゴル語
T14	男	37	自営業（靴販売）	短大	通遼市農村地域	純モンゴル語
T15	女	41	労働者（印刷会社）	高校	通遼市農村地域	純モンゴル語
T16	女	42	自営業（幼稚園経営）	高校	通遼市農村地域	加授モンゴル語
T17	男	38	自営業（タクシー運転）	中学校（1年）	通遼市農村地域	純モンゴル語
T18	男	43	労働者（料理人）	中学校	通遼市農村地域	純モンゴル語
T19	女	43	労働者（印刷会社）	高校	通遼市農村地域	純モンゴル語
T20	女	37	自営業（美容室経営）	高校	通遼市農村地域	純モンゴル語
T21	女	42	労働者（印刷会社）	高校	通遼市農村地域	純モンゴル語
T22	男	53	労働者（硝子会社）	高校	通遼市農村地域	純モンゴル語
T23	男	41	自営業（下宿屋）	大学	通遼市農村地域	純モンゴル語
T24	女	33	自営業（衣料品販売）	高校	通遼市農村地域	純モンゴル語
T25	女	33	労働者（ホテル従業員）	高校	通遼市農村地域	純モンゴル語

表 1-2 都市在住者たちの職歴（〔年〕）

T1	[1997]大学教師→[2003]公務員
T2	[1993]中学校教師→[2003]公務員
T3	[1992]中学校教師→[1999]公務員
T4	[1989]公務員
T5	[1988]中学校教師→[1991]紡織会社職員→[1995]失業→[1996]自営業（衣料品販売）→[1999]下宿屋
T6	[1990]大学教師
T7	[1987]図書館員→[1995]雑誌編集者
T8	[1987]大学教師
T9	[1989]高校教師→[1990]大学教師
T10	[1984]大学教師
T11	[1983]大学教師
T12	[1988]薬剤師
T13	[1988]医者
T14	[1993]貿易会社職員→[1999]失業、小売業（靴販売）
T15	[1985]印刷工場労働者（臨時）→[1996]同（常雇）
T16	[1987]自営業（レストラン、衣料品販売など）→[2003]幼稚園経営
T17	[1984]農民→[1987] レンガ工場などで労働者（臨時）→[1989]同（常雇）→[1999]タクシー運転手
T18	[1981]農民→[1986] 印刷工場労働者（臨時）→[1989]料理人
T19	[1987]印刷会社労働者（臨時）→[1997] 同（常雇）
T20	[1991]紡織工場労働者（臨時）→[1996]同（常雇）→[2000]自営業（美容室経営）
T21	[1986]印刷会社労働者（臨時）→[1996] 同（常雇）
T22	[1978]硝子工場労働者（臨時）→[1985] 同（常雇）
T23	[1992]印刷会社管理職→[2002]自営業（下宿屋）
T24	[1992]自営業（衣料品販売）
T25	[1990]紡織工場労働者（臨時）→[1997]失業→[2006]ホテル従業員

実態調査より作成。

表 1-3 Ma 村の調査対象者の基本属性

NO.	性別	年齢	職業	学歴	出身地	言語教育の類型
Ma1	男	44	教師	大学	通遼市他地域	純モンゴル語
Ma2	男	35	教師	大学	Mソム	純モンゴル語
Ma3	女	38	教師	高校	Mソム	加授純モンゴル語
Ma4	女	45	失業者	高校	Mソム	加授純モンゴル語
Ma5	男	38	公務員	高校	Mソム	加授モ→純モンゴル語→加授モ
Ma6	男	45	公務員	高校	Mソム	純モンゴル語→加授モ
Ma7	女	44	教師	高校	Mソム	加授モ→純モンゴル語
Ma8	女	35	公務員	高卒専門学校	ホルチン区他地域	純モンゴル語
Ma9	男	30	公務員（自営業）	中学校	Mソム	純モンゴル語
Ma10	女	44	公務員（自営業）	高校	Mソム	加授純モンゴル語
Ma11	女	30	公務員	師範学校	Mソム	純モンゴル語
Ma12	女	32	教師	師範学校	通遼市他地域	純モンゴル語
Ma13	女	39	農民	中学校	通遼市他地域	純モンゴル語
Ma14	男	40	農民	高校	Mソム	加授純モンゴル語
Ma15	女	38	農民	小学校（4年）	通遼市他地域	純モンゴル語
Ma16	女	44	農民	高校	Mソム	加授純モンゴル語
Ma17	女	38	農民	中学校	Mソム	加授純モンゴル語
Ma18	男	35	農民	小学校（3年）	Mソム	純モンゴル語
Ma19	女	39	農民	中学校（2年半）	Mソム他地域	加授純モンゴル語
Ma20	男	42	農民	高校	Mソム	加授純モンゴル語
Ma21	男	37	農民	中学校	Mソム	加授純モンゴル語
Ma22	女	43	農民	高校	Mソム他地域	加授純モンゴル語

加授モ＝加授純モンゴル語。

実態調査より作成。

表 1-4 Nb 村の調査対象者の基本属性

NO.	性別	年齢	職業	学歴	出身地	言語教育の類型
Nb1	男	40	農 民	高校	地元	純モンゴル語
Nb2	女	41	農 民	中学校	N 鎮他地域	純モンゴル語
Nb3	女	38	農 民	中学校	左翼後旗他地域	純モンゴル語
Nb4	男	34	農 民	中卒専門学校	地元	純モンゴル語
Nb5	男	38	農 民	中学校	地元	純モンゴル語
Nb6	男	44	農 民	小学校	地元	純モンゴル語
Nb7	女	49	農 民	中学校	地元	純モンゴル語
Nb8	男	43	農 民	中学校	地元	純モンゴル語
Nb9	男	35	農 民	高校	地元	純モンゴル語
Nb10	男	34	農 民	小学校（3 年）	地元	純モンゴル語
Nb11	男	31	農 民	大学	地元	純モンゴル語

実態調査より作成。

表 1-5 Ma 村の都市的職業従事者たちの職歴（[年]）

Ma1	[1987]中学校教師
Ma2	[1993]中学校教師
Ma3	[1990]中学校教師→[1999]小学校教師
Ma4	[1979]生活共同組合員→[1992]自営業（小売）→[1999]失業
Ma5	[1989]役所職員（臨時）→[1994]公務員（正規）
Ma6	[1979]小学校教師（臨時）→[1981]役所職員・公務員（正規）
Ma7	[1984]中学校教師（臨時）→[1993]小学校教師（正規）
Ma8	[1995]公務員
Ma9	[1993]消防隊員（臨時）→[1997]公務員
Ma10	[1983]小学校教師（臨時）→[1985]役所職員（臨時）→[1992]公務員（正規）
Ma11	[1997]公務員
Ma12	[1996]中学校教師

実態調査より作成。

表 1-6 Ba 村の調査対象者の基本属性

NO.	性別	年齢	職業	学歴	出身地	言語教育の類型
Ba1	男	49	教師	大学	ジャロド旗他地域	純モンゴル語
Ba2	女	43	自営業（小売業）	高校	通遼市他地域	純モンゴル語
Ba3	男	44	教師	大学	ジャロド旗他地域	純モンゴル語
Ba4	女	42	自営業（小売業）	高校	B 鎮	純モンゴル語
Ba5	男	42	自営業（レストラン経営）	高校	B 鎮	純モンゴル語
Ba6	男	41	自営業（下宿屋）	高校	B 鎮	純モンゴル語
Ba7	女	40	教師	中卒専門学校	B 鎮	純モンゴル語
Ba8	男	42	教師	短大	B 鎮	純モンゴル語
Ba9	男	46	公務員	大学	ジャロド旗他地域	純モンゴル語
Ba10	男	42	公務員	高校	B 鎮	純モンゴル語
Ba11	女	41	清掃労働者（臨時）	中学校	B 鎮	純モンゴル語

実態調査より作成。

表 1-7 Bb 村の調査対象者の基本属性

NO.	性別	年齢	職業	学歴	出身地	言語教育の類型
Bb1	女	30	牧民	中学校	地元	純モンゴル語
Bb2	男	39	牧民	小学校	地元	純モンゴル語
Bb3	女	44	牧民	中学校	地元	純モンゴル語
Bb4	女	38	牧民	中学校	地元	純モンゴル語
Bb5	男	40	牧民	小学校	地元	純モンゴル語
Bb6	女	46	牧民	中学校	地元	純モンゴル語

実態調査より作成。

表 1-8 Bc 村の調査対象者の基本属性

NO.	性別	年齢	職業	学歴	出身地	言語教育の類型
Bc1	女	34	牧民	中学校	地元	純モンゴル語
Bc2	女	44	牧民	未就学	B 鎮他地域	—
Bc3	男	34	牧民	中学校	地元	純モンゴル語
Bc4	女	45	牧民	未就学	地元	—
Bc5	男	37	牧民	中学校	地元	純モンゴル語

実態調査より作成。

表 1－9 Ba 村の都市的職業従事者たちの職歴（[年]）

Ba1	[1982]中学校教師
Ba2	[1985]生活共同組合員→[1993]自営業（小売）
Ba3	[1989]中学校教師
Ba4	[1988]生活共同組合員→[1993]自営業（小売）
Ba5	[1990]電力労働者→[1998]「様々な技術労働」→[2003]レストラン経営
Ba6	[1990]小学校教師（臨時）→[2003]幼稚園経営
Ba7	[1991]小学校教師（臨時）
Ba8	[1990]中学校教師
Ba9	[1986]中学校教師→[1997]公務員
Ba10	[1989]軍隊→[1991]役所職員（臨時）→[2001]公務員（正規）
Ba11	無職→[1993] 掃除労働者（臨時）

実態調査より作成。

第2章 現在の生活過程

本章では、調査対象者たちの現在の生活過程の特徴を分析する。

第1節 ホルチン区都市部在住者の生活過程

まずホルチン区都市部在住者の生活過程を見てみよう。

都市部の公務員・教師・医者などの専門的・管理的職業従事者の場合、収入が比較的安定しており、専門的でやりがいのある仕事に従事できたと感じている。ただし、「大都市や沿海地域と比べると、収入がはるかに低い」と認識している。彼・彼女らは、仕事では特に大きな問題や悩みがない。

彼・彼女らの配偶者の職業・学歴・収入は、基本的に彼・彼女らに近似している（表2-1）。世帯収入が安定しているため、経済的に大きな困難はない。各種の耐久消費財が充実しており、家にケーブル・テレビ、インターネットもつないでいる。蔵書が多く、特に夫婦とも大学教師の場合、1000冊を超えている（表2-2）。

職場におけるモンゴル語の使用は、仕事の内容によって多少の差が見られる。役所の公務員の場合、「モンゴル文字は一部の公文書のタイトルにしか使われていない」というように、職場で使用される文字媒体はほとんどすべて漢語である。モンゴル語を使うのは、農耕・牧畜地域から陳情にきた農民・牧畜民と接触するときに限られている。大学教師の場合、モンゴル語による授業を担当する時にはモンゴル語が使われるが、各種の会議・活動では漢語を使うことが一般的である。モンゴル医学などの限られた専門では、モンゴル語の文献を参照することがあるが、多くの専門分野ではモンゴル語を必要としていないのが現状である。医師の場合も、モンゴル医学の本を参照するときにモンゴル語を使うが、病院の会議・活動はすべて漢語で行われている。ただし、こうした専門的・管理的職業従事者は、長年のトレーニングを通じて高い漢語能力を獲得してきているため、多くは自分自身を「蒙漢兼通」（モンゴル語と漢語のバイリンガル）と評価しており、現時点ではそれほど大きな困難は感じていない。

＊「仕事では、ほとんど漢語しか使わない。公文書のタイトルだけがモンゴル語だ。それ以外に、モンゴル文字で書かれたものはほとんど見当たらない。職場に漢人がたくさん働いているので、ふだんのコミュニケーションでは漢語を使う。田舎のモンゴル人が陳情にくるときには、漢人の職員は対応できないので、そのときに私たちは陳情の人たちとモンゴル語で話すことがある。親友と思う人は3、4人いる。みんなモンゴル人である。仕事上の悩みは特にない。非常に順調だ」(T1、公務員)

「モンゴル人のクラスの授業やモンゴル医学の専門書を読むときに、モンゴル語を使う。しかし会議などでは漢語を使うのは一般的である。昔は漢語ができなくて苦労したことが多かったが、もうだいぶ上達してきた。今は「蒙漢兼通」といってもいいと思う。聴く、話す、読む、書く、訳す、どれについても問題を感じない。生活、研究、授業、講演など、あらゆる面で漢語が理解できるし、うまく使える。仕事上は研究経費が少ないことに少し不満があるが、特に大きな問題はない。生活は非常に安定している。友達には漢人もいるが、日常的によく接触する人にはモンゴル人が多い」(大学教師)

次に自営業者・労働者の場合、職場と職種により、収入は大きく異なる。年収5萬元以上の自営業者がいる一方、年収が2萬元に満たない自営業者もいる(表2-2)。同じ工場労働者の中でも、地域の産業を支えているガラス工場の場合、仕事が多く、賃金が比較的、高いが、印刷工場の賃金は非常に低く、仕事がないときには月給200元にも達しないケースまで見られる。自営業者・労働者は、「仕事がつまらないと思うときもあるが、生きるためにしなければならない」と語る。彼・彼女らの配偶者の職業、学歴と収入は、基本的に彼・彼女らに近似しているが、例外的には公務員のケースも見られる(表2-1)。特に労働者たちは「経済的に苦しい」と感じており、家庭用の耐久消費財も充実していない。経済的な理由でケーブル・テレビに加入していない世帯もある。

職場において、モンゴル文字の読み書き能力を生かしているのは、印刷工場のモンゴル語の書籍の植字・印刷作業に従事している労働者だけである。また、下宿屋の場合、下宿する学生が基本的にモンゴル族であるため、モンゴル語を使うことも多い。それ以外の労働者・自営業者たちは、漢族と一緒に働いているケースが多く、職場でのコミュニケーションもほとんど漢語で行われている。

＊「1999年に「買断工龄」、つまり会社から定年までの給与を一括でもらい、会社との雇用関係を解除することにした。そのお金で車を買って、自営業でタクシー運転手を始めた。タクシーではいろいろな顧客と出会うので、漢語ができないと困る。私の場合、漢語で話すときに苦労するが、意思の疎通は何とかできる。でも漢字を読むのは難しい。学校であまり勉強しなかったし、本を読むこともないから、読めない漢字がたくさんある。去年の年収は1万5千元くらいだったが、最近タクシーがたくさん増えてきたので、仕事はますます厳しくなってきた。今は主に夜の時間帯で運転している。だから少し危険性もある」（タクシー運転手）

「同じ作業場には30数人いるが、モンゴル人は私を含めて2人しかいない。ふだん使うのはもちろん漢語。私ともう1人との間ではモンゴル語を使っていたが、周りは全部漢人だから、いつの間にか2人の間でも漢語を使うようになった。私は今、主にガラス製品の運搬作業をしている。重労働だけど、収入はまあまあいいと思う。会社の収益がいいときには月給は2千元を超えるときもある。だけど、支出も多いから、家庭の経済状況はかなり厳しい」（ガラス会社労働者）

「収入が低く、経済的に非常に苦しい。工場での労働時間が長く、平日は12時間にもぼる。今は昔と違って、労働者はもはや人間として扱われなくなった。動物にも及ばない。仕事がないと強制的に休ませられる。個人経営の会社だから、仕事がないければ、一銭もくれない。給料の支払いが遅延することもある。家にカラーテレビはあるが、節約のためにケーブル・テレビには加入していない。だから3つのチャンネルしか見られない。うちにある本は子どもの教科書だけだ。仕事はモンゴル文字の植字だから、作業場の同僚はほとんどモンゴル人だ。ふだんモンゴル語を使うことが多い」（印刷工場労働者）

日常生活の場面では、職場とは異なって、都市在住者たちはモンゴル語¹の使用頻度が全体的に高い。家族・親族とのコミュニケーションは、多くはモンゴル語で行われている。親友にもモンゴル族が多く、基本的にモンゴル語で話をしている。彼・彼女らには漢族の友人をもつ人もいるが、それは主に仕事関係で知り合った友人に限られている。親友の多くはモンゴル族である。

専門的・管理的職業従事者は、日常生活の中でも新聞・雑誌などの活字メディアとの接

¹ 調査対象者たちの使用しているモンゴル語の口語の特徴に関しては、第4章第2節第1項で述べる。

触が多く、インターネットの使用も増加している。ただしそうしたメディア接触の中で、モンゴル語のメディアは、テレビのモンゴル語放送に限られている。視聴するモンゴル語のテレビ番組は、モンゴル族の文化・習慣を紹介する番組、民族音楽番組などである。

＊「新聞・雑誌はよく読むが、最近インターネットをよく使うようになった。テレビは漢語・モンゴル語両方とも見る。でも、モンゴル語のチャンネルは 2 つしかなく、数十チャンネルもの漢語の放送に比べ、番組の数と内容の多様性の面で圧倒的に劣っている。ニュース番組・ドラマなどは漢語の番組の翻訳に頼らざるをえない。ニュースなど、すでに漢語のほうを見ているから、モンゴル語チャンネルを繰り返して見る必要がない。ふだんみるモンゴル語チャンネルは、娯楽番組だけだ」(公務員)

一方、労働者・自営業者の人たちは、新聞・雑誌などの活字メディアとの接触が少ない。一部の人は、「読めない漢字が多くて、新聞を読んでも意味がわからない」と語る。モンゴル語のメディアは、専門的・管理的職業従事者たちと同じくテレビのモンゴル語放送に限られている。視聴するモンゴル語の番組も、民族音楽、娯楽番組に集中している。漢語チャンネルを見る時間は、モンゴル語のそれよりはるかに多い。

＊「読めない漢字が多くて、新聞を読んでも意味がわからない。モンゴル語の放送は、歌やウリゲル²以外はつまらない。漢語の方が、番組が多くて、質もいいと思う」(料理人)

最後に都市在住者たちの将来展望を見てみよう。

まず自営業者の場合、仕事の収益をみて、将来、新しい事業をやりたいという意欲的な計画が多く聞かれる。

自営業者以外の場合は、多くは現在の仕事を続け、これまで通りホルチン区の都市部で暮らしていきたいと考えている。ただし、一部の専門的職業従事者は、「もっと専門的知識と技術を生かして、いい仕事につきたい。だからチャンスがあれば、通遼を離れる可能性もある」と語っている。労働者たちは「技術もあまりないから、この年でやりがいのある

² ウリゲル (üliger) はモンゴル族の民間における口承文芸の一つである。四胡・チョールなどモンゴル族の伝統的な楽器で伴奏するホーリン・ウリゲルと楽器を使わないヤボガン・ウリゲルに分かれる。歴史物語を題材とするものが多い。特に内モンゴル東部では広く伝わっている。

仕事を見つけるのは難しい、今の仕事を続けるしかない」と語っている。

第2節 農耕地域在住者の生活過程

では次に、農耕地域居住者の生活過程をみていこう。

まず、都市部への交通アクセスが比較的便利な Ma 村である。

Ma 村の都市的職業従事者は、多くは年収 1 万元以上、兼業の場合 5 万元を超えるケースもあり、都市部の専門的・管理的職業従事者や一部の自営業より低い、農村では比較的、安定している（表 2-5）。仕事上は特に大きな問題がない。

職場におけるモンゴル語の使用率は、教師がもっとも高い。彼・彼女らのほとんどはモンゴル語で授業を行い、同僚にもモンゴル族が多いので、職場でも基本的にモンゴル語を使っている。漢語のレベルには個人差があるが、特に漢語で苦労することはあまりない。これに対し、公務員の場合、職場におけるモンゴル語の使用率がかなり低い。彼・彼女らの働く役所では、公文書がすべて漢語で作られているばかりではなく、漢族の公務員も多く働いているため、日常のコミュニケーション、会議などは漢語で行われるのが一般的である。

彼・彼女らの配偶者は、多くが教師・公務員・労働者などであり、彼・彼女らと同様、都市戸籍を持っている（表 2-3）。彼・彼女らの世帯には、テレビ、洗濯機などの消費財が充実しており、一部の世帯はパソコンも所有している。また農村では実用性の高いオートバイも全世帯が所有している。テレビ用の衛星受信アンテナも全世帯が所有している。蔵書の量は世帯によって異なるが、後述の農民家庭よりは明らかに多くもっている。

彼・彼女らの接触するメディアは、新聞・雑誌などの活字メディアとテレビが多い。一部の人は仕事の関係でモンゴル語の新聞・雑誌も見ると、それ以外はすべて漢語のものをしている。視聴するモンゴル語のテレビ番組は、基本的に音楽番組にかぎられている。モンゴル語のチャンネルについては、多くの人は「面白さに欠けている」と感じている。

家庭内においては、都市戸籍の世帯は基本的にモンゴル語を使用している。近隣の友達とのコミュニケーションもモンゴル語が圧倒的に多い。

* 「私たちの年収は大体 4 万元くらい。やはり低いと感じるけれど、田舎では普通に生

活できる。去年、パソコンも買った。仕事や生活では大きく困ることがない。役所では漢語を使うことが多い。私の仕事は特に書類を書くことが多いが、今は全部漢語で書いている。モンゴル語の新聞を読むこともあるが、新しく翻訳されたことばで意味がわからないものが多い。かえって漢語のほうが読みやすい。モンゴル語のテレビ番組を見ることは少ない。番組が少ないし、質的にも漢語のものより劣っている。歌番組なら、たまに見ている」（公務員）

「私は中学校特級教師の資格を持っているから、収入はまずまずだ。でも都市に比べるとやはり低い。授業はモンゴル語で教えているし、同僚もほとんどモンゴル人だから、ふだん漢語を使うことは少ない。モンゴル語のラジオ放送はよく聴くけれど、テレビ放送を見ることは少ない」（教師）

Ma 村の農民の場合、配偶者も農民である。世帯年収は多くが 2 万元以下にとどまっている（表 2-3、2-5）。しかもこの収入の中から農業経営費を支出しており、また「気候不順だとどうしようもない」ので、実際には都市の工場労働者に比べてもはるかに貧困である。「経済的に苦しく、借金しなければ生きていけない」と語るケースも多い。また、特に家族が重病にかかると労働力不足を招き、農作業にも大きなダメージを与えるため、病気に対する不安が強い。しかも都市の工場労働者と大きく異なり、農民には医療保険もない。実際、夫婦とも病気になり、家計がますます苦しくなってきたケースもある。

彼・彼女らの栽培する農作物は主にトウモロコシであり、一部の家庭ではリョクトウやアズキの栽培も行っている。家畜は豚や鶏のほか、牛、羊、ヤギなども飼っている。ただし、ほとんど 10 頭以下と、後述の牧畜地域に比べ、規模がはるかに小さい。さらに近年、牧地の砂漠化が進み、政府の打ち出した放牧禁止政策が実施される中、「放牧はますます困難になり、畑作の比重が増してきた」と語る。

＊「農家の収入は不安定だ。農業収入があるようにみえても、経営につぎ込んだお金を考えると赤字のこともある。うちは家畜の売買で収入が少し増えたが、病気にかかり、畑も他の人に委託せざるをえなくなり、家計は苦しい」（Ma 村、農民）

農民の世帯は蔵書が少なく、「子どもの教科書しかない」と語る。ただし、ほとんどの世帯はテレビ用の衛星受信アンテナをもっており、一部は固定電話も所有している。

彼・彼女らは、日常的にほとんどモンゴル語だけを使うが、買い物や都市部にいくときに漢語を使うこともある。そこで地元出身者は、「漢語は簡単な会話はできる。都会に行っても言語の面でそれほど困らない」と感じている。しかし、他の農耕地域から嫁入りした妻たちは「漢語はほとんどわからない」と語る。そのうち1人は Nb 村の出身（ケース Ma13）だが、彼女は次のように語っている。

＊「漢語はほとんどわからない。夫は地元出身だからよくわかる。彼は漢語のラジオ放送を聞くし、漢語のテレビ・ドラマも見る。でも私は無理だ。ふだんモンゴル語のラジオ放送しか聞かない」

このことから、「蒙漢混住地域」であるMソムは、比較的、漢語の浸透が強いことが伺える。

Ma 村の農民たちは、活字メディアとの接触がほぼ皆無である。上述の引用のように、テレビ・ラジオなど映像・音声メディアとの接触に限られている。特に、ラジオを聴くことは、都市在住者と農村の都市的職業従事者にはあまり見られない特徴である。「農作業をしながらラジオを聞くことがよくある」というように、彼・彼女らにとって、ラジオはそれなりの独自の役割を果たしている。地元出身者はモンゴル語と漢語の両方の放送を聞くが、漢語が聞き取れない外地出身者はモンゴル語だけを聞いている。また、テレビで使われているモンゴル語標準語（内モンゴル中部のチャハル方言）が聞き取れないため、彼・彼女らはモンゴル語のテレビ放送も見していない場合も多い³。

＊「普段はモンゴル語しか使わないので、漢語ができなくても不便はない。だけどテレビはやはり漢語のほうが面白い。モンゴル語の放送は西部のことばで流されているので、私たちはよくわからない。主人は『こういう風に話すモンゴル語より、漢語のほうがはるかに分かりやすい。聞いても気持ちいい』といていた」（Ma 村、農民）

では次に、都市部からの交通アクセスが不便な Nb 村である。

Nb 村の農民の場合、世帯の経済状況の点では、Ma 村の農民と大差はない。彼・彼女ら

³ 方言をめぐる言語意識に関しては、第4章第2節第3項で述べる。

の世帯年収は3万元以下である（2-6）。農業経営費の支出も大きく、「経済的に苦しい」と語っている。借金している世帯もある。蔵書についても、「子どもの教科書しかない」と語る。ほとんどの世帯は、テレビ用の衛星受信アンテナをもっており、また携帯電話も所有している。農作物もトウモロコシ中心で、牛・羊などを飼う世帯も見られる。彼・彼女らの配偶者も農民である（表2-4）。

ただしNb村の言語環境は、Ma村のそれと少し異なっている。彼・彼女らは日常的にモンゴル語を使っており、村以外に出向くとしても、せいぜいN鎮の中心村またはホルチン左翼後旗の中心地に行くことが多い。ホルチン区都市部まで出向くことは、ほとんどない。前述のように、ホルチン左翼後旗はモンゴル族の集住地域であり、旗内ではモンゴル語の使用率が高い。したがってNb村の農民たちは、たとえ村外に出向くとしても漢語に切り替える必要が少なく、それだけに「漢語で話をするのは困難」と語っている。彼・彼女らは、モンゴル語のテレビ・ラジオ放送を見たり聞いたりすることが多い。一部の家庭ではDVDプレーヤーもあり、モンゴル語の歌や漫才をみている。ただし、彼・彼女らは漢語のメディアから完全に隔離されているわけではない。衛星受信アンテナで受信する番組のほとんどが漢語のものであるため、漢語のテレビ放送は徐々に彼・彼女らの生活に浸透しつつある。彼・彼女らはモンゴル語の使用については、「ガンジグ（旗の中心地）からは出られない、通遼では通じない」と表現しており、自分たちが住むホルチン左翼後旗を出ると、モンゴル語は使えなくなると認識している。さらに最近、ホルチン区の隣接地域に大規模な化学調味料の工場が建てられ、Nb村の一部の若者は工場へ日帰りのアルバイトに行くようになった。こうした中、Nb村と外部の漢族の世界とのつながりもますます増加しつつある。

＊「収入はますますだけど、支出も多い。父は12年間、脳血栓を患った末、去年亡くなったが、私たちは経済的にも精神的にも大変苦勞した。私は漢字が一部読めるけれど、漢語で話すのは苦手だ。ふだんテレビを見ることはよくある。でもモンゴル語のチャンネルはあまり見ない。特に内モンゴルテレビ局の番組は、ここのモンゴル語とは違うことばで放送するので、理解できないことがよくある。漢語の放送ほど聞き取れない。今年、DVDプレーヤーを買ったので、今はモンゴル語のDVDはよ

く見ている⁴⁾ (Nb 村、農民)

さて、Ma 村の都市的職業従事者の多くは、将来、ホルチン区都市部に移住する予定である。一部はさらに都市部での転職まで視野に入れている。それは、「都市では生活が便利」、「都市は文明的」だからである。農民の中にも数少ないが、都市部で仕事をしたいと語る人がみられる。しかし、多くの農民は地元での暮らしを続ける予定である。Nb 村の農民たちもまた、地元で生活していこうと考えている。

第 3 節 牧畜地域在住者の生活過程

最後に、牧畜地域在住者の生活過程の特徴をみていこう。

まず牧畜地域の中心都市街地の機能を有する Ba 村では、都市的職業従事者の世帯年収はほとんど 2 万元以上、自営業の場合 5 万元を超えるケースもあり、比較的に安定している（表 2-10）。彼・彼女らの配偶者も都市的職業に従事しており、全世帯が都市戸籍を持っている（表 2-7）。仕事や生活上は特に大きな問題がない。彼・彼女らは、テレビ、冷蔵庫、洗濯機などの家庭用耐久消費財を多数所有しており、半数以上はオートバイを所有している。また一部はパソコンと車も所有している。蔵書数は世帯によって大きく異なる。

彼・彼女らは、職業を問わずモンゴル語の使用率が高い。公務員でも、書類は漢語・モンゴル語両方で作成するが、職場での会話はほとんどモンゴル語で行われている。ただし将来、B 鎮を離れて活躍したいと考えている一部の都市的職業従事者にとっては、漢語の習得が一つの悩みにもなっている。

彼・彼女らのうち、教師と公務員が接触するメディアは、新聞・雑誌などの活字メディアとテレビが多いが、自営業者や労働者は活字メディアとほとんど接触していない。教師と公務員は、仕事の関係でモンゴル語の新聞・雑誌も見ている。視聴するモンゴル語のテレビ番組は個人の好みによって異なるが、ニュース、音楽、スポーツ、民俗、法律、映画など広範なジャンルにわたり、ドラマ以外をほぼ全部カバーしている。特に内モンゴルテレビ局のモンゴル語番組が好きな人が多い。彼・彼女らが唯一興味を持たないのはドラマ

⁴⁾ モンゴル語の DVD には伝統的な民謡から漫才、流行音楽までの様々なジャンルのものがあるが、もっとも好まれているのはやはり内モンゴル語東部の方言による叙事民謡やウリゲルである。

であり、「すでに放送された漢語のものを訳しているから、あまり見たくない」のである。

＊「収入は確かにほかの地域に比べると低い。でも田舎では困ることがない。生活も安定している。役所だから、書類をたくさん作る。だいたい上級機関からの書類は全部漢語で、それをモンゴル語に訳して下のほうに届けなければならない。また、上級機関に送る書類は漢語で作成する。言語が理由で困ることは特にない。職場ではみんなモンゴル人だから、いつもモンゴル語を使っている」（公務員）

「都市の学校に転職したいが、大学院の学歴がないと難しい。今年は大学院に 3 度目の挑戦をした。結果はまだ出ていない。政治の試験は漢語で答えないといけないから、うまく答えることができなくて苦労してきた。一昨年と去年、二年とも合格できなかった。自分の考えていることを漢語でうまく書くのは難しい。モンゴル語のチャンネルはふだん見ている。たとえば『merged ün čuylayan』などの番組、音楽関係の番組をよく見る」（教師）

「私は売店の仕事をして、主人は家畜の売買をしている。経済的には困ることがない。生活も安定している。娯楽が少なく、つまらないときもあるが、時々麻雀をしに行く。テレビは漢語とモンゴル語の両方を見る。モンゴル語の番組にも面白いものがある。『yurban dabay-a』のような娯楽番組や、ニュース番組、スポーツ番組はよく見る」（小売業者）

Bb 村と Bc 村の牧畜民は、経済状況は世帯ごとに大きく異なる。年収 5 万以上で、車をはじめとする耐久消費財を多くもっているケースもあれば、年収 1 万以下の貧しいケースもある（表 2-11、2-12）。こうした牧畜民内部での格差構造は、農耕民と異なる、牧畜民の固有の生産様式に基づく。すなわち農耕地域の場合、農民 1 人あたりの耕地が決まっており、所定の耕地以外での農耕はできない。農作物が同じであれば、収穫率もほとんど同じであるため、集落内部での世帯収入の格差はかなり小さい。これに対し、牧畜地域では、1980 年代に家畜の私有化が始まったころは、世帯ごとに所有する家畜の頭数には大きな差がなかった。しかし、家畜の繁殖・飼育技術や勤勉性に個人差があり、繁殖と販売のバランスを考慮するなど経営戦略にも個人の判断の余地が大きいため、その後、家畜の頭数が増え始めた。さらに放牧地の私有化が、こうした動きを促進した。そのため、牧畜民どうしの間に格差が生じる傾向が、農民間よりも顕著なのである。現在、富裕な牧畜民

の世帯では、家畜の頭数が牛 100 頭、羊・ヤギ 200 頭を超える。一方、貧困な牧畜民世帯では 10 数頭の牛しか飼育していないケースもある。

ただし、彼・彼女らは貧富を問わず、全体としては牧畜業の衰退の危機に直面している。政府の打ち出した放牧禁止政策⁵や道路拡張工事などによる牧地の減少により、自分の生計が影響を受けることについての心配も聞かれる。

＊「最近十数年、家畜の頭数が増えてきたので、生活もよくなった。去年、車も買った。遠出のときに使っている。生活の問題といえば、今一番困っているのは、放牧禁止政策で放牧が制限されていることだ。放牧禁止令のため、今は羊とヤギを放牧できない。今年の禁止期間は半年だけど、来年からは丸一年になると聞いた。そうすると、ずっと柵で囲って飼育するしかない。最近道路拡張工事で牧地が接収され、牧地の一部が移転されることになった。移転をめぐる話し合いはややこしくて、頭が痛くなる。あれこれ開発が多くなるにつれて、牧地が少なくなっていくのが心配だ」（Bc 村、牧畜民）

「生活は非常に苦しい。支出は収入より多い。子どもを学校に行かせるお金がない。今、娘だけを学校に通わせている。息子は学校をやめて、今、放牧をしている。たまに道路建設のところで日雇いの仕事もする」（Bb 村、牧畜民）

「収入は少ない。生活費と 2 人の子どもの教育費用だけでぎりぎりだ。残るものは何もない」（Bc 村、牧畜民）

彼・彼女ら牧畜民は、多くは地元から離れたことがなく、日常的にほとんどモンゴル語を使用している。家畜の売買の時に漢族が村にやってくることもあるが、そのときは村の中で比較的、漢語が堪能な人に通訳を頼んでいる。

＊「ここでは漢語を使うことがない。でも外地に出かけたら漢語を使うことが多い。私は漢語がほとんどわからないので、出かけるときには漢語ができる若者を呼んで一

⁵ 近年、草原の劣化が深刻化してきたため、中国政府は「生態移民」（生態環境保護のための住民の立ち退き）と「退牧返草」（放牧をやめて草原の再生を促す）という二つの政策を打ち出した。B 鎮では「生態移民」政策は実施されなかったが、「退牧返草」政策が 2003 年から実施されはじめた。2009 年現在、冬から春にかけての半年間、すべての牧地での放牧が禁止されている。「生態移民」と「退牧返草」については賛否両論があるが、その詳細は小長谷ほか編（2005）を参照。

緒に行く」(Bb 村、牧畜民)

牧畜民世帯では蔵書が少なく、多くは「子どもの教科書しか持っていない」。接触するメディアはテレビが中心で、一部はラジオも聞いている。モンゴル語の放送はよく見られて(聞かれて)いる。またテレビの漢語チャンネルも見るが、「ことばはあまりわからなけれど、映像から意味がだいたい推測できる程度だ」と語る人もいる。

第4節 小括

以上、調査対象者の現在の生活過程の特徴を分析してきた。簡単に総括しよう。

まずホルチン区都市部の調査対象者のうち、専門的・管理的職業従事者は、収入が安定しており、仕事と生活に大きな悩みや問題がない。彼・彼女らは職場で習得が難しい文語を含めて漢語を使うことが多い。彼・彼女らは長年のトレーニングを通じて、高度な漢語能力を獲得してきており、自分たちを漢語とモンゴル語のバイリンガルと評価している。

一方、都市部の自営業と労働者では、一部の自営業を除き、多くは収入が少なく、経済的に困難と感じている。彼・彼女らは職場で特に漢語の文語を使うことが少なく、漢語の新聞・雑誌を読むことも少ない。ただし仕事上は漢族とのコミュニケーションが必要なので、漢語の口語を使うことが多い。

なお都市部でも、日常生活では、職業を問わず、家族や親戚・友人などとの間では、モンゴル語がよく使われている。

農耕地域のMa村とNb村の調査対象者のうち、Ma村の都市的職業従事者たちの多くは、収入が農村では高いほうに入り、生活が安定している。「蒙漢混住地域」であるため、公務員は漢語を使う頻度が高い。一方、教師たちは、職場がモンゴル語学校であり、同僚に漢族が少ないため、漢語を使うことは少ない。

Ma村とNb村の農民たちは、収入が低く、農業経営費の支出も大きく、経済的に苦しいと感じている。都市部への交通アクセスがよいMa村の農民たちは、漢族と接触の機会が比較的によく、漢語がある程度聞き取れる。しかし都市部とのアクセスが不便なNb村の農民たちは漢族との接触が少なく、漢語を使用することが少ない。

最後に牧畜地域のB鎮の調査対象者のうち、Ba村在住の都市的職業従事者たちは、収入

が比較的に高く、多くの人の生活が安定している。彼・彼女らは職業を問わず、仕事におけるモンゴル語の使用率が高く、日常生活でもモンゴル語をよく使う。モンゴル語のテレビ番組もよく見る。

Bb 村と Bc 村の牧畜民は、牧畜の固有の生産・経営様式の特質に規定され、世帯間の経済格差が大きい。ただし彼・彼女らは基本的にモンゴル語のみの環境で生活しており、地元を離れない限り、漢語を使うことはほとんどない。もちろん漢語もあまりできない。

第2章の図表

表2-1 ホルチン区都市部の調査対象者の配偶者の基本属性

NO.		年齢	職業	学歴	出身地	言語教育の類型
T1	妻	33	中学校教師	大学	ホルチン区都市部	漢語
T2	妻	37	医者	中卒専門学校	ホルチン区都市部	漢語
T3	妻	37	中学校教師	師範学校	通遼市農村地域	純モンゴル語
T4	妻	40	医者	専門学校	通遼市農村地域	純モンゴル語
T5	夫	41	公務員（正科級）	師範学校	通遼市農村地域	純モンゴル語
T6	妻	40	大学教師	大学	通遼市農村地域	純モンゴル語
T7	妻	40	大学教師	大学	通遼市農村地域	純モンゴル語
T8	妻	44	大学教師	大学	通遼市農村地域	純モンゴル語
T9	妻	38	大学教師	大学	通遼市農村地域	純モンゴル語
T10	夫	46	大学教師	大学	通遼市農村地域	純モンゴル語
T11	妻	47	医者	大学	通遼市農村地域	純モンゴル語
T12	夫	42	大学教師	大学	通遼市農村地域	純モンゴル語
T13	夫	45	大学教師（管理職・兼）	大学	通遼市農村地域	純モンゴル語
T14	妻	36	中学校教師	短大	通遼市農村地域	純モンゴル語
T15	夫	41	公務員	大学	通遼市農村地域	純モンゴル語
T16	夫	43	自営業（スーパー経営）	高校	ホルチン区都市部	漢語
T17	妻	39	労働者（印刷会社）	高校	通遼市農村地域	純モンゴル語
T18	妻	42	労働者（印刷会社）	高校	通遼市農村地域	純モンゴル語
T19	夫	44	労働者（紡織会社）	高校	ホルチン区都市部	漢語
T20	夫	39	労働者（アルミ会社）	中学校	通遼市農村地域	純モンゴル語
T21	夫	44	労働者（印刷会社）	高校	内モンゴル他地域	純モンゴル語
T22	妻	48	労働者（印刷会社）	高校	通遼市農村地域	純モンゴル語
T23	妻	38	自営業（下宿屋）	中学校	通遼市農村地域	純モンゴル語
T24	夫	34	自営業（タクシー運転）	中学校	通遼市農村地域	純モンゴル語
T25	夫	31	労働者（アルミ会社）	高校	通遼市農村地域	純モンゴル語

実態調査より作成。

表 2-2 ホルチン区都市部の各世帯の年収と所有する耐久消費財

NO.	耐久消費財						世帯年収					蔵書		
	テ	冷	洗	パ	オ	車	①	②	③	④	⑤	①	②	③
T1	○	○	○	○						○		○		
T2	○	○	○	○						○				○
T3	○	○	○	○	○					○		○		
T4	○	○	○	○							○		○	
T5	○	○	○	○	○						○			○
T6	○	○	○	○						○				○
T7	○	○	○	○						○				○
T8	○	○	○	○	○					○				○
T9	○	○	○	○						○				○
T10	○	○	○	○						○				○
T11	○	○	○	○						○		○		
T12	○	○	○	○	○					○		○		
T13	○	○	○	○		○				○				○
T14	○	○	○	○						○				○
T15	○	○	○	○					○			○		
T16	○	○	○	○	○						○	○		
T17	○	○	○					○				○		
T18	○		○						○			○		
T19	○	○	○	○				○				○		
T20	○	○	○						○			○		
T21	○		○					○				○		
T22	○							○				○		
T23	○	○	○					○					○	
T24	○	○	○						○			○		
T25	○	○	○					○				○		

耐久消費財：テ＝テレビ、冷＝冷蔵庫、洗＝洗濯機、パ＝パソコン

世帯年収：①1 万円未満、②1 万～2 万円未満、③2 万～3 万円未満、④3 万～5 万円未満、⑤5 万元以上

蔵書：①50 冊未満、②50 冊～100 冊未満、③100 冊以上。仏＝仏像、チ＝チンギス・ハーンの肖像画

実態調査より作成。

表 2-3 Ma 村の調査対象者の配偶者の基本属性

NO.		年齢	職業	学歴	出身地	言語教育の類型
Ma1	妻	40	教師	師範学校	Mソム	加授モンゴル語
Ma2	妻	34	教師	師範学校	通遼市他地域	純モンゴル語
Ma3	夫	43	教師	大学	通遼市他地域	純モンゴル語
Ma4	夫	46	教師	高校	Mソム	加授モンゴル語
Ma5	妻	37	教師	高校	Mソム	加授モ→純モンゴル語→加授モ
Ma6	妻	43	教師	高校	Mソム	加授モンゴル語
Ma7	夫	45	公務員	高校	Mソム	加授モンゴル語
Ma8	夫	34	教師	短大	Mソム	純モンゴル語
Ma9	妻	30	教師	師範学校	Mソム	純モンゴル語
Ma10	夫	42	林業労働者（自営業）	高校	ホルチン区他地域	加授モンゴル語
Ma11	夫	34	電力労働者	中卒専門学校	ホルチン区他地域	加授モンゴル語
Ma12	夫	34	農 民	中学校	地元	純モンゴル語
Ma13	夫	41	農 民	中学校	地元	加授モンゴル語
Ma14	妻	40	農 民	高校	地元	加授モンゴル語
Ma15	夫	39	農 民	中学校（2年）	地元	加授モンゴル語
Ma16	夫	45	農 民	高校	地元	加授モンゴル語
Ma17	夫	41	農 民	中学校	地元	加授モンゴル語
Ma18	妻	36	農 民	高校	通遼市他地域	純モンゴル語
Ma19	夫	41	農 民	中学校	地元	加授モンゴル語
Ma20	妻	42	農 民	中学校	通遼市他地域	純モンゴル語
Ma21	妻	33	農 民	小学校	通遼市他地域	加授モンゴル語
Ma22	夫	43	農 民	高校	地元	加授モンゴル語

加授モ＝加授モンゴル語

実態調査より作成。

表 2-4 Nb 村の調査対象者の配偶者の基本属性

NO.		年齢	職業	学歴	出身地	言語教育の種類
Nb1	妻	38	農 民	小学校	N 鎮他地域	純モンゴル語
Nb2	夫	42	農 民	中学校	地元	純モンゴル語
Nb3	夫	37	農 民	中学校	地元	純モンゴル語
Nb4	妻	30	農 民	中学校	地元	純モンゴル語
Nb5	妻	37	農 民	高校	N 鎮他地域	純モンゴル語
Nb6	妻	39	農 民	中学校	N 鎮他地域	純モンゴル語
Nb7	夫	50	農 民	小学校	N 鎮他地域	純モンゴル語
Nb8	妻	46	農 民	小学校	N 鎮他地域	純モンゴル語
Nb9	妻	31	農 民	中学校	地元	純モンゴル語
Nb10	妻	38	農 民	高校	ホルチン左翼後旗他地域	純モンゴル語
Nb11	妻	31	農 民	高校	左翼後旗他地域	純モンゴル語

実態調査より作成。

表 2-5 Ma 村の各世帯の年収と所有する耐久消費財

No.	耐久消費財						世帯年収					蔵書		
	テ	冷	洗	パ	オ	車	①	②	③	④	⑤	①	②	③
Ma1	○	○	○		○				○					○
Ma2	○		○		○				○					○
Ma3	○		○	○	○			○					○	
Ma4	○		○		○			○				○		
Ma5	○	○	○	○	○				○					○
Ma6	○	○	○		○			○					○	
Ma7	○		○		○				○			○		
Ma8	○		○		○				○			○		
Ma9	○	○	○	○	○	○					○			○
Ma10	○	○	○		○					○				○
Ma11	○	○	○	○	○			○				○		
Ma12	○		○		○		○					○		
Ma13	○				○			○				○		
Ma14	○		○		○			○				○		
Ma15	○				○		○					○		
Ma16	○		○		○		○					○		
Ma17	○		○				○					○		
Ma18	○		○						○			○		
Ma19	○	○	○		○					○		○		
Ma20	○							○				○		
Ma21	○							○				○		
Ma22	○	○	○		○				○			○		

耐久消費財：テ＝テレビ、冷＝冷蔵庫、洗＝洗濯機、パ＝パソコン

世帯年収：①1 万円未満、②1 万～2 万円未満、③2 万～3 万円未満、④3 万～5 万円未満、⑤5 万円以上

蔵書：①50 冊未満、②50 冊～100 冊未満、③100 冊以上。仏＝仏像、チ＝チンギス・ハーンの肖像画

実態調査より作成。

表 2-6 Nb 村の各世帯の年収と所有する耐久消費財

NO.	耐久消費財						世帯年収					蔵書		
	テ	冷	洗	パ	オ	車	①	②	③	④	⑤	①	②	③
Nb1	○		○		○					○		○		
Nb2	○		○		○			○				○		
Nb3	○		○						○			○		
Nb4	○	○	○		○				○			○		
Nb5	○		○		○			○				○		
Nb6	○		○					○				○		
Nb7	○		○					○				○		
Nb8	○				○				○			○		
Nb9	○	○	○						○			○		
Nb10	○				○			○				○		
Nb11	○	○	○		○				○				○	

耐久消費財：テ＝テレビ、冷＝冷蔵庫、洗＝洗濯機、パ＝パソコン

世帯年収：①1 万元未満、②1 万～2 万元未満、③2 万～3 万元未満、④3 万～5 万元未満、⑤5 万元以上

蔵書：①50 冊未満、②50 冊～100 冊未満、③100 冊以上。仏＝仏像、チ＝チンギス・ハーンの肖像画

実態調査より作成。

表 2-7 Ba 村の調査対象者の配偶者の基本属性

NO.		年齢	職業	学歴	出身地	言語教育の類型
Ba1	妻	50	医者	高校	B 鎮	純モンゴル語
Ba2	夫	44	警察	大学	通遼市他地域	純モンゴル語
Ba3	妻	40	教師	大学	B 鎮	純モンゴル語
Ba4	夫	44	自営業（家畜販売）	高校	B 鎮	純モンゴル語
Ba5	妻	41	自営業（レストラン経営）	高校	通遼市他地域	純モンゴル語
Ba6	妻	41	電力労働者	高校	通遼市他地域	純モンゴル語
Ba7	夫	41	公務員	高卒専門学校	通遼市他地域	純モンゴル語
Ba8	妻	45	教師	大学	通遼市他地域	純モンゴル語
Ba9	妻	46	教師	短大	B 鎮	純モンゴル語
Ba10	妻	40	教師	師範学校	B 鎮	純モンゴル語
Ba11	夫	45	失業者	中学校	B 鎮	純モンゴル語

実態調査より作成。

表 2-8 Bb 村の調査対象者の配偶者の基本属性

NO.		年齢	職業	学歴	出身地	言語教育の種類
Bb1	夫	33	牧民	中学校	B 鎮他地域	純モンゴル語
Bb2	妻	36	牧民	小学校	地元	純モンゴル語
Bb3	夫	43	牧民	中学校	地元	純モンゴル語
Bb4	夫	40	牧民	中学校	地元	純モンゴル語
Bb5	妻	41	牧民	小学校	地元	純モンゴル語
Bb6	夫	(死去)				

実態調査より作成。

表 2-9 Bc 村の調査対象者の配偶者の基本属性

NO.		年齢	職業	学歴	出身地	言語教育の種類
Bc1	夫	34	牧民	中学校	地元	純モンゴル語
Bc 2	夫	42	牧民	小学校	地元	純モンゴル語
Bc 3	妻	31	牧民	中学校	ジャロド旗他地域	純モンゴル語
Bc 4	夫	46	牧民	中学校	地元	純モンゴル語
Bc 5	妻	35	牧民	中学校	地元	純モンゴル語

実態調査より作成。

表 2-10 Ba 村の各世帯の年収と所有する耐久消費財

NO.	耐久消費財						世帯年収					蔵書		
	テ	冷	洗	パ	オ	車	①	②	③	④	⑤	①	②	③
Ba1	○	○	○	○	○						○			○
Ba2	○	○	○								○	○		
Ba3	○	○	○	○					○					○
Ba4	○	○	○			○					○	○		
Ba5	○	○	○			○					○	○		
Ba6	○	○	○		○			○				○		
Ba7	○		○	○	○						○			○
Ba8	○	○	○	○							○			○
Ba9	○	○	○		○						○	○		
Ba10	○	○	○	○	○				○					○
Ba11	○	○	○		○		○					○		

耐久消費財：テ=テレビ、冷=冷蔵庫、洗=洗濯機、パ=パソコン

世帯年収：①1 万元未満、②1 万～2 万元未満、③2 万～3 万元未満、④3 万～5 万元未満、⑤5 万元以上

蔵書：①50 冊未満、②50 冊～100 冊未満、③100 冊以上。仏=仏像、チ=チンギス・ハーンの肖像画

実態調査より作成。

表 2-11 Bb 村の各世帯の年収と所有する耐久消費財

NO.	耐久消費財						家畜の頭数（牛）				世帯年収					蔵書		
	テ	冷	洗	パ	オ	車	①	②	③	④	①	②	③	④	⑤	①	②	③
Bb1	○	○			○				○					○		○		
Bb2	○							○			○					○		
Bb3	○	○	○		○	○		○							○			○
Bb4	○	○	○		○			○					○			○		
Bb5	○				○		○					○				○		
Bb6	○				○		○					○				○		

耐久消費財：テ＝テレビ、冷＝冷蔵庫、洗＝洗濯機、パ＝パソコン

家畜の頭数（牛）：①30 頭未満、②30～50 頭未満、③50 頭～100 頭未満、④100 頭以上

世帯年収：①1 万円未満、②1 万～2 万円未満、③2 万～3 万円未満、④3 万～5 万円未満、⑤5 万元以上

蔵書：①50 冊未満、②50 冊～100 冊未満、③100 冊以上。仏＝仏像、チ＝チンギス・ハーンの肖像画
実態調査より作成。

表 2-12 Bc 村の各世帯の年収と所有する耐久消費財

NO.	耐久消費財						家畜の頭数（牛）				世帯年収					蔵書		
	テ	冷	洗	パ	オ	車	①	②	③	④	①	②	③	④	⑤	①	②	③
Bc1	○	○	○		○			○						○		○		
Bc2	○						○				○					○		
Bc3	○	○	○		○	○				○					○			○
Bc4	○				○		○					○				○		
Bc5	○	○	○		○	○	○						○			○		

耐久消費財：テ＝テレビ、冷＝冷蔵庫、洗＝洗濯機、パ＝パソコン

家畜の頭数（牛）：①30 頭未満、②30～50 頭未満、③50 頭～100 頭未満、④100 頭以上

世帯年収：①1 万円未満、②1 万～2 万円未満、③2 万～3 万円未満、④3 万～5 万円未満、⑤5 万元以上

蔵書：①50 冊未満、②50 冊～100 冊未満、③100 冊以上。仏＝仏像、チ＝チンギス・ハーンの肖像画
実態調査より作成。

第3章 子どもの教育—学校選択と教育投資—

本章では、調査対象者たちの子どもの教育をめぐる諸問題について、分析をする。

第1節 ホルチン区都市部

まず、ホルチン区都市部である。

ホルチン区都市部では、漢語で教育を行っている学校は 2006 年現在、小学校、小中一貫校、中学校がそれぞれ 22 校、2 校、15 校あるが、モンゴル族の小中学校は、小中一貫校 1 校しかない。

2005 年現在、7～15 歳の都市部在住のモンゴル族の人口は約 1.4 万人である¹。小中学生の年齢は 7～15 歳が一般的であること、および、義務教育普及率が小学校 99.2%、中学校 95.3%であることをふまえれば²、小中学生の人数も 1.4 万人前後と推定できる。

しかし 2005 年現在、都市部唯一のモンゴル語の小中一貫校・通遼市モンゴル族学校に通っている都市部戸籍の子ども・生徒はわずか 98 人しかいない。しかもその一部は都市部の戸籍に転じた農村出身者である。ホルチン区都市部では、モンゴル族の子どもの大多数が漢語学校に通っていることは確実といえよう。

次に調査対象者たちの学校選択の実態を見てみよう。

都市部在住の調査対象者たちは、すべてが子どもをホルチン区都市部の学校に通わせている。彼・彼女らには、自らの故郷である農耕・牧畜地域のモンゴル語学校に子どもを通わせるという選択肢は、最初から眼中にない。

教授言語別に見ると、漢語学校に通わせているのは 23 世帯、モンゴル語学校に通わせているのは 2 世帯である（表 3-1）。

漢語学校に通わせる理由としては、次のようなことが挙げられる。

第一に、子どもの進学・就職にとって、漢語のほうが有利だからである。ただしここにもさらに細かくみれば、二通りの論理が見られる。

一つは、「モンゴル語だと進学できる大学が限られている」、「モンゴル語だと、一流

¹ ホルチン区の人口統計資料をもとに計算した数字である。

² これは通遼市全体の数字である。ホルチン区都市部ではもっと高いと考えられる。「通遼市 2005 年國民經濟和社會發展統計公報」。

大学に進学できない」など、大学進学を念頭においた選択である。漢語で教育を受けると全国の約 800 校の大学が受験できるが、モンゴル語学校に行くと 30 数校の大学しか受験できない³。しかもその多くは、自治区内の大学である。これは、専門的・管理的職業従事者や高収入の自営業者の間でよく聴かれる理由である。

＊「モンゴル語で教育を受けると、進学・就職の道が閉ざされる。一流大学は、少数民族の言語で受験する学生を入学させない。少数民族のための大学もあるが、そこに入ると卒業後の就職が難しい。入学イコール失業のようなものだ。民族文化は大切だが、個人の利益も大事だ。現実には厳しいから、やむをえず漢語学校に通わせている」（公務員）

今ひとつは、高卒または地元の大学を卒業して就職するとしても、やはり漢語の実用性が高く、就職しやすいからである。これは下層自営業者や労働者に多く聞かれる理由である。

＊「モンゴル語で勉強しても意味がない。実際の使い道が非常に狭い。漢語で勉強したら、高卒でも漢語能力を生かして就職できる。だから娘を漢語学校に通わせた」（労働者）

第二に、子どもが都市環境の中で生まれ育ち、漢語に慣れてきたため、モンゴル語学校では授業についていけないという心配もある。都市部では、家庭内では親の話すモンゴル語を聞く機会があっても、一歩外に出れば、遊び友達とは漢語で話し、幼稚園でもすべて漢語を使う。子どもたちにとって、漢語はますますなじみのあることばになっていく。実際、こうした理由から、子どもを最初はモンゴル語学校に通わせたが、途中から漢語学校に変えたケースも見られる。

³ 近年、各地のモンゴル族高校では、能力別学級編成制度を導入し、「実験班」という特別学級を設置し始めた。「実験班」の卒業生は、大学入試の際、漢語で教育を受けた生徒と同様、全国の大学に出願する資格が与えられている。もし点数が低かったら、モンゴル語学校卒業生の枠に戻って出願することもできる。しかし、漢族学校との学力の差があるため、実際この制度に恵まれる人は、大学入試の点数が極めて高い一部の生徒に限る。

＊「当時、家がモンゴル族小学校のすぐ近くだったので、通学に便利と思ってモンゴル族小学校に通わせた。うちの子はモンゴル語が多少できていたので、はじめは特に困ることがなかった。しかし授業の内容がだんだん高度になっていくと、徐々についていけなくなった。特に小学校4年になってから、授業で使うモンゴル語の意味がさっぱりわからなくなった。これ以上、モンゴル語で勉強させたら、彼の将来の進学も問題になると思って、漢語学校に転校させた。学年を1年下げたので、特に大きな苦勞をせずについていった。今も漢語学校に通っている」（下宿屋自営）

「子どもが小さいころ、私たち夫婦は2人とも仕事を始めてから、数年しかたっていなかった。そこで、経済的にかなり苦しかった。大学の住宅団地で家を買うのが無理なので、学校から離れたところで、平屋を買って暮らしていた。私たちは仕事が忙しく、しかも子どもの世話をしてくれる人もいなかったもので、幼稚園に預けるしかなかった。モンゴル族幼稚園に行かせる考えもあったけれど、家から遠いから、近くの漢語の幼稚園に行かせることにした。それで小学校に入るとき、彼はモンゴル語がほとんどわからない状態だったから、漢語学校に通わせた」（大学教師）

第三に、子どもの遊び友達がみな漢語学校に通うのをみて、子どもが同じ学校に通いたがったという理由もある。

＊「家族内では、最初は意見の違いもあった。私はモンゴル族学校、妻は漢語学校に子どもを行かせたいという対立だった。二人の意見は最後まで一致しなかった。それで結局、子ども自身に任せることにしたが、彼は遊び友達と離れたくなかったので、漢語学校を選択した」（大学教師）

「モンゴル語学校に行かせようとは考えなかった。周りの人たちはみんな子どもを漢語学校に行かせているから、私たちも彼女を漢語学校に通わせた」（幼稚園経営者）

一方、子どもをモンゴル語学校に通わせた2世帯には、「モンゴル人である以上、民族のことはきちんと勉強しないとイケない」という理由のほかに、モンゴル語で教育を受けることは子どもの将来の進学・就職にとって有利になる可能性もあるという理由をあげている。実際、モンゴル語で大学入試を受けると、合格ラインが漢語より低く、大学に進学しやすいというメリットがある。もとよりこうしたメリットを活用できる進学先は、内

モンゴル自治区内を中心とする30数大学に限られている。しかし、最初からそうした大学への進学を想定すれば、モンゴル語で受験の方が有利になる可能性が高いのである。子どもを漢語学校に通わせた人の中にも一部では、この点を明確に意識し、漢語学校を選択したことを後悔するケースも見られる。

＊「都市の子どもはいい環境に恵まれているので、勉強さえできればモンゴル語と漢語の両方をうまくマスターできる。モンゴル語学校に通っても、進路は狭いとは限らない。だから娘をモンゴル語学校に通わせた」（大学教師）

「漢語学校でぎくしゃくするより、モンゴル語で勉強するほうが、将来、大学に進学しやすいと思って、モンゴル語学校を選んだ」（料理人）

「娘を漢語学校に通わせたが、今になって少し後悔している。漢語学校では競争が激しい。よほどいい成績でなければ、子どもの進学が問題になる。モンゴル語ではそんなに苦労しなくても、多分大学に入れる。都会の子は、漢語は自然にマスターできるから、かえってモンゴル語学校を卒業するほうが、将来うまくやっていけるかもしれない」（下宿屋自営）

さて、都市在住のモンゴル人の子どもは、漢語中心の環境で育つが、モンゴル語と完全に接触しないわけではない。家庭内では、親がモンゴル語でコミュニケーションをとることが多く、そのため子どもたちも少なくともある程度の聞き取りができるケースが多い。一部の世帯では、子どものモンゴル語は堪能だという評価も聞かれる。

これには、主に2つの理由がある。

1つは、親戚の影響である。農耕・牧畜地域の親戚（祖母など）に子どもの面倒を見てもらった経験があるため、子どもが親戚とのコミュニケーションの中でモンゴル語を身につけたケースがある。

＊「子どもの小さいころ、田舎の母が面倒を見てくれた。お婆ちゃんは漢語ができないので、孫にいつもモンゴル語で話しかける。そのおかげでモンゴル語が話せるようになった」（大学教師）

いま1つは、親の影響である。この中にも、親が漢語に堪能ではないためにモンゴル語

を教えたケースと、親は漢語が堪能であるが、意識的にモンゴル語を教えたケースがある。前者は労働者・下層自営業の世帯に見られ、親が子どもにモンゴル語でしか話しかけることができないので、子どももモンゴル語をある程度使えるようになった。後者は専門的・管理的職業や上層自営業の世帯に見られ、親は子どもに意識的にモンゴル語を教え、モンゴル語を身につけさせようとしている。

＊「息子はモンゴル語でよくしゃべれる。彼は子どものころ遊び友達とずっと漢語で話していたが、うちでは「モンゴル語でしゃべるとお小遣いをやる。モンゴル語でしゃべらないとやらない」と、彼を意識的にモンゴル語で話せるように工夫した。それは多少の効果があったと思う」（雑誌編集者）

家庭内の教育投資は、経済的にゆとりのある上層世帯と、貧しい下層世帯の間で、ある程度の差がある。ここでは、調査の前年である 2006 年のホルチン区在職職員の平均年給 14,247 元を一応の参考にして、夫婦の平均年収 1 万 5 千元を基準として上層世帯と下層世帯と分けることにする⁴。

上層世帯の親たちは、子どもを音楽、踊り、絵画などの教室にも通わせ、広範な趣味を身につけさせようとしている。そこには馬頭琴など、モンゴル族の伝統文化の習得も含まれる。子どもを旅行に連れて行くことも多い。旅行先は北京、上海、南京、大連などの沿海部大都市が多いが、ときには草原地域での遊牧生活の体験もみられる。

＊「息子は今、馬頭琴教室に通っている。勉強だけではなく、広範な趣味を身につけてほしい。夏休みは毎年家族で出かけている。北京、大連、瀋陽、長春などの大都市に連れて行ったことがある。草原地帯に旅行に行ったこともある。将来海外の大学で理工系の専門を学んでほしい」（教師）

これに対し、下層世帯は、子どもを音楽、踊りなどの教室に通わせることもあるが、その動機は上述の上層とは明らかに異なる。すなわち音楽、踊りなどは趣味・教養としてではなく、むしろ将来的にそれによって生計を立てる腕・手段として習わせている。つまり、「子どもの成績がよくないので、合格ラインが低い芸術系の大学を受験させたい」という

⁴ 内蒙古自治区統計局編（2007）652 頁。

ことである。下層は、子どもを旅行に連れて行くこともほとんどない。

＊「息子に将来、大都市に住んでほしい。成績が普通なので、今、馬頭琴教室に通わせている。芸術類の専門は、入試の合格ラインが低いので、将来、大学で音楽の専攻を勉強してほしい」（労働者）

子どもの将来については、上層・下層を問わず、「仕事のことはまだ考えていない」、「自分に任せる」と語るケースが多い。学歴はほとんど大学以上を希望している。ただし、上層世帯は、子どもの大学進学後の学費・生活費の支出について心配していない。これに対し、下層の家庭は、「今の経済状況で大学に行かせるのは、とても無理」と心配しており、一部の人は「そのときには、借金せざるを得なくなる」とも語る。

また、子どもの将来の居住地については、上層・下層を問わず、「内モンゴル以外」、「沿海部」、「大都市」、「海外」と語る人がほとんどである。それは「内モンゴルは遅れている」、「外では発展のチャンスが多い」からである。

第2節 農耕地域

では次に、農耕地域についてみる。

都市への交通アクセスがよい Ma 村には、モンゴル語で教育を行う中学校と小学校がそれぞれ一ヶ所ある。文化大革命の終結以降、1990 年代半ばまで、モンゴル族の子どもはほぼ全員、地元の学校に通っていた。しかし、1990 年代末から、近隣の L 国営林場の学校が漢語学級として Ma 村の学校に合併された後、Ma 村のモンゴル族の中でも、子どもを漢語学級に通わせる世帯も現れ始めた。さらに近年、都市部の小中学校が農村戸籍の生徒にも入学を認めるようになった。これに伴い、Ma 村の一部の家族は子どもを都市部に下宿させ、都市部のモンゴル語学校や漢語学校に通わせている。調査時点では、小中学生・高校生をもつ世帯は、都市戸籍 13 戸、農村戸籍 19 戸である。そのうち、それぞれ 5 世帯、2 世帯が子どもを漢語の学級・学校に通わせていた。

調査対象者たちの中には、子どもを都市部の学校に通わせている人は少なくない（表 3-2）。彼・彼女らの一部は、子どもが小学校に入学する時点からすでに都市部の学校に

通わせた。その場合、都市部在住の親戚の家に下宿させている。都市部に親戚がいない場合は、地元で小学校に通い、中学校の段階から都市部の学校に送り出している。

Ma 村の都市的職業従事者 12 人のうち、11 人が少なくとも子どもの一人を義務教育の段階で都市部に下宿させ、小中学校に通わせている。現在、唯一地元の学校に通わせているのはケース Ma12 である。しかし、彼女も「子どもがまだ小学生だから自立できない。中学校は都会の学校に行かせるつもりだ」と語っている。都市部の学校に通わせるのは、そのほうが「教育の質がよい」からである。

これに対し、Ma 村の農民たちの多くは、子どもを都市の学校に行かせていない。都市の学校に子どもを通わせている農民は、経済的に余裕があり、子どもに対する教育期待も特に明確な一部の人々に限られている。

教授言語別に見ると、都市的職業従事者のうち、5 人が子どもを漢語学校に通わせている。それは、「自分自身、漢語が下手で苦勞したから、子どもには同じ苦勞をさせたくない」、「漢語で勉強すれば、将来、就職のチャンスが多い」からである。これに対し 6 世帯は、子どもをモンゴル語の学校に通わせた⁵。モンゴル語学校を選択した理由は、「民族の言語と文化を学び、民族に誇りをもつことが大事」といった民族意識に根ざす要素もあるが、彼・彼女らがモンゴル語学校を選択した理由は、それだけではない。漢語学校での激しい競争——しかも言語面では漢族に対してハンディを抱えた競争——を回避し、子どもに良好な学業成績を達成させ、より有利な進学・就職につなげようとする動機も、みとれる。彼・彼女らがあえて「教育の質のよい」都市の学校に子どもを行かせる理由も、その点にある。また、子どもの通っている学年から見ると、中学校の子どもはほとんどモンゴル語学校に通っている⁶のに対し、小学校に通う 4 人の子どものうち 3 人が漢語学校に通っている（表 3-2）。都市的職業従事者における言語選択は、モンゴル語から漢語へとシフトしつつあることが伺える。

* 「子どもたちをモンゴル語の学校に通わせた。モンゴル族の一員として、モンゴル語

⁵ ケース Ma7 は長男をモンゴル語学校、次男を漢語学校に通わせた。長男のときに、あまり深く考えず、モンゴル語学校にしたが、次男のときはやはり漢語の方は進学の道が広いと考え、漢語学校を選択した。ただし「モンゴル語学校なら競争が激しくない。将来大学に進学しやすい。だから長男をモンゴル語学校に通わせたことを後悔しない」とも語る。

⁶ 唯一例外なのはケース Ma10 である。彼女の夫は L 林場出身のモンゴル族である。彼女は結婚後 L 林場に住んでいたため、子どもたちも L 林場の漢語学校に通っていた。Ma 村に引越ししてきたのは 2 年前のことである。

を忘れてはいけない。漢語学校に通って民族語を忘れていくより絶対いい」 (Ma 村、教師)

「漢語学校に通わせると、進学などで選択肢は広がるが、しかし漢人との競争に生き残れるかどうか心配だ。モンゴル語学校に行けば、普通にやっていっても大学に進学しやすい」 (Ma 村、教師)

「今の時代、モンゴル語の実用性は漢語に比べてはるかに低い。そして私たちも漢語で苦労したことがあるから子どもに同じような苦労をさせたくない。だから漢語学校を選択した」 (Ma 村、公務員)

Ma 村の農民の場合、多くの世帯が子どもをモンゴル語学校に通わせている。それは、「モンゴル人の子どもだから、モンゴル語で勉強するのが当たり前」だからである。しかしごく一部だが、「モンゴル語では、何もできない。外の世界に出ると、漢語が苦手だと苦労するばかりだ」という理由で、漢語学校に通わせる世帯もいる。

＊「モンゴル人の子どもだから、モンゴル語で勉強するのが当たり前だと思う」 (Ma 村、農民)

「モンゴル語で勉強したほうがいい。漢語なら、私たちは子どもの勉強の手伝いもできない」 (Ma 村、農民)

「地元ではあまり困らないが、外に出て仕事を見つけないなら、漢語ができないと困る。私は機会修理の仕事に興味があるので、都会に行ってそれをやりたかった。でも漢語があまりできないから、都会では生活するのは難しい。だから娘を漢語学校に通わせた」 (Ma 村、農民)

ただしまた彼・彼女らは、都市戸籍世帯のような、戦略的な選択は必ずしもしていない。漢語学校に通わせるのは、漢語の専門性とかかわりが多いからという理由ではなく、ただ一般的に漢語の方が広く使われているからである。モンゴル語学校を選択するのも、それは都市戸籍の世帯のような競争回避を通した教育達成の目的からではなく、きわめて即自的に「モンゴル人だからモンゴル語」と考えているのである。

Ma 村では、都市戸籍・農村戸籍を問わず、子どもたちの大半は、家庭ではモンゴル語を使用している。ただし都市戸籍世帯の場合、子どもは親に対して、「モンゴル語が多い

が、たまに漢語で話してくるときもある」。

さて次に、都市部からの交通アクセスが悪い Nb 村である。

Nb 村では、以前、小学校と中学校が村にあったが、現在、小学校はN鎮の中心村、中学校はホルチン左翼後旗内のY鎮へと移転された。調査時点では、小中学生・高校生をもつ世帯は約 100 戸ある。そのうち、2 世帯だけが子どもを漢語学校に通わせている。それ以外はすべてモンゴル語学校である。

調査対象者の一部は、ホルチン区の都市部と旗の中心地であるガンジグ鎮に子どもを下宿させ、学校に通わせている（表 3-3）。ただしその場合も、ほとんどがモンゴル語学校である。そこには、「モンゴル人だから、やはりモンゴル語で勉強したほうがいい」という理由がある一方、「将来大学に進学しやすい」という理由も聞かれる。家庭内での子どもとの会話は、いずれの世帯でもモンゴル語で行われている。

＊「モンゴル人だから、子どもたちをモンゴル語学校に通わせた。漢語学校で勉強させようとは思わなかった。娘は小学校からずっといい成績をとってきた。中学校は通遼の学校に行かせたかったけれど、家の生活が非常に苦しくて、費用が負担できないから、しょうがなく地元の学校に通わせた。娘は今年、大学入試を受ける予定だ。受かるのは、ほぼ確実だと思う。私たちはどんなに借金しても、大学を卒業させたい。もし大学から奨学金がもらえたら、それは私たちにとって一番いいことだ」（Nb 村、農民）

「モンゴル人だからモンゴル語で勉強するほうがいい。漢語学校に通っても、私たちは子どもの勉強の手伝いができない。モンゴル語のほうが、将来、点数が低くても、大学に進学しやすい。だから、娘を通遼のモンゴル語学校に通わせた。費用は確かにN鎮の小学校より高いけれど、教育の質がいいし、距離的にもN鎮（中心村）より近いから、通遼の学校にした。将来、大学まで行ってほしいが、どこまでいけるかは子どもの努力次第だ」（Nb 村、農民）

調査対象者のうち、唯一漢語学校に子どもを通わせているのは、大学を卒業して農民になったケース Nb11 の世帯である（表 3-3）。漢語学校に通わせるため、彼・彼女らは子どもを旗の中心地ガンジグ鎮まで送り出している。Nb11 はこう語る。「私は漢語がよくできないから、いい仕事が見つからなかった。これから漢語がますます重要になってくる

から、子どもの将来を考えると、やはり漢語学校に行かせたほうがいいと思った。父には強く反対されたが、最終的には父を説得できて、漢語学校に決めた」。

さて、本研究において、Ma 村での調査は 2006 年、Nb 村での調査は 2009 年に実施したが、その間、内モンゴル自治区が「集中弁学」政策を打ち出したため、学校教育をめぐる事情は少し変わってきた。「集中弁学」とは、すなわち農耕・牧畜地域では、従来の行政村（ガチャー）に小学校を 1 校、鎮（ソム）に中学校を 1 校設置する体制を改め、鎮（ソム）に小学校 1 校、県（旗）に中学校 1 校または複数の鎮（ソム）の間に中学校 1 校を設置することとする内容の教育改革政策である。この政策の実施により、農耕・牧畜地域の多くの小中学校が合併され、多くの子どもは親元を離れ、下宿生活をするようになった。Ma ソムでは、中学校がホルチン区の都市部に移転した。Nb 村でも「集中弁学」政策の実施により、小学校はN鎮の中心村、中学校はホルチン左翼後旗内のY鎮へと移転した。当初、Ma 村の多くの保護者は、子どもの都市での生活により、家庭の経済的負担が大きくなるという理由で、「集中弁学」に反対した。しかし後に、政府から「両免一補」⁷政策が出され、家庭の経済負担がある程度緩和された。そのため、Ma 村では中学校段階での中途退学も起こらなかったそうである。Nb 村でも、今のところは小中学校段階での経済的負担は少ないと感じられている。

子どもの将来について、Ma 村の都市的職業従事者たちは大学・大学院まで行き、国内大都市・海外などで暮らしてほしいと語っている。しかし、彼・彼女らは都市の上層世帯とは異なり、音楽、踊り、絵画などの教室には子どもをほとんど行かせていない。彼・彼女らにとっては、子どもが都市部の恵まれた学校で教育を受け、「まじめに勉強する」ことだけが、現実的で切実な願望になっている。農民たちは、Ma 村・Nb 村を問わず、子どもにはとにかく農村を離れ、都市で生活するように希望している。ただし、都市戸籍を含む多くの世帯は、子どもの進学に伴い、経済的負担がますます増えていくと感じている。特に大学段階での経済的負担が多いことは、多くの家庭を悩ませている。さらに現在、大卒でも就職できない社会情勢を目前にして、一部の人は子どもを「たくさんのお金を投入して、大学まで行かせるのは果たして意味があるか」と疑問視しはじめている。

* 「音楽、絵画などの教室に通わせたことがない。今の段階では、とにかくまじめに勉

⁷ 「両免」とは「雑費」（学費以外の諸費用）の免除と教科書代の免除のことであり、「一補」とは寄宿学生への生活補助のことである。

強して、将来、いい大学に入ることだけが目標だ」(Ma 村、公務員)

「経済的に苦しいから、子どもに学校を辞めさせるように話しかけたこともある。でも今の子どもはみんな大学に入らないと気がすまないなので、絶対退学したがない。子どものその姿をみて、私たちはかわいそうに思う。だから、そう簡単にやめさせることができない」(Nb 村、農民)

「最近、就職できずに村に帰ってきた大学生がいる。それを見て、親がたくさんのお金を投入して、子どもを大学まで行かせるのは果たして意味があったのかと思った。金持ちの子どもなら別にいいけど、私たち貧しい農民にとっては、子どもが大学まで出て就職できないのは大きなショックだ。自分の子どもはまだ小学生だけれど、将来のことも考えないといけない。どうすべきか、よくわからない」(Nb 村、農民)

第3節 牧畜地域

最後に牧畜地域について分析する。

牧畜地域の中心街である Ba 村には、モンゴル語の小中一貫校が一ヶ所あり、その募集地域は Bb 村と Bc 村をも含む。調査時点で、小中学生・高校生をもつ世帯は約 50 戸あった。そのうち、6 世帯は子どもを漢語学校に通わせている。地元には漢語の学校がないため、彼・彼女らは子どもをジャロド旗の中心地魯北鎮、ホルチン区の都市部およびジャロド旗隣接のホーリン・ゴル市まで送り出している。

Ba 村の調査対象者の多く(8 世帯)は、子どもをモンゴル語学校に通わせている(表 3-4)。その理由は、「民族のことだから」、「漢語で教育を受けたらモンゴル語を忘れるから」である。これに対し、3 世帯は漢語学校を選択した。そこでは、「漢語の実用性が高い」、「大学では漢語で授業を行うから、モンゴル語で教育を受けると苦勞する」などの理由が挙げられている。都市戸籍世帯の半数以上は、子どもを小中学校の段階でホルチン区や魯北鎮の学校に通わせている。

＊「モンゴル語と漢語の選択について様々な議論がある。それぞれの理由があると思うが、私はやはり漢語の学校には行かせたくない。モンゴル語学校では漢語も勉強できるが、漢語学校に行くとモンゴル語を忘れてしまう。だからモンゴル語学校を選

択した」(Ba 村、公務員)

「息子を小学校から魯北鎮の漢語学校に通わせた。あそこに親戚がいるので、親戚の家に下宿させた。漢語の実用性が高いから、漢語学校にした。もちろん深く考えて選択したわけではない。もし魯北に親戚がいなかったら、地元でモンゴル語学校に通わせたかもしれない」(Ba 村、小売業者)

「息子を漢語学校に通わせた。モンゴル語で教育を受けても、結局、大学の授業で漢語に切り替えることになるから、そのときにまた困る。もちろん大学でモンゴル語が通用したら、喜んで子どもをモンゴル語学校に行かせるが、現実是这样ではないので、私たちもしょうがなく漢語学校に行かせた。最初、私の父は反対していた。彼は『モンゴル人の子どもなのに、なぜモンゴル語で勉強させないか?』と主張し、自分の孫を漢語学校に通わせたがらなかった。それで私は自分の苦労した経験と今の社会の情勢を話して、父を納得させた。息子は今、ホルチン区の中学校に通っている」(Ba 村、教師)

Bb 村では、調査時点で、小中学生・高校生をもつ世帯は 9 戸あった。全世帯が、子どもをモンゴル語学校に通わせている。Bc 村では、調査時点で、小中学生・高校生をもつ世帯は 21 戸あった。うち 2 世帯だけが、子どもを漢語学校に通わせている(調査対象者たちの世帯については、表 3-5、3-6 を参照)。

調査対象者たちがモンゴル語学校を選択した理由は、やはり「モンゴル人であるからモンゴル語のほうがいい」、「漢語の学校に通っても、私たちは勉強の手伝いができない」ことであった。彼・彼女らのうち、経済的に豊かな世帯は、子どもを中学校から魯北鎮の学校に通わせている。

ただし Bc 村では、次のように漢語学校に子どもを通わせるケースも見られる。

＊「漢語ができないと、困ることが多い。たとえば非常に簡単なことだが、薬の説明書を読むのも無理だ。漢人とのコミュニケーションも、うまくできない。私は中学校のときに魯北鎮の学校に通った。魯北では、私たちの田舎と違って、漢人が多くて、漢語を使うことがよくある。モンゴル人の中でも、漢語を使う人が増えてきた。これから子どもたちは外の世界に行くから、漢語がもっと重要になる。だから息子が 5 歳の時に魯北の親戚のうちに下宿させて、漢人の幼稚園に通わせた。今、漢語の

小学校に通っている。最初、妻は反対したが、私のいうことを聞いて、モンゴル語学校に通わせなかった」(Bc 村、牧畜民)

ただし、B 鎮のすべての世帯では、子どもはモンゴル語を流暢に話せる。漢語学校に通う子どもも、家庭や地域の言語環境に強く影響されているのである。

子どもの将来については、都市戸籍の世帯は大学・大学院まで行き、一部の人は留学させたいと話している。また内モンゴルを離れ、大中都市・沿海部へ行くことを望んでいる。彼・彼女らもまた Ma 村の都市的職業従事者と同様に、子どもには「まじめに勉強してほしい」と語る。牧畜民はすべて、子どもが大学に入ることを望んでいるが、一部は「学力の状況を見る」、「最後は自分に任せる」と語っている。また子どもたちが将来、「都会で生活する」、「遠いところに行く」ことを強く望んでいる。また農耕地域と同じく、経済問題や子どもの将来の就職問題について心配している人は少なくない。

- * 「子どもには将来、大学に入ってほしい。でもそれより上に行くかどうかは、彼自身に任せる。就職も彼の能力による。できれば大都市に残ってほしい」(Ba 村、教師)
- 「今、大卒で就職できない若者がたくさんいる。この村にも何人かいる。その中の 1 人は今、鬱病になったと聞いた。都会では就職できないし、田舎では肉体労働もできない。ずっと学校にいたから、放牧のノウハウもよくわからない。結局、何もできなくて、家に引きこもってしまっているようだ。鬱病にならなくても、どこかがきっとおかしくなってしまうだろう」(Ba 村、労働者)
- 「将来、大学に入れたらいいと思うが、どこまで行かせるかは、うちの経済状況と子どもの学力の状況を見てから判断する」(Bb 村、牧畜民)

第 4 節 小括

以上、学校言語の選択をはじめ、調査対象者たちの子どもの学校教育をめぐる諸問題について分析してきた。ごく簡単に総括しよう。

ホルチン区都市在住モンゴル族は、すべてが子どもを都市部の学校に通わせている。教授言語別にみると、多くが漢語学校に通わせている。ただし一部には、モンゴル語学校に

通わせているケースもある。多数派である漢語学校に通わせる理由は、①子どもの進学・就職にとって、漢語のほうが有利、②子どもが都市環境の中で生まれ育ち、漢語に慣れてきたため、モンゴル語学校では授業についていけないという心配がある、③子どもの遊び友達がみな漢語学校に通うのをみて、子どもが同じ学校に通いたがったなどである。家庭内の教育投資は、経済的にゆとりのある上層世帯と、貧しい下層世帯の間に、ある程度の差がみられた。

これに対し、都市部との交通アクセスがよい農耕地域の Ma 村では、都市的職業従事者は、少なくとも 1 人をホルチン区都市部の学校に子どもを通わせている。それには、自分または配偶者が漢語の壁で大きく苦勞した経験があり、子どもに苦勞させたくないという理由があった。Ma 村の農民の多く、および都市部との交通アクセスが悪い Nb 村の農民は、「モンゴル人だから、子どもをモンゴル語で教育を受けさせるのは当たり前」とか、あるいは「漢語学校に通っても、子どもの勉強の手伝いができない」という理由で、子どもをモンゴル語学校に通わせていた。ただしこうした農民の中でも、一部には、大学卒業や都市的職業への就職を念頭において、漢語の実用性を認識し、子どもを漢語学校に通わせるケースも見られる。

最後に牧畜地域 B 鎮の 3 つの村では、多くはモンゴル語学校に子どもを通わせている。ただし、都市的職業従事者の一部は、漢語で苦勞したから、子供に苦勞させたくないという理由で、子どもを漢語学校に通わせている。牧畜民の多くは、子どもをモンゴル語学校に通わせている。

また、モンゴル語学校を選択する都市在住者、農耕地域・牧畜地域の都市的職業従事者、および少数の農民においては、モンゴル語で教育を受けることが、単に「モンゴル人だから」という即自的な理由だけでなく、その方が大学進学競争が激しくないという意識的な判断もまた、モンゴル語学校を選択する大きな一つの理由となっている。

そして農耕地域・牧畜地域では、経済的に余裕さえあれば、子どもをホルチン区の都市部や、それぞれの旗の中心地の学校に子どもを送り出している。ただしそうした経済的なゆとりのある階層は、都市的職業従事者や上層の農民に限られている。大半の農民・牧畜民には、そうした経済的ゆとりはない。

第 3 章の図表

表 3-1 ホルチン区都市部世帯の子どもの教育

NO.	子ども	年齢	学校	言語教育の類型
T1	長男	7	小学校 1 年	漢語
T2	長女	10	小学校 5 年	漢語
T3	長女	12	中学校 1 年	漢語
T4	長女	15	高校 1 年	漢語
T5	長男	16	高校 2 年	漢語
T6	長女	14	中学校 3 年	純モンゴル語
T7	長男	14	中学校 2 年	漢語
T8	長男	18	高校 3 年	漢語
T9	長男	14	中学校 3 年	漢語
T10	長女	18	高校 3 年	漢語
T11	長女	18	高校 3 年	漢語
	長男	11	小学校 4 年	漢語
T12	長男	16	中学校 3 年	漢語
T13	長男	17	高校 2 年	漢語
T14	長女	12	小学校 6 年	漢語
T15	長女	14	中学校 3 年	漢語
T16	長男	16	高校 2 年	漢語
T17	長女	14	中学校 2 年	漢語
T18	長男	13	中学校 1 年	純モンゴル語
T19	長女	18	高校 3 年	漢語
T20	長女	10	小学校 4 年	漢語
T21	長女	14	中学校 2 年	漢語
T22	長女	11	小学校 5 年	漢語
T23	長女	14	中学校 3 年	漢語
T24	長男	9	小学校 3 年	漢語
T25	長女	9	小学校 3 年	漢語

実態調査より作成。

表 3-2 Ma 村の各世帯の子どもの教育

NO.	子ども	年齢	学年	言語教育の類型	都市
Ma1	長女	16	高 校 2 年	純モンゴル語	○
	長男	16	高 校 2 年	純モンゴル語	○
Ma2	長男	12	中学校 1 年	純モンゴル語	○
Ma3	長男	13	中学校 3 年	純モンゴル語	○
Ma4	長女	19	高 校 3 年	純モンゴル語	
	次女	15	中学校 3 年	純モンゴル語	○
Ma5	長男	14	中学校 2 年	純モンゴル語	○
Ma6	長男	20	中専*3 年	純モンゴル語	
	長女	16	高 校 1 年	純モンゴル語	○
Ma7	長男	16	高 校 1 年	純モンゴル語	
	次男	13	中学校 2 年	漢語	○
Ma8	長女	9	小学校 2 年	漢語	○
Ma9	長男	7	小学校 1 年	漢語	○
Ma10	長女	18	大 学 1 年	漢語	
	長男	15	高 校 1 年	漢語	○
Ma11	長女	7	小学校 2 年	漢語	○
Ma12	長男	8	小学校 2 年	純モンゴル語	
Ma13	長男	17	高 校 2 年	純モンゴル語	
	長女	10	小学校 3 年	純モンゴル語	
Ma14	長男	17	高 校 3 年	純モンゴル語	
	長女	14	中学校 2 年	純モンゴル語	
Ma15	長女	14	中学校 3 年	純モンゴル語	○
Ma16	長男	19	大 学 1 年	純モンゴル語	
	次男	15	中学校 2 年	純モンゴル語	
Ma17	長女	17	高 校 3 年	純モンゴル語	
Ma18	長女	10	小学校 3 年	漢語	
Ma19	長女	16	高 校 2 年	純モンゴル語	○
	次女	11	小学校 4 年	純モンゴル語	
	三女	7	小学校 1 年	純モンゴル語	
Ma20	長女	17	高 校 2 年	純モンゴル語	○
	長男	14	中学校 3 年	純モンゴル語	○
Ma21	長女	13	中学校 2 年	漢語	○
	次女	5	—	—	
Ma22	長男	18	出稼ぎ（中卒）	純モンゴル語	
	次男	15	高 校 1 年	純モンゴル語	

都市：義務教育の段階に、ホルチン区都市部の学校に通わせた場合は「○」。実態調査より作成。

表 3-3 Nb 村の各世帯の子どもの教育

NO.	子ども	年齢	学校	言語教育の類型	都市・旗
Nb1	長女	14	小学校 6 年	純モンゴル語	
Nb2	長女	19	高校 3 年	純モンゴル語	
	長男	16	中学校 3 年生	純モンゴル語	
Nb3	長女	13	小学校 5 年	純モンゴル語	
Nb4	長女	9	小学校 1 年	純モンゴル語	○
	長男	5	—		
Nb5	長女	11	小学校 4 年	純モンゴル語	
Nb6	長女	12	小学校 4 年	純モンゴル語	
	次女	8	—		
	長男	4	—		
Nb7	長女	21	大学 2 年	純モンゴル語	
	長男	15	中学校 2 年	純モンゴル語	
Nb8	長男	21	大学 1 年	純モンゴル語	
	長女	19	高校 2 年	純モンゴル語	○
Nb9	長男	10	小学校 2 年	純モンゴル語	
Nb10	長女	9	小学校 1 年	純モンゴル語	
	次女	2	—		
Nb11	長男	8	小学校 1 年	漢語	○

都市・旗：義務教育の段階に、ホルチン区都市部とガンジグ鎮の学校に通わせた場合は「○」。実態調査より作成。

表 3-4 Ba 村の各世帯の子どもの教育

NO.	子ども	年齢	学校	言語教育の類型	都市・旗
Ba1	長女	23	大学 2 年	純モンゴル語	○
	長男	19	高校 3 年	純モンゴル語	○
Ba2	長男	19	高校 2 年	純モンゴル語	○
Ba3	長男	18	高校 3 年	純モンゴル語	
Ba4	長男	18	高校 2 年	漢語	○
Ba5	長女	14	中学校 1 年	純モンゴル語	○
	次女	8	—		
Ba6	長女	15	中学校 2 年	純モンゴル語	
Ba7	長女	15	中学校 1 年	漢語	○
Ba8	長男	15	中学校 1 年	漢語	○
Ba9	長女	20	大学 1 年	純モンゴル語	
	長男	18	高校 3 年	純モンゴル語	
Ba10	長男	16	高校 1 年	純モンゴル語	
Ba11	長男	14	中学校 1 年	純モンゴル語	

都市・旗：義務教育の段階に、ホルチン区都市部と魯北鎮の学校に通わせた場合は「○」。実態調査より作成。

表 3-5 Bb 村の各世帯の子どもの教育

NO.	子ども	年齢	学校	言語教育の種類	都市・旗
Bb1	長男	10	小学校 3 年	純モンゴル語	
Bb2	長男	13	小学校 3 年	純モンゴル語	
	次男	8	小学校 1 年	純モンゴル語	
Bb3	長男	18	高校 2 年	純モンゴル語	○
	次男	14	中学校 2 年	純モンゴル語	
Bb4	長女	13	中学校 2 年	純モンゴル語	
Bb5	長男	17	(中学校卒業後退学)	純モンゴル語	
	長女	13	中学校 2 年	純モンゴル語	
Bb6	長男	19	(小学校卒業後退学)		
	次男	16	中学校 1 年	純モンゴル語	

都市・旗：義務教育の段階に、ホルチン区都市部と魯北鎮の学校に通わせた場合は「○」。

実態調査より作成。

表 3-6 Bc 村の各世帯の子どもの教育

NO.	子ども	年齢	学校	言語教育の種類	都市・旗
Bc1	長男	10	小学校 3 年	純モンゴル語	
Bc 2	長男	15	中学校 2 年	純モンゴル語	○
	長女	11	小学校 3 年	純モンゴル語	
Bc 3	長男	8	小学校 1 年	純モンゴル語	
Bc 4	長女	19	高校 2 年	純モンゴル語	○
	長男	15	中学校 2 年	純モンゴル語	
Bc 5	長男	11	小学校 4 年	漢語	○

都市・旗：義務教育の段階に、ホルチン区都市部と魯北鎮の学校に通わせた場合は「○」。

実態調査より作成。

第4章 社会意識

本章では、調査対象者たちの社会意識、具体的には経済格差、言語、文化習慣、歴史、宗教、地域についての見方・意見などを中心に分析する。社会意識は、それぞれの地域・職業階層の固有の生活様式のみならず、他の地域・職業階層との比較や関連付けの認識によって、はじめて自覚・形成される。また地域・職業階層の違いを超えた民族的な社会意識も、つねに新たな社会的文脈のなかで形成・構築されていく。そこで本章では、これまでの各章とは異なり、居住地（都市・農耕地域・牧畜地域）や職業（都市的職業・農耕・牧畜）別ではなく、それらを横断する形で分析を進めたい。

第1節 経済格差に関する社会意識

調査対象者たちの社会意識において、まず何よりも特徴的なことは、現在の中国社会に様々な格差構造とその重層的拡大を認識し、その中で自らや子どもたちの生活・言語・教育を位置づけている点にある。

彼・彼女らが認識している格差は、次の4種類に分類できる。すなわち、①大都市・沿海部と内陸部のマクロな地域間格差、②都市と農村の地域間格差、③漢族とモンゴル族の民族間格差、および、④同じ地域内の階層の格差である。

第1項 大都市・沿海部と内陸部の格差

まず、沿海部と内陸部のマクロな地域間格差は、主に都市部の専門的・管理的職業従事者、上層自営業者、および農耕・牧畜地域の一部の都市的職業従事者によって、強く認識され、言及されている。彼・彼女らはこうした格差の存在の認識を通じて、自分たちが暮らしている内陸部の内モンゴルを「経済的に遅れ」ており、それゆえ「収入が低い」と感じている。また「経済的に遅れている」ことは、教育の質にも影響し、地元の学校は「受験教育ばかり」やっていると批判している。そして彼・彼女らは、子どもには将来、大都市・沿海地域、さらに「外国」で就職し、生活してほしいという願望を、特に強くもっているのである。

＊「仕事の関係で、北京、山東、江蘇、広東などの地域を見学に行ったことがある。沿海部の生活水準は、ここよりはるかに高いことを実感した。特に農村では、郷鎮企業が急速に発展している。私たちのところでは、産業といえるものは何もない。沿海部の農村より、少なくとも 30 年も遅れていると思う」(Ma 村、公務員)

「内モンゴルは、経済的に沿海部どころか、東北 3 省よりもはるかに遅れている。その影響はさまざまなところで現れている。たとえば、私たちが今もらっている給料やボーナスは、北京や長春などの大学のそれとかなりの差がある。教育もそうだ。私は在職大学院生として、長春のある大学に通ったことがある。当時、息子を長春の中学校に一時編入させていた。長春の学校は、受験勉強などで子どもたちにあまり圧力をかけない。本当の意味での「素質教育」をしていたと思う。でも後に通遼に戻ってきたら、状況は大きく変わった。通遼の学校では、進学率アップのために受験教育ばかりして、子どもに遊びの時間もあまり与えてくれない。子どものプレッシャーは非常に大きい」(ホルチン区都市部、教師)

一方、労働者や農民・牧畜民などは、大都市・沿海部と内陸部の格差にたいする意識は比較的、希薄である。彼・彼女らの視野は、そういった遠隔地にまで及んでいない。

第 2 項 都市・農村の格差

次に都市・農村の格差については、都市部・農耕・牧畜地域や職業階層の違いを越えて、多くの調査対象者が言及している。

ただし都市在住者たちは、こうした格差の存在を当然のことだと考えている。彼・彼女らは、時には農村を同情の目で見ているが、それと同時に農村地域のモンゴル族に対し、「意識が遅れている」、「怠け者が多い」、「出稼ぎに消極的」と批判的な意見を多くもっている。

＊「都市と農村の間は、二元的経済になっている。格差はますます拡大していくと思う。

市場の成熟が早すぎたので、農村にはもう発展の余地が少なくなった。これは経済構造の問題だ。でも農村の人たちの意識も遅れているのが現実だ。農閑期に出稼ぎに行かないで、トランプや麻雀をして、時間を無駄にしている。社会には問題があるが、彼・彼女ら自身にも問題がある」(ホルチン区都市部、公務員)

「私たち都会のモンゴル人は、みんな生活のために一所懸命頑張っている。しかし田舎のモンゴル人には怠け者が多い。現状に満足しやすい」（ホルチン区都市部、自営業者）

これに対し、特に農民・牧畜民たちは、「都会人はいい生活している」という一般的な認識をもっており、自分たちの子どもには将来、都市で生活してほしいと思っている。ただし彼・彼女らから見ると、農村離脱の望ましいルートは学校教育・進学であって、出稼ぎではない。そのため、子どもたちができるだけ大学などを卒業して、都市で就職することを希望している。農民たちは、「故郷を離れたくない」「家族と離れ離れになってもいいのか」、「お金を儲けられるとはかぎらない。ひょっとしたら騙されてしまう」など、出稼ぎに対しては慎重である。そして、多くの人は、出稼ぎというものを、本当に地元で生活していけなくなったときの最後の選択肢だと考えている。牧畜民の中でも「故郷を離れて苦勞するより、放牧生活は自由自在だ」と語る人がある。

＊「漢人のように、家族を残して出稼ぎ行くことは、私たちにはできない。まだ結婚していない若者なら行ってもいいけれど、それも暮らしの状況を見てから決めるべきだ。たとえば労働力があまったときや、田舎で家計を維持するのが難しくなったときに、しょうがなくて出稼ぎに行くなら、それは理解できる。そうじゃないなら、わざわざ遠いところに行く必要はないだろう」（Nb 村、農民）

「出稼ぎに行っても、儲けるお金がない。今の若者たちはお金を全部遊びに使ってしまう」（Nb 村、農民）

「もし親戚や知り合いのところにいったら労働するならいいけれど、私たちにはそんな親戚もないし、子どもが外でだまされるのが心配」（Ma 村、農民）

「私たちの村の状況から見ると、出稼ぎに行かなくても、いい生活ができる。見知らぬところにいったら多大な苦勞するより、地元で放牧生活をするほうが自由自在だ」（Bb 村、牧畜民）

「モンゴル人は、苦勞する前に享受することを考えてしまう。出稼ぎに行った若者は、帰ってくる前に給料を全部使い尽くしてしまう。だからいつまでたっても富めないのだ」（Bc 村、牧畜民）

第3項 漢族とモンゴル族の格差

漢族とモンゴル族の間の格差については、二つの視点がある。

調査対象者の多くは、「この漢人とモンゴル人の間には、ほとんど格差がない」と語るように、自分たちが居住する通遼地域では、民族間の格差が顕著ではないと見ている。

しかし、「外地」（沿海部などの経済発展地域）の漢族との比較を通して、現在のモンゴル族は経済的に遅れているという認識ももっている。

後者は実際には地域間の経済格差の発現形態ではあるが、少数民族である彼・彼女らには、これが民族間の経済格差としても認識されているのである。しかもこうした格差は、「外地」の漢族による採鉱、道路・不動産建設などの各種の開発事業や投機行為を通して、すでに彼・彼女らの生活圏に接近してきている。

- * 「この漢人とモンゴル人は、生活水準には大きな差がない。漢人で非常に貧しい人もいれば、モンゴル人で富裕な人もいる。でもいくら富んでも、南方（中国南部）の漢人とは比べ物にはならない。この数年、通遼で新しい建物がたくさんできた。その多くは南方の漢人が投資して建設したものだ。モンゴル人には、そんな人がほとんどいない。最近、温州の人による不動産投機で通遼の不動産価格も急上昇した。一番安いところでも一平米 2 千元を超えている。彼・彼女らはますます富んでいて、地元の人には損をするばかりだ」（ホルチン区都市部、公務員）
- 「漢人は、金銭問題で細かい。モンゴル人は大雑把だ。けどこの地域の漢人を見ると、生活は私たちと大差がないように感じる」（Ma ソム、農民）
- 「外地の漢人は工場を建てたり、炭鉱を掘ったりして、草原を侵食している。その割に、モンゴル人は何の得もしていない。最近、ホーリン・ゴル市の近くの牧場では、家畜が中毒を起こす事件が頻発している。牧場に流れてきた工業汚水を飲んだことによると言われている。この調子では、草原はますます破壊されていくだろう」（Ba 村、教師）

第4項 同地域内部での階層間格差

そして同じ地域内の階層間の格差については、都市部の労働者・一般自営業者たちや多くの農耕・牧畜地域在住者たちが言及している。

都市部では、主に労働者・一般自営業者たちは、国有企業の民営化以降の状況を「一部

の管理職は資本家になって富んできたが、私たちはますます苦しくなった」と語っている。

- ＊「昔、労働者は国家の主人といわれていた。でも今は雇い主の奴隷だ。国有企業のと
きに部長や課長だったやつらは、民営化後に資本家になった。もちろん彼・彼女ら
の儲けるお金は昔より多いけれど、私たちは貧しくなってきた」(ホルチン区都市部)

農耕・牧畜地域では、多くの人が、格差は拡大傾向にあると見ている。また、大学進学などに関わる教育費の支出が、特に貧困な農民・牧畜民にとって深刻な経済的負担になっているという発言も聞かれる。格差の存在については、「人それぞれの努力によって決まるから、それでいい」と考える人もいれば、「やはりみんな平等のほうがいい」と考える人もいる。

- ＊「田舎では、貧富の格差が拡大していると思う。でも経済基礎や人それぞれの努力によって決まるから、それでいいと思う」(Nb 村、農民)

「貧富の格差が大きくなった。特に大学生をもつ世帯の支出が大きい。そうじゃない世帯はすでに富裕になった。今は、国家の農民に対する政策は非常にいい。病気にならなければ、大きな経済負担もない。だけど子どもたちは教育を受けて大学に入りたいから、私たちは大金を出すしかない」(Nb 村、農民)

「貧富の格差が拡大している。特に牧畜民の間で格差が大きい。これはあまりよくないことだと思う。社会の不安定を招きかねない」(Ba 村、公務員)

「貧富の差が大きくなっている。やっぱりみんな平等のほうがいい」(Bb 村、牧畜民)

第2節 言語に関する社会意識

本節では言語をめぐる社会意識をみていくが、その前に調査対象者たちの使用している内モンゴル東部方言の特徴を概観しておこう。

第1項 内モンゴル東部のモンゴル語方言の特徴

調査対象者たちの話しているモンゴル語東部方言¹⁾は地域ごとに差があると同時に、共通する要素も多い。今回は厳密な言語調査は実施していないが、しかし調査対象者たちの話からある程度、言語の地域性を把握することができる。

語彙の特徴にかぎってみると、たとえば「父」という語は農耕地域で「aab」²⁾、「aabu」というが、牧畜地域では「aĵa」という。農耕地域では、「aĵa」は兄の意味である。また、牧畜地域では「mal」ということばは、遊牧民の伝統的な五畜（馬、ラクダ、牛、ヤギ、羊）の総称として使われているが、農業地域では牛だけをさす。牧畜地域では法律を「quul」、「quul yos」などと、モンゴル語固有の単語で表すが、農業地域では漢語の単語「法律」を借用している。ただし、読み方には多少の変化も生じている。一つは漢語の声調をはずし、モンゴル語のなまりで発音することである。いま一つは、Ma 村では「faalyüi」と子音「f」（/f/）³⁾はそのまま発音されるが、Nb 村では「paalyüi」と発音され、「f」（/f/）は「p」（/p/）に入れ替わる。また、動詞の語幹は漢語からの借用語だが、語尾はモンゴル語であることばは、いずれの地域でもたくさん存在する。たとえば「ぶつかる・衝突する」は標準語⁴⁾で「mörgök」（蒙古文字正書法では「mörgükü」）というが、東部方言では「čvanglaq」ともいう。これは漢語の「撞」（発音：zhuang）にモンゴル語の語尾「q」を接続してできたことばである。しかし、漢語の「zhuang」という発音から「čvanglaq」までには、さらにいくつかの変化が見られる。まず子音「zh」（/dʒ/）が「č」（/tʃ/）に変化したことである。また、辞書形語尾「q」のまえに、命令形の「l」が接続されている。これは、モンゴル語の動詞の語幹の多くが命令形でもあることに由来すると考えられる。つまり、ここでは「zhuang」→「čvang」→「čvangl」→「čvanglaq」という複雑な変化が確認できる。このように、漢語からの借用語は、実際に彼・彼女らが話すことばの中で大きく変化している例が少なくない。

都市部在住者たちの使うモンゴル語には、多少地域ごとの差がみられるが、しかしいず

¹⁾ 政治的・社会的な事情もあり、モンゴル語の方言分類に関しては、多様な意見が存在する（フフバートル（2007））。また、かつてモンゴル語との境界が非常にあいまいだった「方言」が、近代的な文語の確立を経て、モンゴル語と別の言語として扱われるようになったケースもある（荒井（2006））。本論文でいう「東部方言」とは主に現在の通遼市とヒンガン盟で使われているモンゴル語をさす。

²⁾ 本項のモンゴル語ローマ字表記は現地音にしたがう。

³⁾ 「f」は国際音声記号。

⁴⁾ 中国領内のモンゴル語の標準音として定められているのは、シリン・ゴル盟正藍旗のチャハル方言である。それには主に2つの理由がある。①モンゴル国の標準音であるハルハ方言に近い、②東部方言に比べ、漢語からの借用語が少ない。標準音制定のいきさつについては、テグス（2009）339－344頁を参照。

れも内モンゴル東部方言に属するため、お互いの意思疎通には支障がない。特に専門用語では、漢語の名詞を訳さずにそのまま使うことが一般的である。たとえば公務員の使う「venjyen」（「文件」、公文書）、教師の使う「jooan」（「教案」、教案）などは、漢語の発音とほとんど変わらない。ただし、上述のように漢語のアクセントは完全にはずされ、モンゴル語のなまりで話されている。生活用語でも「dyenshi」（「電視」、テレビ、「sh」は「š」のように発音されることもある）のように漢語からの借用語が多いが、たとえばコンピューターを「dyennoo」（漢語からの借用）とよぶ人もいれば、「k'umpyuter」（ヨーロッパ言語からの借用。ロシア語経由でモンゴル語に入った可能性が高い）という人もいる。また、「電話する」を「dyenqva čoqoq」（漢語では「打電話」、čoqoq は動詞「打」の直訳）⁵ というように、漢語の動詞だけを意識し、名詞をそのまま使うこともよくある。

第2項 モンゴル族における漢語の使用に関する社会意識

都市在住者たちは、都市では仕事や公的施設で漢語の使用が避けられない現状については、「仕方がない」と感じている。多くの人は「モンゴル語の使用率が高くなってほしいが、現状から見るとありえないことだ」と語る。それは、「漢人のほうが多数である」、「漢語はモンゴル語よりはるかに広く使われている」からである。

一方、農耕・牧畜地域では、モンゴル語の使用を続けるのが当然であると考えられており、多くの人々が「モンゴル民族の言語を受け継いでいくべき」と主張している。しかし農耕・牧畜地域でも、特に都市的職業従事者たちは「都市化につれてモンゴル語がだんだん忘れられていく」と、葛藤を感じている。

また、一部の都市在住者は、「モンゴル人を相手にしているにもかかわらず、わざと漢語でしゃべる」風潮が一部にみられることを指摘し、これを「漢人への盲目的崇拝」と批判している。たとえば、つぎのような声が聞かれる。

- * 「こっちがモンゴル語で話しているのに、わざわざ漢語で話してくる人がいる。まるで漢語を使ったら、モンゴル人の同胞より頭一つ分高くなった（偉くなった）ように振る舞っている。そんな人は好きではない」（ホルチン区都市部、労働者）

⁵ このような漢語を機械的に意識したことばを、一部の知識人は「modun kele」（木のような硬い表現）と呼び、批判している。ünenči (2002) 189–191 頁。

第3項 モンゴル語の方言に関する社会意識

調査対象者のうち、内モンゴルにおけるモンゴル語の標準語や、それに近い中西部方言がよく聞き取れるのは、牧畜地域B鎮の人たち、および大学など高学歴の人たちである。逆に、学歴が低い農民や農業地域出身の労働者・自営業者たちは、「西部のことばはあまり聞き取れない」と感じている。B鎮は牧畜の伝統がいまだに多く残っており、漢族の移入民も少ないため、漢語からの借用語が比較的、少ない。そこでB鎮の居住者の一部は、同じ東部方言の中でも、自分たちのことばはMソム・N鎮など農業地域のモンゴル語より「純粹」だと見なしている。高学歴者の場合、学校教育を受けた時間が長かったため、中西部方言と接触するチャンスも多かった。そこには二つのきっかけがある。ひとつは、学校で教えるモンゴル語の授業には、中西部方言、または中西部方言に近いモンゴル国のハルハ方言で書かれたものが多いので、就学年数の長期化につれて、中西部方言の語彙の量が増えていくと考えられる。いまひとつ、大学では、内モンゴル中西部出身のモンゴル族との接触の機会が増えていくからである。

彼・彼女らは、自分たちの話している東部のモンゴル語方言は、内モンゴルのモンゴル語標準音に近い中西部の方言と、かなり異なると感じている。それには、東部方言のなまりが中西部方言と異なることや、東部方言には漢語からの借用語が多いという事情が重なり合っている。そこで、多くの人は、「やはり西部のことばはきれいに聞こえる」と考えており、「私たちのことばは純粹なモンゴル語ではない」と感じている。ただし、すべての人がこのように考えているわけではなく、一部の人は「それぞれのことばが違うだけで、優劣はない」という意見も聞かれる。さらに「西部のモンゴル語ができなくても、私たちはモンゴル語で話している。もちろん自分のことをモンゴル人だと思う」と、方言と民族的所属意識は関係ないと主張する人も少なくない。

＊「西部の人との接触もあったので、彼・彼女らの話していることばはだいたいわかる。

でも彼・彼女らのようにきれいに話すことは、私にはできない。大学には西部から来た学生がいる。私は授業を教えるときに東部のことばでしゃべるしかないので、西部の学生の前で恥ずかしく感じる」（ホルチン区都市部、大学教師）

「ホルチンにはホルチンの文化がある。ホルチンの言語も西部と違う。特に優劣はない。言語は地域によって差が出るのは当たり前のことだ。無理やりに西部のことば

をしゃべらせるように要求してはいけない」⁶ (Ba 村、教師)

第4項 言語と民族の関係に関する社会意識

しかし、さらに踏み込んで「モンゴル語ができない人」と「モンゴル族」との関係をたずねると、意見の違いが現れてくる。

まず都市的職業従事者の場合、「モンゴル語がきちんとできないとモンゴル人ではない」、「モンゴル語が少しでもできないといけない。まったくできない人はモンゴル人とはいえない」、「モンゴル語ができなくても、民族としての感情があればみんなモンゴル人だ」、「モンゴル語がきちんとできるほうがいいと思うが、うちの子はあまりできないからすごく矛盾を感じる」と多様な声が聞かれる。

一方、農民・牧畜民たちは、「モンゴル語が一言もしゃべれなくても、その人のルーツがモンゴル人であればもちろんモンゴル人」というように血統を重視するか、または「私の知り合いであれば、モンゴル語ができなくてもモンゴル人と思う。私の知り合いでなければ、モンゴル人とは思わない」と語られるように、自分からの主観的・相互主観的な関係の遠近で民族の境界線を判断している。

農民・牧畜民たちのこのような考え方は、民族的出自を漢族からモンゴル族に変更した人⁷に対しても同様である。農民・牧畜民たちからみれば、民族的出自を変更した人は、血縁関係さえはっきりしていれば、つまり「彼・彼女らはモンゴル人の子孫であることが証明できれば」、漢族ではなくて「本当のモンゴル人」(jinggini mongyul) である。

＊「モンゴル人には氏族がある。ある人はモンゴル人か否かは、その人の血縁関係を調べて、それでモンゴル人の子孫であると証明できればモンゴル人だ。何語を話すかは関係がない」

一方、都市部在住者を含む都市的職業従事者たちは、ごく少数を除けば、民族的出自を変更した人の多くが「偽モンゴル人」(oruyul mongyul) だと見なしている。彼・彼女らから見ると、民族的出自の変更は、「少数民族に対する優遇政策に便乗して得をするため」で

⁶ これは、漢語の借用より、むしろアクセントや語彙の違いに対する発言のように思われる。

⁷ 中国では、1982年から1990年の間に大規模の民族的出自の変更が行われた。同時期に、民族的出自を漢族から少数民族に変えた人は2000万人にのぼるといわれている。内モンゴルでは、1982年の上半期だけで、30万9千人が民族的出自を漢族からモンゴル族に変更した。岡本(1999) 45頁。

あり、その結果、「本当のモンゴル人」の進学や就職が妨げられるのである。

＊「モンゴル語が少しでもできないといけない。まったくできない人はモンゴル族とはいえない。行政機関では偽モンゴル人がよく見当たる。彼・彼女らは民族的にモンゴルといっても、実際モンゴル語が一言もしゃべれない。彼・彼女らは民族的出自を変えたのは、大学入試や公務員試験で点数が加算されるメリットがあるからだ。特に公務員試験では、彼・彼女らは本来モンゴル語で教育を受ける人に与えた機会を奪い取っている。非常に不公平なことだ」

第3節 文化習慣と「民族性」に関する社会意識

次に、文化習慣と「民族性」に関する社会意識をみてみよう。

第1項 文化習慣に関する社会意識

モンゴル族の文化習慣の中には、日常的に行われているものと、知識としては知っているが、日常的にはあまり行われていないものがある。

日常的に行われている文化習慣としては、たとえば「敷居を踏んではいけない」、「馬と犬の肉を食べてはいけない」⁸、「黒い日に旅に出てはいけない」⁹、「(旧暦)正月の一ヶ月間は、理髪してはいけない」などのタブーや、「干支の年を重視する」¹⁰、「宴会では必ず歌を歌う」などの習慣があげられる。また都市や農業地域では聞かれないが、牧畜地域では、「食事の時にお年寄りと同席するのは失礼」といった習慣もある。そのほか、生業の形を文化習慣として捉えている人もいる。すなわち牧畜民たちは、「放牧する」ことを、モンゴル族の一つの文化的特徴と考えている人がいる。農民のなかにも、「いくら農耕が生業の中心になったとしても、それでも家畜から離れたくない」といった声も聞かれる。農耕・牧

⁸ これはチベット仏教の影響だと考えられる。馬肉タブーについては歴史記録が残っている(札奇(1989)48頁)。

⁹ モンゴル族に暦注の伝統がある。暦注による選日法において、凶日は「qara edür」(黒い日)と呼ばれる。特に旧暦正月十日は一年中最も凶の強い日(jil ün qara)といわれおり、その日に外出を極力避ける習慣がある。

¹⁰ 漢族には長寿祝いを10年ごと(60歳、70歳、80歳)に行う習慣があるが、モンゴル族では干支の年が重視され、長寿祝いは12年ごと(60歳、72歳、84歳)に行われる。

畜地域だけでなく、都市在住者にも「遊牧の伝統」をモンゴル族の習慣の一つと考える人もいる。

一方、日常的にあまり行われていない習慣としては、「敬酒礼」¹¹、「ハダグを贈ること」¹²などがあげられる。これらは、内モンゴル東部では実際にはあまり行われなくなっているが、しかしそれでも多くのモンゴル族の人々は、これらがモンゴル族の民族文化習慣であると認知している。これは、マスメディアの影響、および草原の観光地への旅行を通して、知ったものと考えられる。そしてもちろん、このような外からやってきた「民族文化習慣」については、どちらかというと都市在住者と農村の都市的職業従事者のほうが、積極的に語っている。農民・牧畜民たちには、あまりこれらについて語る声は聞かれない。ただし農民・牧畜民たちも、これらの習慣を知らないわけではない。たとえばハダグを贈る習慣はみんな知っているが、「ふだんそんなことはやらない」のである。

そして内モンゴル東部では、従来ほとんど見られなかったが、近年になって都市部や都市的職業従事者を中心に急速に広がりつつある「モンゴルの」な習慣が少なくない。たとえば、ホルチン区都市部では、一部の調査対象者はモンゴル服を持っており、それを祭りや公演などの時に着用する。しかし、それはホルチン地域の従来のモンゴル服とは異なっており、ウジュムチン・チャハルなど内モンゴル中部地域の衣装のスタイルをとっている。また、調査した一部の家庭ではチンギス・ハーンの肖像画を壁にかけているが、これをかけ始めたのは実際、近年になってからである。

＊「シリン・ゴルにいる親戚に頼んで、モンゴル服を作ってもらった。チャハル式の服を少し改良したものだといわれている」（ホルチン区都市部、大学教師）

「うちにはチンギス・ハーンの肖像が描かれているタペストリーがある。3年前にエレーンホト¹³で買ったものだ」（ホルチン区都市部、公務員）

第2項 「民族性」に関する社会意識

次に「民族性」の捉え方について見てみよう。

調査対象者たちは、モンゴル族の「民族性」について、「率直」（asbur čayabur）、「親切」

¹¹ 客に酒をすすめるときの儀礼。

¹² ハダグ（qaday）はチベットやモンゴルなどの民族において、敬意、慶賀、祝福を表すために贈る薄い絹。モンゴル族では特に白い色と青い色のものがよく使われる。

¹³ モンゴル国に接する辺境貿易都市。北京ーウランバートル鉄道の中継地。

(qalayumsay)、「心が広い」(sedgil ayuĭim)などのことばで表現している。具体的な内容については、「友情を大事にする」、「客好き」、「お年寄りを尊敬し、子どもをかわいがる」、「お金より家族の絆が大事」、「人を信頼する」、「小さなことにこだわらない」、「人生を楽しむ」などの肯定的な捉え方もあれば、「人に騙されやすい」、「金銭意識が希薄」、「怠ける」などの否定的な捉え方もある。

「率直」というのは、「裏表がない。相手が悪かったら、それを直接伝える」、「人を騙さない」などである。そして、「率直」は「モンゴル人の典型的な特徴」と見られている。それと対照的に「漢人は頭の回転が速すぎる」という認識も存在する。

「親切」には、「気立てがいい。人を助ける心をもつ」、「友情を大事にする」、「寄り合いが好き、お客さんを大切にする」などの意味がある。そのため、宴会の時にお酒を飲みながら歌を歌うことは欠かせないものであり、そこに「モンゴルの」な特徴も現れると見ている。

「心が広い」には、「小さいことにこだわらない」と、「困ったときに慌てない」という意味が含まれている。

これらの性格的特徴はもちろんそれぞれ単独では語られていない。お互いに絡み合って、同時に現れることが多い。

＊「一般的にいうと、モンゴル人の性格は率直で、心が広い。漢人のようにずる賢いところがない。だけど、単純すぎるときもある。相手の言うことを疑わないで、結局騙されることもある」(ホルチン区都市部、自営業者)

「モンゴル人の性格は率直で、親切である。お客さんが来たら、一番おいしいもので招待する。お金より家族の絆を大事にする。村に住んでいるある漢人の家で、最近、親子の間で金銭問題のトラブルが起きていた。息子が人に騙されて、家産を全部なくしたのに、お父さんは少しのお金もあげなかった。モンゴル人だったら、息子のそんな悲惨な状況をみて黙っていられるか」(Nb 村、農民)

「われわれモンゴル人は、金銭意識が非常に薄い。生活が維持できれば、それで満足する。大金を稼ごうと思わない。金銭的に余裕があったら、それをすぐ使ってしまう。漢人のようにお金を少しずつ貯めて、将来のために備えようと思わない」(Ma 村、公務員)

第4節 宗教・歴史・地域に関する社会意識

最後に、宗教・歴史・地域に関する社会意識についてみておこう。

第1項 宗教に関する社会意識

従来、モンゴル族の大多数がチベット仏教を信仰していたため、家庭では仏像をもつことが一般的だった。しかしこの信仰は、文化大革命で大きな打撃を受けたため、現在の中年層以下の人たちには信者は少ない。特に都市部や農村地域の調査対象者たちの多くは、宗教信仰がないと語っている。仏像をもつ世帯もあるが、信者は調査対象者本人ではなく、ほとんど同居している高齢者（本人または配偶者の父母など）である。ただ、B鎮の牧畜民の中では、チベット仏教を信仰する人が比較的、多かった。また自営業者の場合、商売繁盛のために仏像を祭る現象はいずれの地域にも存在する。

＊「宗教には科学的な根拠が乏しいから、私は宗教を信じない。だからといって宗教を完全に否定するわけにはいかない。たとえば仏教は私たちの伝統文化でもある。私たちはそれを保護すべきだと思う」（ホルチン区都市部、教師）

「家に仏像がある。ふだんは母が参っている。私たちは参ることもたまにある。商売繁盛や身の安全のためには、仏を信じたほうがやはりいいだろう」（ホルチン区都市部、自営業）

「仏を参っていない。だけど私たちモンゴル人は、慌てたときに『burqan』（仏様）とすることがある。仏教を信じていないけれども、どこかでその影響を受けているはずだ」（Nb村、農民）

「私たちは仏を信じる。家の仏像は先祖から受け継がれたものだ」（Bb村、牧畜民）

第2項 歴史に関する社会意識

仏像に比べ、チンギス・ハーンの肖像画をもつ世帯ははるかに多い（表 4-1、4-2、4-3、4-4）。しかし、多くの家庭でチンギス・ハーンの肖像画を掛け始めたのは、ここ数年の新たな風習である。チンギス・ハーン祭祀は、昔、貴族集団による先祖崇拝の儀式であり、決して、すべてのモンゴル族の「民族的な行事」ではなかった。しかし、近代的な

民族概念の受容につれて、昔の部族・氏族意識を超えた「モンゴル民族」という意識が普及し、チンギス・ハーンは徐々に「民族の英雄」と位置づけられるようになった。チンギス・ハーンの肖像画をかけ始めたことから、こうした近代的な民族意識の普及が伺われる。そこで、彼・彼女らは「歴史上、モンゴル人はすばらしかった」という共通の認識を持っており、「チンギス・ハーンはモンゴル民族の誇りだ」と考えている。

このような歴史意識は、各種の出版物・テレビ・ラジオ・インターネットなどのマスメディアを通して急速に広がりつつある。1980年代以来、中国ではチンギス・ハーンを題材とした歴史書、小説、映画、ラジオドラマ、テレビドラマ、音楽作品などが数多く作られてきた。その背後には、チンギス・ハーンを「中国の歴史上の人物」、「中華民族の英雄」として捉え、モンゴル世界における内モンゴルの正統性を強調する政府側の思惑があるが、それは同時に、モンゴル族の側にチンギス・ハーンを「モンゴル民族の誇り」と位置づける余地をも与えたのである。昔の部族や地域の壁を越えた「モンゴル族」という概念は、共通の「歴史の記憶」を通して構築されるようになった¹⁴。

ただし、「民族の過去の歴史に誇りを持つ」ことには、多くの場合、現状に対する不満という側面も併せ持つ。特に都市在住者や農耕・牧畜地域の都市的職業従事者には、このような不満が多く聞かれる。「昔のモンゴル人はよかったけれど、今のモンゴル人はだめだ。怠け者が多い」と語られるように、彼・彼女らは現在のモンゴル族について「敢闘精神が足りない」、「視野が狭い」と批判している。

＊「チンギス・ハーンはもちろんわれわれ全モンゴル人の誇りである。でも今のモンゴル人は敢闘精神がなくなってきた。昔は馬の上から見たとき、全世界はモンゴルだった。今は馬を降りて見たら、馬だけがモンゴルだ」（ホルチン区都市部、公務員）
「モンゴル人の歴史を誇りに思う。テレビでチンギス・ハーンのドラマを見て、すごく感動した。われわれモンゴル人は、昔世界を征服していた時代には本当にすばらしかった。でも今のモンゴル人はだめだ。お酒や賭け事にはまっている人が少ない。民族の言語もなくなりつつある。この調子で行けば、満洲人のように滅ぶだろう」（ホルチン区都市部、労働者）

¹⁴ このような共通の民族意識の構築は、内モンゴル東部のモンゴル族だけではなく、中国のモンゴル族全体にとって、普遍性をもつと考えられる。たとえばシンジルトは青海省河南モンゴル自治県の事例を分析している。シンジルト（2003）250－254頁。

「チンギス・ハーンの成し遂げた偉大な事業は、ほかの民族には見られない。だからチンギス・ハーンを誇りに思う」(Nb 村、農民)

「われわれモンゴル人にとって、チンギス・ハーンは仏様のような存在だ」(Bc 村、牧畜民)

第3項 地域に関する社会意識

また、調査対象者には、「ホルチンの人」という地域に根ざす帰属意識も存在する。実際、「ホルチン」ということばにはいろいろな意味があり、「ホルチン地域」の地理的範囲についても、さまざまな捉え方がある¹⁵。

歴史上、「ホルチン」とは部族の名称であった。しかし現在は、「ホルチン」を単独で行政区の名称とするホルチン区も存在する。さらに調査対象者が日常的に考えているホルチン地域は、通遼市の行政的な管轄範囲ともほぼ一致する。これは、通遼市政府が近年、文化産業振興策として、「ホルチン文化」を打ち出したことの影響があると考えられる。そのため、従来「ホルチン」ではなかった地域も、現在の通遼市の管轄下にあるゆえに、ホルチンの一部とみなされるようになり、その文化も、「ホルチン文化」の一部とみなされるようになった。たとえば、牧畜地域B鎮は、歴史上、ジャロド部族の遊牧地であり、ホルチン部族とはほとんど関わりがなかった。しかし、B鎮の調査対象者のうち、地元出身の都市的職業従事者は、自分を「ホルチンの人」と考えており、「ジャロド文化」は「ホルチン文化」の下位文化と位置づけていた。これに対し、牧畜民の中では「ジャロド」と「ホルチン」は違うという認識を持っている人がいる。また、ホルチン区都市部の調査対象者たちも、出身地を問わず「ホルチンの人」という意識を共有している。

＊「私はホルチン左翼中旗の出身である。孝莊文皇后¹⁶、ガーダー・メイリン¹⁷はわれわれホルチンの人の誇りだ」(ホルチン区都市部、医者)

¹⁵ 通遼市以外で「ホルチン」が入っている地名は、ヒンガン盟のホルチン右翼中旗とホルチン右翼前旗がある。これらの地域は通遼と歴史的なつながりが強いため、ホルチン地域の一部と見なすこともできる。さらに通遼市・赤峰市・ヒンガン盟を合わせた内モンゴル東部を包括的に「ホルチン地域」とする捉え方もある。

¹⁶ 孝莊文皇后(1613-1688):ホルチン部出身の貴族。清朝二代目の皇帝ホンタイジの妃で、三代目の順治帝の実母、および四代目の康熙帝の祖母。順治、康熙両代にわたって政務を掌り、その後の清朝政権の基礎を築く。中国では清朝立国の立役者として高く評価されている。

¹⁷ ガーダー・メイリン(1892-1931):ホルチン左翼中旗の人。草原開墾に反抗した武装蜂起の指導者。武装蜂起が中国の軍閥に鎮圧され、戦死する。その事跡はモンゴル族の間で広く知られており、「民族英雄」として慕われている。

「私はフレー旗に生まれた。だけど、自分がホルチン人とも思っている。フレーの人は、皆ホルチンの人だろう。フレー旗のアンダイ踊りもホルチン文化の一部だと思う」(ホルチン区都市部、公務員)

「私の先祖はモンゴルジン部族¹⁸の出身だったらしい。私自身はホルチン左翼後旗に生まれた。だから自分がモンゴルジン人とも、ホルチン人とも思っている」(ホルチン区都市部、大学教師)

「私はジャロド旗の出身だ。もちろん自分をホルチンの人とも思っている」(ホルチン区都市部、労働者)

「自分をホルチンの人だと思う。ホルチンと通遼は同じだろう」(Nb 村、農民)

「私は自分のことをホルチンの人とも思う。ジャロドの民謡、ホーリン・ウリゲルなどはホルチンの文化の一部だと思う」(Ba 村、公務員)

もちろんこうした「ホルチンの人」という意識は、モンゴル族としての民族意識と競合・矛盾するものではない。むしろ民族意識の一部として位置づけられている。

＊「モンゴル民族の文化は多様で、豊かだ。それぞれの地域にそれぞれの文化がある。それを無理やりに統一する必要はないだろう」(Ba 村、教師)

第5節 小括

本章では、調査対象者たちの社会意識、具体的には経済格差、言語、文化習慣、歴史、宗教、地域などについての見方・意識を中心に見てきた。

調査対象者たちが認識している格差は、①大都市・沿海部と内陸部の格差、②内モンゴル内部での都市と農村の格差、③漢族とモンゴル族の格差、および④同じ地域内の階層の格差の4つに分類できる。これらの格差に対する認識は、彼・彼女らの主体的な判断と絡み合い、言語・教育を含む生活の営みに一定の影響を及ぼしている。

大都市・沿海部と内陸部の格差については、都市部の専門的・管理的職業従事者、上層自営業者、および農耕・牧畜地域の都市的職業従事者たちに、強く意識されている。その

¹⁸ モンゴルジン (mongyuljin) はモンゴルの一部族。その末裔の多くは遼寧省阜新モンゴル族自治県に居住している。

ため、彼・彼女らは子どもが将来、大都市・沿海部、さらにその延長線上にある「外国」で就職して生活することを強く願っている。

都市・農村の格差について、調査対象者たちはほぼ全員、意識している。しかし、格差の克服の方策についての見方には、明らかに地域・階層的な差が存在する。都市在住者たちは、農民・牧畜民たちの意識が遅れており、貧しい生活から脱出するために出稼ぎに行くべきと主張している。これに対し、農民・牧畜民たちは出稼ぎを地元で生活できなくなったときの最後の選択肢だと考えている。

漢族とモンゴル族の格差は、主に「外地の漢族 対 地元のモンゴル族」という形で認識されている。こうした格差はすでに、「外地」の漢族による開発事業や投機行為を通じて、彼・彼女らの生活圏に接近している。また、こうした格差についての認識には、特にはっきりした地域・階層の差が見られない。

同地域内部での格差については、特に都市部の労働者・一般自営業者と農耕・牧畜地域の人たちの多くが、拡大しつつあると考えている。

調査対象者たちの言語意識は「漢語－モンゴル語」の関係、モンゴル語内部での方言間の関係、言語と民族の関係などへの言及を通して、知ることができる。

都市部在住者や農耕・牧畜地域の都市的職業従事者たちは、モンゴル族における漢語の使用率がますます高くなっていくと考えている。しかし彼・彼女らは、モンゴル語ができる人どうしの間での漢語の使用という風潮には批判的である。これに対し、農耕・牧畜地域の人たちは、モンゴル語の使用を続けるのが当然だと考えている。ただし農耕・牧畜地域でも、都市的職業従事者たちは、都市化につれてモンゴル語が忘れられていくと考え、葛藤を感じている。

調査対象者たちの多くは、モンゴル語の東部方言は標準音に近い中西部方言とかなり異なると考えているだけではなく、東部方言を「純粋なモンゴル語ではない」と感じている。これには、はっきりした地域・階層の差は見られない。しかし、「モンゴル語ができない人」と「モンゴル族」との関係については、意見が明確に分かれており、特に都市的職業従事者と農民・牧畜民の間では、意見の隔たりが大きい。都市的職業従事者たちは、モンゴル語ができることをモンゴル族であることの重要な指標だと考えている。しかし、そのうち特に都市在住の人たちは、自分の子どもはモンゴル語ができない現状もあり、葛藤を感じている。これに対し、農民・牧畜民たちは、言語より血統を重視する傾向が強い。

調査対象者たちの知っている文化習慣の中には、日常的に行われているものもあれば、

近年、マスメディアなどを通して広く知られるようになったものもある。彼・彼女らの認識しているモンゴル族の「民族性」には、「率直」、「親切」、「心が広い」などがある。また、モンゴル族についての「歴史意識」は今もなお新たに形成されつつあり、しかも彼・彼女らは同時に「ホルチン」に対する地域意識も共有・形成しつつある。これらは地域・階層を超え、モンゴル族全体にわたって進行している。

以上見てきたように、彼・彼女らの社会意識には、地域・階層ごとに固有の特徴も見られるし、地域・階層を超えた内モンゴル東部、ないし現代中国のモンゴル族全体に広がっている特徴も少なくない。

第4章の図表

表4-1 ホルチン区都市部

NO.	方言意識			言語と民族			所有物	
	①	②	③	①	②	③	仏	チ
T1	○					○		○
T2		○				○		○
T3	○				○			
T4	○					○		○
T5	○					○		
T6	○			○				○
T7	○			○				○
T8	○					○		
T9	○					○		○
T10	○					○		○
T11	○					○		
T12	○					○		
T13	○					○		
T14	○			○			○	○
T15	○					○		
T16	○				○		○	○
T17	○					○	○	
T18	○			○				○
T19	○				○			
T20	○					○		
T21	○					○		
T22	○				○			
T23	○					○		
T24	○					○	○	
T25	○					○		

方言意識：

- ①西部方言は東部方言よりきれいに聞こえる
- ②東部と西部の方言が違うけれど、優劣がない
- ③わからない

言語と民族：

- ①モンゴル語ができないとモンゴル族ではない
- ②民族的所属は言語と関係ない
- ③どちらともいえない

仏＝仏像、チ＝チンギス・ハーンの肖像画
実態調査より作成。

表4-2 Ma村

NO.	方言意識			言語と民族			所有物	
	①	②	③	①	②	③	仏	チ
Ma1	○			○			○	
Ma2	○					○		
Ma3	○			○				
Ma4	○					○		○
Ma5	○					○		
Ma6	○					○		
Ma7	○			○				
Ma8	○					○		
Ma9	○					○	○	○
Ma10	○				○			
Ma11	○				○			
Ma12	○					○		
Ma13	○				○			
Ma14	○				○			
Ma15	○				○			
Ma16	○				○			
Ma17			○		○			
Ma18	○				○			
Ma19	○				○			○
Ma20	○			○				
Ma21	○				○			
Ma22	○					○		

方言意識：

- ①西部方言は東部方言よりきれいに聞こえる
- ②東部と西部の方言が違うけれど、優劣がない
- ③わからない

言語と民族：

- ①モンゴル語ができないとモンゴル族ではない
- ②民族的所属は言語と関係ない
- ③どちらともいえない

仏＝仏像、チ＝チンギス・ハーンの肖像画
実態調査より作成。

表 4-3 Nb 村

NO.	方言意識	言語と民族	所有物	
	① ② ③	① ② ③	仏	チ
Nb1	○	○		○
Nb2	○	○		
Nb3	○	○		
Nb4	○	○	○	○
Nb5	○	○		
Nb6	○	○		○
Nb7	○	○		
Nb8	○	○		○
Nb9	○	○	○	○
Nb10	○	○		○
Nb11	○	○		

方言意識：

- ①西部方言は東部方言よりきれいに聞こえる
- ②東部と西部の方言が違うけれど、優劣がない
- ③わからない

言語と民族：

- ①モンゴル語ができないとモンゴル族ではない
- ②民族的所属は言語と関係ない
- ③どちらともいえない

仏＝仏像、チ＝チンギス・ハーンの肖像画
実態調査より作成。

表 4-3 B 鎮の 3 つの村

NO.	方言意識	言語と民族	所有物	
	① ② ③	① ② ③	仏	チ
Ba1	○	○	○	○
Ba2	○	○		○
Ba3	○	○		
Ba4	○	○		○
Ba5	○	○		○
Ba6	○	○	○	○
Ba7	○	○		○
Ba8	○	○		○
Ba9	○	○	○	○
Ba10	○	○	○	○
Ba11	○	○		
Bb1	○	○		○
Bb2	○	○	○	○
Bb3	○	○	○	○
Bb4	○	○	○	○
Bb5	○	○	○	○
Bb6	○	○	○	
Bc1	○	○	○	
Bc2	○	○		
Bc3	○	○	○	○
Bc4	○	○		
Bc5	○	○		

方言意識：

- ①西部方言は東部方言よりきれいに聞こえる
- ②東部と西部の方言が違うけれど、優劣がない
- ③わからない

言語と民族：

- ①モンゴル語ができないとモンゴル族ではない
- ②民族的所属は言語と関係ない
- ③どちらともいえない

仏＝仏像、チ＝チンギス・ハーンの肖像画
実態調査より作成。

第5章 考察

以上、第1章から第4章まで、諸個人の生活史、現在の生活過程、子どもの教育、社会意識および将来展望などの特徴を分析してきた。本章では、全体を総括しよう。

第1節 言語と職業・教育

まず、調査対象者の80人のほとんどは、1960～70年代に生まれ、これは文化大革命やその前後の時期にあたる。モンゴル族の都市への定住、漢語の浸透が進んだのは主に1980年代半ば以降である。したがって彼・彼女らは農耕・牧畜地域の出身という共通点を持ち、モンゴル語の環境の中で育ってきた。また、一部の地域の出身者を除けば、彼・彼女らの多くは、学校でモンゴル語を学習した経験をもつ。

こうした彼・彼女らは、中国における改革開放や市場経済の時代を迎えた。その過程で、彼・彼女らの一部は農耕・牧畜地域を離れ、都市に移住するようになった。その移住は、主に3つのルートで達成された。一つ目は学歴を獲得し、都市で就職したケースである。二つ目は、都市の工場で臨時雇として雇われ、都市に移住し、そのまま残ったケースである。三番目は、直接、自営業をするために、都市に滞在し、一定の成功を収めて、都市に残ったケースである。一方、農耕・牧畜地域に残った人たちは、一部は農民・牧畜民として生活し続けており、また一部は農村に在住しながら都市的職業に従事している。改革開放後の社会的な変動の中、従来、同質性が高かったモンゴル族の内部で、職業や生活様式が多様化し、格差も拡大してきたのである。

このような変化と同時に、漢語がモンゴル族の社会空間に浸透してきた。しかしそれは均質的な浸透ではなく、地域および職業による不均等な浸透であった。

こうした中で、漢語を最も必要とするのは、農耕・牧畜地域よりも都市の在住者たちである。さらに都市の中でも、特に専門的・管理的職業従事者たちは、漢語の文語能力も身につけなければならない。また農村でも、都市への交通アクセスがよく、「蒙漢混住地域」とされるMa村では、漢語との接触頻度はその他の地域より高い。しかも同じ農村の中でも、都市的職業従事者たちは漢語を使うことが多く、特に公務員には漢語の文語能力が求

められている。一方、農民・牧畜民たちは、漢語を使うことが少なく、それゆえ、漢語で苦勞したこともほとんどない。

これらの事実は、モンゴル族における漢語の使用率の増加は、単に地域の言語環境にとどまらず、都市と農村の格差、職業階層とそれに伴う経済格差の拡大によって基礎づけられてきたことを意味している。

調査対象者たちの子どもの学校教育における「漢語－モンゴル語」の選択も、ただ単に言語の選択ではない。それは明らかに、「都市－農村」の格差、階層間の格差などと連動しながら行われている。都市在住のモンゴル族の大多数は、子どもを漢語の学校に通わせている。農耕・牧畜地域では、特に都市的職業従事者において漢語の学校を選択する人が現れているが、しかし引き続きモンゴル語学校を選択する人も一部に存在する。農村在住の都市的職業従事者がモンゴル語学校を選択するのは、即自的な民族意識にもよるが、それだけでなく、漢語学校の学生との熾烈な競争を回避し、大学進学の手を開くという対自的・戦略的な要素も含まれている。そして農民・牧畜民の多くは、日常生活の延長線上で即自的に子どもをモンゴル語学校に通わせており、したがって地元で漢語学校がないことへの不満もほとんどない。

これらの現象は、モンゴル族教育の漢語へのシフトが、単なる言語・文化的事情の枠内ではなく、むしろ経済・社会的な現実に基づけられていることを物語っている。漢語は、単に中国の国家語というだけではなく、何よりも市場における有利な言語という意味で、モンゴル族に受け入れられているのである。こうした中で、モンゴル語学校の教育は、モンゴル族向けの教育から、農耕・牧畜地域出身のモンゴル族を対象とする教育へと実質的にシフトし、また一部の都市的職業従事者にとっては、漢族との熾烈な競争を回避することによる社会的地位の再生産または上昇移動の装置としても機能するようになった。こうしてモンゴル族内部での格差が顕著になり、都市化の流れの中で教育の多様化も進んでいるのである。

都市在住のモンゴル族は、子どもを都市の学校に通わせている。これに対し、農耕・牧畜地域のモンゴル族は、都市、旗の中心地、農耕・牧畜地域など、多様な地域の学校に子どもを就学させている。すなわち農耕・牧畜地域の人たちも、経済的な余裕さえあれば、子どもを都会へと送り出している。特に都市戸籍をもつ都市的職業従事者たちは、そうである。その理由は「質のよい」教育を受けさせるためである。都市と農村の教育格差が拡大するなか、都市の学校に入ることが子どもの将来の学業達成につながるという観点から

みると、それは当然のことである。同じ都市の学校に子どもを通わせていても、都市在住の専門的・管理的職業従事者や一部の自営業者たちは、学校以外における教育投資も多い。しかし、都市の一般の労働者や自営業者にはそこまでの経済的な余裕がなく、教育の投資も限られている。こうした中、モンゴル族全体における教育の格差は、言語の問題だけにとどまらず、より広範な領域において広がっているのである。同じ漢語学校やモンゴル語学校の中でも、職業や居住地の違いにより、教育格差が拡大しつつある。

子どもの学校教育における「言語選択」は、単純な「民族意識」による選択ではなく、複雑な文化葛藤をはらんだ選択である。しかも、意識的・戦略的に教育言語を選択する都市在住者、高学歴者になればなるほど、その文化葛藤は激烈になる。逆に農民や牧畜民は日常の素朴な生活感覚の延長線上で、モンゴル語の学校に子どもを通わせる。ただしそれでも一部の「外の世界」を見た農民や牧畜民は、漢語の学校を選択するのである。あるいは、漢語への直接的な転換は子どもにとっても、保護者である自分たちにとってもハードルが高いと思い、あえて意識的にモンゴル語の学校を選ぶのである。農耕・牧畜地域の都市的職業従事者の一部は、漢語で苦労した経験が多く、それだけに漢語による教育が子どもの将来にとって有利だと判断し、漢語の学校を選択する。しかし、モンゴル語学校では競争が激しくないという理由で、子どもの将来の学業達成を狙い、子どもをモンゴル語学校にあえて通わせているケースもある。都市在住のモンゴル族の多くは、漢語の優位性を十分認識した上で漢語学校を選択している。しかし、それでもなお漢語とモンゴル語の双方が学べ、しかも大学進学に一定の優遇策がとられているモンゴル語学校の制度的な特徴を重視して、モンゴル語学校を選択するケースも見られる。

以上、みてきたように、モンゴル族の言語や教育に対する考えは、決して一枚岩ではない。現代中国の社会では、例外なくさまざまな格差拡大の現実にはさらされている。こうした現実を踏まえると、一部の先行研究で理想化した多文化主義が仮に実現したとしても、格差の拡大再生産は進展せざるをえないのである。言語使用と言語教育は、単に国家の民族政策という要因だけではなく、階層・地域などの要素を含むもっと複雑な社会的な仕組みによって決定されている。また再生産論から「民族教育」の問題を扱う際、異なるエスニック集団間の階層分化だけに注目するのは、現実的ではない。むしろ同じエスニック集団の内部における格差や階層分化が、当該エスニック集団のあり方を規定する重要な要素であることが、本研究の結果から見ると明らかである。

第2節 日常生活と口語の世界

さて、前述のように、漢語はモンゴル族の社会空間に浸透してきた。特に専門的・管理的職業従事者たちにとっては、漢語の文語能力はますます重要になりつつある。そこで、モンゴル族の学校教育は、次第にモンゴル語から漢語へとシフトしつつある。

しかし、調査対象者たちの日常生活において、口語である東部方言はいまだに広く使われている。

彼・彼女らの話している東部方言の特徴は、次の3つの差異の中で把握できる。

まず、「文語－口語」の差異である。近代モンゴル語の文語は、1920～30年代に当時のモンゴル人民共和国で確立し、その後、内モンゴルにも伝わった。その基礎となったのはモンゴル国のハルハ方言である。そもそも文語と口語の違いはあらゆる言語に存在するものであり、さらに方言の違いもあるため、近代モンゴル語の文語と東部方言との隔たりはきわめて大きい。

次に、「標準語－方言」の差異である。中国領内のモンゴル語の標準語に定められているのは、シリン・ゴル盟正藍旗のチャハル方言である。チャハル方言に比べ、東部方言には漢語からの借用語が多いということが、一般的に認識されている。ただし、それだけではなく、東部方言の言語構造（たとえば音韻体系）も実際、チャハル方言と異なる特徴がある¹。

そして第3に、「漢語－モンゴル語」の差異である。東部方言には確かに漢語からの借用語が大量に存在する。しかし、第4章第2節で述べたように、借用の過程で多少の変化が起きている。しかもそれはモンゴル語の文法構造の中で用いられている。実際、農村在住の農民・牧畜民たちは、このような漢語交じりのことばを使いながらも、「漢語が聞き取れない」、「漢語は非常に苦手」と感じているのである。都市在住者や農村の都市的職業従事者たちにも、個人差があるとはいえ、「漢語の表現力が乏しい」という認識は幅広く存在する。

以上の3つの差異から浮き彫りにされるように、調査対象者たちが日常的によく使っている東部方言は、近代モンゴル語の文語や内モンゴルにおけるモンゴル語の標準語、さらに借用語の出所である漢語のいずれとも異なる言語学的な特徴をもっている。こうした東部方言はしばしば、「醜いモンゴル語」といわれ、東部方言の話し手は「漢化されたモンゴ

¹ フフバートル（2007）362－363頁。

ル人」とみなされがちである。これは、「一民族一言語」、「純粋な民族語」といった近代的な民族観を基準とすれば、あながちまちがった定義とはいえない。しかし、実際に彼・彼女らが話していることばは、漢語でもなく、むしろ従来の東部地域のモンゴル語方言と漢語の要素が混在し、場合によっては学校教育を通じて入ってきた他のモンゴル語方言の要素も取り入れたハイブリッド言語であるという方が適切であろう。このようなハイブリッド言語は、内モンゴル東部の地域社会において歴史的に形成されてきたものであり、同時に地元のモンゴル族の現実の生活の必要に応じて維持・変容してきたものでもある。

序章でも述べたように、内モンゴル東部では、19世紀からの一連の歴史的な社会変動により、モンゴル族の定住化が進み、遊牧から半農半牧へと転じた。そこで、内モンゴル東部のモンゴル族の人口密度は、ほかの地域に見られないほど高くなった。こうした過程で、モンゴル語も混合化が進み、ついに今日のようにハイブリッド言語へと転じたのである。このハイブリッド言語は、彼・彼女らの現実の生活に根ざし、強い生命力を保ちながら今日まで伝わってきている。それゆえ、内モンゴル東部のモンゴル語はきわめて生命力にみちた言語ともいえる。

しかし、いざ「モンゴル」という近代的民族世界の中で内モンゴル東部のことばを捉えようと、かなり複雑な問題に直面せざるを得ない。そこでは、内モンゴル中西部という社会空間があり、さらにモンゴル国という国民国家もある。内モンゴル中西部のモンゴル族には、自然風土などの原因もあり、遊牧生活の伝統がいまだに根強く残っている。そのため中西部の方言には伝統的なモンゴル語の語彙が多く、またモンゴル国のハルハ方言との差が小さいため、一般的に「純粋なモンゴル語」とみなされている。そのため、中国政府も内モンゴル中部のチャハル方言を、中国領内のモンゴル語の標準音に制定し、将来的にモンゴル語諸方言の統合目標として位置づけてきた。内モンゴル中西部のモンゴル族から見ると、東部のモンゴル語は明らかに「醜いモンゴル語」である。東部方言は漢語交じりの言語であり、学校で教える「純粋なモンゴル語」の文語とは程遠い存在である。

だからといって、チャハル方言が内モンゴル全体に普及する可能性があるかという点、その可能性は非常に低いといわざるを得ない。チャハル方言は、漢語の標準語のように、それを強制的に普及させる国家権力もなければ、それを後押しする市場環境もない。そのため、法律の制定にとどまっており、それを具体的に実施する動きはほとんど現れない。それどころか、チャハル方言をはじめとする中西部方言の存続も、実は問題になりつつある。内モンゴル中西部では、土地が広い割に、モンゴル族の人口が少なく、人口密度も非

常に低い。そのため、漢語の浸透への抵抗力も強くないと見られている。さらに、人口密度の高い内モンゴル東部から中西部に移住するモンゴル族が増えているため、中西部の方言が逆に東部方言の影響を受けつつあるという指摘もある²。現状は、政府や知識人たちの統合案とはむしろ正反対の方向で進展しているのである。

本論文の調査対象者たちの間で、自分たちが話していることばについての評価に賛否両論があったのも、そのためである。特に都市在住の公務員・教師・医者などの専門的・管理的職業従事者たちは、チャハル方言こそ正統的なモンゴル語であると考えている。したがって、自分たちは「モンゴル語を西部の人たちほどきれいに話せない」という葛藤を抱えざるをえない。

こうした東部のモンゴル語方言の存在は、モンゴル族の言語・教育を扱った近年の研究に大きな限界があることをも、浮き彫りにする。まず多文化主義からの接近を試みた研究の想定とは大きく異なり、東部方言は、均質的な「モンゴル文化」の幻想に基づいた「多文化共存」では決して捉えきれない存在である。次に政策に焦点をあてた研究の想定とも異なり、東部方言は、「国民統合 対 民族教育」といった単純な枠組みには収まらない複雑な存在でもある。また、教科書の内容に焦点をあてた分析の想定とも異なり、東部方言は、学校教育に依存する文語とは異なる「生きた」言語であり、そこには教科書の改善に包摂しきれないモンゴル族の主体的な営みが現れている。

東部方言の話者たちは、自分たちの話していることばにどのような感情をもつとしても、実際には否応なしにそのことばを使用している。それは内モンゴル東部の社会環境に規定され、政策・教育制度の影響を受けながら、彼・彼女らの現実の生活の必要から生まれた言語である。東部方言が広く使われてきたことは、内モンゴル東部のモンゴル族の絶え間ない主体形成の過程であり、それゆえに彼・彼女らは、たとえ意図しなくても、近代的民族観・国家観を実質的に相対化してきたのである。さらに、グローバリゼーションの波にさらされている現在も、東部方言は農村地域を中心に広く継承されつつある。東部方言はこれからも新たな変容を遂げながら、長い間存在し続けるのではないかと思われる。

² 東部の出身者は人数が多いだけでなく、「ハングリー精神が強い」ともよくいわれているので、大学・専門学校入学者には、東部出身の若者は圧倒的な部分を占めている。そのうち、教員養成専門を卒業した東部の出身者は内モンゴル各地の学校に就職し、授業を教えている。そこで東部方言は学校教育を通して、各地のモンゴル語の口語に影響を与えかねないと考えられている。フフバートル（2007）366 頁。

第3節 民族意識をめぐる問題

前述のように、多くの調査対象者は、東部方言を「醜いモンゴル語」と見ている。しかしそれでも、東部方言を話せることをモンゴル族であることの重要な指標だと考えている人も少なくない。

しかし彼・彼女らの考えている「モンゴル族」の境界は、ただ言語だけで画定されるものではない。そこには文化習慣、歴史、民族性、血統ないし本人との社会的・主観的な遠近距離といった言語以外の要素が多数存在する。また、公定民族という中国特有の法的・政治的カテゴリーも、「民族の境界」を規定する一つの重要な要素として機能している。すなわち、彼・彼女らの認識している「モンゴル族」は、異なる指標と状況に応じて現れる流動的で可塑的な概念である。

序章で取り上げたシンジルト（2003）および温都日娜（2007）は、こうした民族の境界付けについて考察を行っている。

青海省の「チベット化したモンゴル族」を研究したシンジルト（2003）は、現地の人々による「ソグ」（彼らの日常的に使用しているチベット語では「モンゴル」の意）についての多様な語りに注目した。「ソグ」には、日常の文脈で使われるもの（日常の文脈で使われる「ソグ」も、語りの文脈によって多様な意味を表す）、チベット人による他称、他の地域のモンゴル族をさすもの、公定民族をさすものといったさまざまな意味がある。現地の人たちは、時に異なる「ソグ」の間のズレで葛藤を感じることもある。たとえば彼・彼女らは、自分たちのことについて、モンゴル語が喋れないから、「完璧なモンゴル人」ではないと認識している。そこで現地政府は学校教育にモンゴル語を導入し、次世代を「完璧なモンゴル人」として育成することになり出す。しかし、現実の生活過程に基盤をもたないモンゴル語は、彼・彼女らにとって容易に習得できるものではない。結局、モンゴル語「復活」運動はほとんど成果を収めなかった。こうした中、一部の人は「チベット語を話すようになったからといって、チベット人になったわけではない」と考え、モンゴル語でモンゴル族の境界を画定することを否定するようになる（シンジルト（2003）272-289頁）。これは内モンゴル東部方言話者たちの民族意識にも通底するものである。

赤峰市におけるモンゴル族・漢族の「族際婚姻」を研究した温都日娜（2007）は、現代中国における「民族（ミンズウ）」には、血統的民族、法的民族、文化的民族、社会的民族といった4つの要素があり、4つの要素はお互いに影響しあって新たな「民族（ミンズウ）」

意識」を形成すると論じている。温都日娜の結論は、本研究においても一定の有効性をもつ。たとえば彼女は、社会的民族を「ステレオタイプ化した民族の伝統的特徴を結びつけて創り出された、社会の期待に応じたイメージとしての民族」と定義する（温都日娜（2007）295 頁）。これは、たとえば政府、マスメディアによって構築された「モンゴル・イメージ」や、調査対象者たちの考えている「民族性」などを通して確認できる。現在のモンゴル族のアイデンティティ形成にとって、社会的民族が機能しているのは明らかである。

しかし温都日娜（2007）は、民族意識形成における階層的な要因を見落としている。シンジルト（2003）は民族エリートと一般民衆との意識の違いに言及しているが、しかしやはりそうした考察はごく一部の事例に限られている。

本研究の結果からもわかるように、確かに階層の違いを超えた民族意識も存在する。たとえば、共通の歴史意識や東部方言に対する言語意識はそうである。

しかし、民族意識の変容・再構築は、均質的に進行するものではない。むしろその内部で、また別の差異も生み出す。本研究の調査に即していえば、特に農民・牧畜民と都市的職業従事者（農民・牧畜民以外の農村・牧畜地域在住者も含む）の間で、こうした差異は顕著である。たとえば農民・牧畜民たちの認識している「モンゴルの」なものは、生活に直接関わりがある即自的な諸要素である。これに対し、都市的職業従事者たちにおいては、政府・マスメディアを通して知ったものが、たとえ自分の生活の文脈から離れたものであっても、それはすべて「モンゴルの」と定義される。

このような認識の違いは、彼・彼女らの現実の生活に対しても一定の影響を及ぼす。そのもっとも典型的な例と思われるのは、都市在住者と農民・牧畜民の間における経済問題への認識の違いである。都市在住者は、農民・牧畜民を怠惰であり、時間概念がなく、出稼ぎに消極的であると批判する。しかし、農民・牧畜民たちはむしろ、自分たちにとってのんびりと生きることは、家族から離れて見知らぬ土地に出稼ぎにいつてあくせく苦勞するよりも幸福なことだと考えている。農民・牧畜民は、一方でモンゴル族は金銭意識が弱く、商売の面では漢族に劣ると認識しながら、他方では出稼ぎを通じて収入を増やすことに消極的である。もちろん彼・彼女らは自分の現状を幸福だとは捉えていない。移動に対しても単純に抵抗感だけを持っているわけでもない。彼・彼女らは、学校教育に対しては、漠然としたいい印象をもっており、子どもには将来、大学に入って、田舎を離れることを期待している。もちろんすべての人が大学に入り、都会で就職できるわけではない。彼・彼女らの子どもの少なくとも一部は農村に戻ってくる可能性が高い。それは客観的には、

彼・彼女らの農村での生活や社会関係の再生産を確保することでもある。彼・彼女らの出稼ぎに対する消極的な態度からは、少なくとも近い将来において、内モンゴル東部のモンゴル族の農耕・牧畜地域での生活や社会構造が急速に弱体化する可能性は低いことがうかがえる。したがって、そうした農耕・牧畜地域の現実の生産・生活に基盤をもつモンゴル語東部方言もまた、たえざる変容を包み込みながら農耕・牧畜地域で広範に使用され続けるだろう。

第4節 今後の課題

以上、本論文では現代中国内モンゴル東部の多言語社会におけるモンゴル族の変容を、諸個人の生活史、生活過程、教育および社会意識に焦点を当てて分析してきた。ただし本研究では十分解明できていないことも多く残されている。現段階では、今後の課題として次の2点を指摘しておきたい。

1つ目は、厳密な言語調査である。これまでの調査は生活誌を中心に行い、言語の調査は副次的だった。具体的に音韻・語彙・統語などの特徴の把握を中心に行い、日常生活でのコミュニケーション、学校教育、マスメディアの影響などをさらに詳細に調査する必要がある。話者の年齢、職業、学歴、移住経験など社会的諸特徴にも留意して調査を継続したい。調査方法は参与観察、面接聞き取りで行う。

2つ目は、都市における新たなハイブリッド言語の変種が存在するか否かを確認し、もし存在すればそれはどのような形で使われているかについての調査である。東部方言をはじめとする東部モンゴル語は、新たな挑戦に直面している。そのもっとも深刻な局面は都市化と考えられる。このことは、調査対象者たちの子どもの言語接触から明瞭に感じられる。すなわち農耕・牧畜地域では、モンゴル語の環境が比較的整っており、子どもは仮に漢語学校に通っても、地域社会の中でモンゴル語と接触するチャンスが多く、モンゴル語の口語を習得しやすい。これに対し、都市のモンゴル族の子どもたちについては、「モンゴル語がほとんど話せない」という親の声が聞かれる。しかしその一方、上の世代が漢語が堪能ではないため、または親の積極的な働きかけにより、「モンゴル語の口語をうまく使える」という声も散見される。ただしこれらはあくまで親からみた子どもの言語能力であり、子どもが実際にどのように言語を使用しているのかは、子ども自身を対象とした綿密な調査

をしない限り、明確には把握できない。

参考文献・資料

【文献】

日本語：

- 浅野慎一（1995）「「生活と社会変革の理論」の発展的継承に向けて」『北海道大學教育學部紀要』65号
- 浅野慎一（1997）『日本で学ぶアジア系外国人－研修生・留学生・就学生の生活と文化変容』大学教育出版
- 荒井幸康（2006）『「言語」の統合と分離－1920－1940年代のモンゴル・ブリヤート・カルムイクの言語政策の相関関係を中心に』三元社
- 上田信（2005）『海と帝国－明清時代（中国の歴史）』講談社
- 王柯（2005）『多民族国家 中国』岩波新書
- 岡田英弘（2004）『中国文明の歴史』講談社現代新書
- 岡本雅享（1997）「中国における少数民族の承認」『中国研究月報』592号
- 岡本雅享（1999）『中国の少数民族教育と言語政策』社会評論社
- 小川佳万著（2001）『社会主義中国における少数民族教育－「民族平等」理念の展開』東信堂
- オヨーンゲレル（2007）「近代における内モンゴル東部の都市－ジョーオダ盟を中心に－」モンゴル研究所
『近現代内モンゴル東部の変容』雄山閣
- 温都日娜（2007）『多民族混住地域における民族意識の再創造－モンゴル族と漢族の族際婚姻に関する社会学的研究』溪水社
- 加々美光行（2008）『中国の民族問題－危機の本質』岩波現代文庫
- 郝維民（2004）「内モンゴルにおける民族区域自治」『中国21』19巻
- 康峪梅・康越・新保輝幸（1998）「中国内モンゴル自治区の環境問題と社会経済政策」『高知論叢』61号
- 小長谷有紀・シンジルト・中尾正義編（2005）『中国の環境政策「生態移民」——緑の大地、内モンゴルの砂漠化を防げるか？』昭和堂
- 斯波義信（1992）「移住と流通」『東洋史研究』51（1）
- 篠原清昭（2002）「教育の市場化による国家ナショナリズムと少数民族教育自治の変容－現代中国の場合」
『岐阜大学教育学部教育学・心理学研究紀要』15巻
- 志水宏吉・清水睦美編著（2001）『ニューカマーと教育－学校文化とエスニシティの葛藤をめぐって』
明石書店
- 周飛帆（2000）「多民族国家中国の教育問題」『言語文化論叢』7号
- シンジルト（2003）『民族の語りの文法－中国青海省モンゴル族の日常・紛争・教育』風響社

- 思沁夫（セチンフー）（2004）「「蒙生」の就職について—内モンゴル大学の事例より」『中国 21』19 巻
- ソロンガ（2006）「中国内モンゴル自治区における民族教育の現状：都市部のモンゴル族家族の生活実態を中心に」『愛知県立大学大学院国際文化研究科論集』7 巻
- テグス（2009）「統一文字への夢——1950 年代中国におけるモンゴル語のキリル文字化運動」ユ・ヒョジョン&ボルジギン・ブレンサイン『境界を生きるモンゴル世界——20 世紀における民族と国家』八月書館
- 中島勝住（1985）「中華人民共和国における少数民族教育問題」小林哲也・江淵一公編『多文化教育の比較研究』九州大学出版会
- 中島智子（1998）「オーストラリアの多文化教育と学校改革」中島智子編著『多文化教育——多様性のための教育学』明石書店
- BAKHRONOVA, Munisa（2008）「民族的マイノリティの言語選択とアイデンティティ—旧ソ連中央アジア・ウズベキスタンの学校教育現場の事例から」『言語情報科学』6 号
- ハタノ、リリアン・テルミ（2006）「在日ブラジル人児童の教育から見る日本社会の多民族化状況」『立命館言語文化研究』17（3）
- ハス額爾敦（ハスエルデネ）（2005）「中国少数民族地域の民族教育政策と民族教育の問題：内モンゴル自治区の民族教育を中心に」『多元文化』5 巻
- ハスゲレル（2005）「中国におけるモンゴル民族教育の構造と課題—教科書分析を中心に」『国際教育』11 巻
- 平野聡（2004）『清帝国とチベット問題—多民族統合の成立と瓦解』名古屋大学出版会
- 布施鉄治（1976）「社会機構と諸個人の社会的労働—生活過程」『北海道大學教育學部紀要』26 号
- フフバートル（2007）「ことばの変容からみた「東内モンゴル」—内モンゴルの言語統合と東部方言」モンゴル研究所『近現代内モンゴル東部の変容』雄山閣
- 古谷賢一（2005）「カナダにおける多文化主義とエスニシティ、そして先住民：先住民の帰属意識の考察」『人間文化研究（名古屋市立大学大学院人間文化研究科）』3 号
- フレルバートル（1997）「内モンゴル自治区の民族教育をめぐる諸問題」田中克彦等編『言語、国家、そして権力』新世社
- ブレンサイン、ボルジギン（2002）「農地化から沙漠化へ—内モンゴル東部「草原」地帯の変容」『東南北』
- ブレンサイン、ボルジギン（2003）『近現代におけるモンゴル人農耕村落社会の形成』風間書房
- ブレンサイン、ボルジギン（2009）「中国東北三省のモンゴル人世界」ユ・ヒョジョン&ボルジギン・ブ

- レンサイン『境界を生きるモンゴル世界——20世紀における民族と国家』八月書館
- 包聯群（2008）「中国黒龍江省ドルブットモンゴル族の言語教育実態」『東北アジア研究』12号
- 前田耕司（1998）「オーストラリアの少数民族に関する階層論の考察」『国際教育』4号
- 松井生子（2004）「少数民族と学校・国民統合—ベトナム北部山地・バンフォー社における一考察」『民族社会研究』3号
- 松本ますみ（1999）『中国民族政策の研究—清末から1945年までの「民族論」を中心に』多賀出版
- 宮島喬（1999）『文化と不平等：社会学的アプローチ』有斐閣
- 宮脇淳子（2002）『モンゴルの歴史——遊牧民の誕生からモンゴル国まで』刀水書房
- 茂木敏夫（2001）「中華世界の構造変動と改革論—近代からの視点」『現代中国の構造変動』
- 森岡修一（2005）「ロシアにおける言語とエスニック・アイデンティティの諸問題」『大妻女子大学紀要・文系』37
- 柳沢順一（2002）「多文化主義における継承言語教育の行方—日系カナダ人のアイデンティティ保持例から」『北陸大学紀要』26号
- 吉田順一（2007）「序論 近現代内モンゴル東部とその地域文化」モンゴル研究所『近現代内モンゴル東部の変容』雄山閣
- 李明玉（2005）「中華民族の概念とエスニシティ」『北海道大学教育学研究科紀要』96号
- ASIMURA, Takasi（2001）「モンゴル語における消滅の危機」
<http://homepage1.nifty.com/asimura/bayidal.html>

中国語：

- 丁石慶・郭蕊（2007）「蒙古族社区与家庭語言調查分析」丁石慶編『社区語言与家庭語言——北京少数民族社区及家庭語言調查研究之一』民族出版社
- 金志遠（2000）「從内蒙古民族教育最突出問題的一組數字引起的思考」『民族教育研究』2000年第4期。
- 『内蒙古大辭典』編委會（1991）『内蒙古大辭典』内蒙古人民出版社
- 内蒙古自治区哲里木盟地方誌編纂委員會（2004）『哲里木盟志』方志出版社。
- 宋迺工編（1987）『中国人口 内蒙古分冊』中国財政經濟出版社
- 孫兆文、蘇利婭主編（2004）『民族区域自治與蒙古族的發展進步』内蒙古教育出版社
- 烏蘭因克（1997）「内蒙古自治区民族教育最突出的問題、其產生原因及對策」『民族教育研究』1997年第2期。
- 札奇斯欽（1989）『蒙古文化與社會』台灣商務印書館

中共通遼市科爾沁区委地方誌編纂委員會（2002）『通遼市志』方志出版社

「蒙古族人口」中華人民共和國國家民族事務委員會

(<http://www.seac.gov.cn/gjmw/ssmzx/2005-08-21/1176019928733790.htm>)

「內蒙古自治區民族教育工作情況匯報」內蒙古民族教育網

(<http://www.nmgmzjy.com/article.asp?id=131>)

「通遼概況・人口」通遼政府網

(http://www.tongliao.gov.cn/gaik_text.asp?bid=197)

「通遼市 2005 年國民經濟和社會發展統計公報」中國統計信息論壇

(<http://www.tjcn.org/bbs/viewthread.php?tid=842>)

「扎魯特旗歷史沿革」扎魯特人民政府網

(<http://www.nmzlt.gov.cn/Article/ShowArticle.asp?ArticleID=25>)

英語：

Bilik, Naran(1998) “Language Education, Intellectuals, and Symbolic Representation: Being an Urban Mongolian in a New Configuration of Social Evolution”, Safran, William(ed), *Nationalism and Ethnoregional Identity in China*, London, Portland: Frank Cass Publishers.

モンゴル語：

Жамсран Л., & В.Эрдэнэбаяр & Н.Алтанцэцэг(1996), *Хятад Дахь Монголчууд*, Монгол Улсын Шинжилэх Ухааны Академи, Дорно дахин Олон улс судлалын хүрээлэн. Улаанбаатар: Сүхбаатар компани.

kürelša nairayuluysan(1993), *ᠵᠢᠷᠢᠮ ᠤᠨ ᠰᠦᠮᠡᠬᠡᠢᠳ*, öbör mongyol un soyol un keblel un qoriy-a.

qurča & čangming(2001), *qorčin tobčiyān*, ündüsüten nu qeblel un qoriy-a.

ünenči, d.(2002), *man nu kin nü mongyul kele*, liyooning un ündüsüten nü keblel ün qoriy-a.

【統計資料・地図】（非公示の資料を含まない）

內蒙古自治區統計局・內蒙古自治區第五次人口普查辦公室編（2002）『內蒙古自治區 2000 年人口普查資料』
中國統計出版社

商務印書館（1908）『大清帝國全圖』第 3 版

星球地圖出版社（2007）『中國地圖冊』第 3 版

星球地图出版社（2008）『内蒙古自治区地图册』第2版

『哲里木的四十年』編委会（1987）『哲里木的四十年』民族出版社

中華人民共和国内蒙古自治区統計局編（2005）『内蒙古統計年鑑』中国統計出版社

中華人民共和国内蒙古自治区統計局編（2007）『内蒙古統計年鑑』中国統計出版社

謝 辞

まず初めに、指導教官の浅野慎一先生に心より感謝いたします。論文執筆にあたって、浅野先生にいろいろとご丁寧に指導していただきました。また様々な形で批判的なコメントをいただき、知的に大いに刺激されました。社会科学の知識がほとんどゼロに近かった一理学系卒業生の私を温かく受け入れてくださり、博士前期課程から多くの専門的な基礎知識を教えてくださいましたことにも大変ありがたく思っております。

次に、副指導教官の山崎健先生、太田和宏先生、審査委員の今谷順重先生、澤宗則先生に感謝いたします。論文執筆にあたって、異なる視点からの貴重な意見とご激励をいただきました。深くお礼を申し上げます。

現地調査にあたって、多くの方々のお世話になりました。まず、実態調査を快く応えてくださった調査対象者たちに心より感謝します。次に、各地での調査を可能にしてくれた方々と調査対象者を紹介してくれた方々に感謝したいです。ホルチン区都市部での調査は、包玉成氏、ダゴラ氏にご協力いただきました。Ma ガチャーは筆者の原籍地でもある。調査時に実兄のフレル・バートルの家に泊まりました。Nb ガチャー滞在中はトグトホ氏の家に泊まらせていただいたおかげで、調査は順調に実施できました。B 鎮での調査は、高校時代からの友人であるブレン氏とダイチン氏の協力で可能になりました。B 鎮の朱金海鎮長は情報提供だけではなく、食住の面でも様々な便宜をはかってくれました。また B 鎮文化センター長のブレント氏、Ba ガチャーの村長ジャムス氏、Bb ガチャーのホンゴルバートル氏、Bc ガチャーのエルデネホワ氏にお世話になりました。以上の方々に深くお礼を申し上げます。

また、大学院人間発達環境学研究科の先生たちが日本政府国費研究留学生（平成 21 年度）として推薦してくださったおかげで、外国人留学生の私は安心して研究に取り組むことができました。非常にありがたく思っております。

論文執筆の段階で、人間発達環境学研究科社会環境論コースの大学院生の皆様にご協力をいただき、同時に貴重な助言をいただきました。大変感謝しております。

最後に、両親をはじめ、私の勉強と研究を長い間支えてくれた家族の皆さんに感謝したいです。家族の支えがなかったら、何もできなかったと思います。

本当に多くの方々のご指導、ご支援をいただきました。いずれも、肝に銘じて、これからの研究活動にも生かしていきたいと思っております。

2009 年 12 月

アルタン・バートル